

令和6年度

山形県私立幼稚園・認定こども園協会
紀要
(第54号)

公益社団法人 山形県私立幼稚園・認定こども園協会

目次

| | |
|------------|---|
| 教育研究委員長 挨拶 | 1 |
|------------|---|

第1編 研修会報告

| | |
|-----------------------------|----|
| 設置者・園長等研修会 | |
| 第1回 | 4 |
| 第2回 | 7 |
| 教職員研修会 | |
| 〈全般向け〉 | |
| 第1回 | 10 |
| 〈若手リーダー向け〉 | |
| 第1回 | 13 |
| 第2回 | 18 |
| 〈中核・専門リーダー向け〉 | |
| 第1回 | 21 |
| 第2回 | 25 |
| 〈専門領域〉 | |
| 保健衛生・安全対策 | 28 |
| 食育 | 32 |
| 新規採用・若手教職員等研修会 | 35 |
| 幼児教育研修大会 | 39 |
| 教員研修大会 酒田大会 | |
| 第1分科会（認定こども園杉の子幼稚園） | 41 |
| 第2分科会（アテネ認定こども園） | 45 |
| 第3分科会（認定こども園酒田幼稚園） | 50 |
| 第4分科会（認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム） | 56 |
| 第5分科会（認定こども園浄徳幼稚園・じょうとく保育園） | 62 |
| 第6分科会（認定こども園天真幼稚園） | 68 |

第2編 個人研究・共同研究発表

| | | |
|------|----------------------------|-----|
| 山形地区 | 金井幼稚園 | 74 |
| 村山地区 | 楯岡幼稚園 | 83 |
| 米沢地区 | 幼保連携型認定こども園ひばりが丘幼稚園 | 92 |
| 置賜地区 | 認定こども園まつかわ幼稚園 | 102 |
| 最上地区 | 認定こども園向陽幼稚園 | 111 |
| 鶴岡地区 | 羽陽学園短期大学附属幼保連携型認定こども園大宝幼稚園 | 121 |
| 酒田地区 | 認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム | 131 |

第3編 教育研究活動報告

| | |
|--------------|-----|
| 研修事業実績 | 144 |
| 教育研究会部員一覧 | 145 |
| 教育研究委員会の活動記録 | 146 |

教育研究委員長挨拶

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を
～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

教育研究委員長 後藤 裕美



前任の高橋栄美子研究委員長より後を引き継ぎ、令和6年度より山形県私立幼稚園・認定こども園協会の教育研究委員長になりました、東北文教大学附属幼稚園教頭の後藤裕美と申します。これまで教育研究委員会を牽引してくださった諸先輩方を目標にしながら、山形県私立幼稚園・認定こども園の保育の質向上に向けて精一杯努めていく所存です。どうぞ宜しくお願い致します。

さて、令和6年は元旦の能登半島地震に始まり、山形県では5月の南陽市での大規模な山林火災、7月には庄内最上地区での記録的大雨がありました。記録的大雨では沢山の方が被害に遭われ、今もなお避難生活をされている方もいると報じられています。子どもを預かる保育施設や教職員の方々も浸水等の被害に遭われたとお聞きしております。そのような大変な中、10月11日（金）には山形県私立幼稚園・認定こども園教員研修大会酒田大会が行われ、盛況を以って終えることができました。酒田地区の公開保育をしてくださった園の皆様、そして支えてくださった皆様に深く感謝申し上げます。

また、この紀要に報告がある通り、今年度も講師を招いての研修会が計画通り行われ、参加された教職員の方の日々の保育に活かされているのではないかと思います。園ごとの個人研究も子ども達の姿を真摯に受けとめ、語り合い、振り返りをしながら、保育の質向上に向けて研鑽を積み重ねられていることがわかります。

子どもを取り巻く環境や社会情勢が日々変化し、長時間保育や預ける年齢の低年齢化が進み、様々な問題が問い直されています。デメリット部分に焦点がいきがちですが、「こどもがまんなか」を忘れず、子ども達の未来が笑顔であり続けることができるように努めなければならないと考えます。そのためにも、私立幼稚園、認定こども園ならではの保育の質の高さをメリットにし、これからの時代を生き抜いていく子ども達を育成していく役目が、今の私達に求められているのではないかと思います。

最後に、研修会を開催するにあたり、教育研究委員の先生方、各地区の研修研究担当者の先生方、事務局のご尽力に心より感謝申し上げます。

第 | 編

研修会報告

第1回設置者・園長等研修会

期 日 令和6年5月9日(木)
会 場 山形テルサ(山形市)
記録者 学校法人法音学園 米沢西部こども園
園長 高梨 弘子

【概要】

テーマ 子どもの人権・権利の理解
～子どもの権利条約の理解・保育実践との共有～
演 題 保育施設における子どもの人権、
そして不適切な関わりを防ぐためにやるべきこと
講 師 株式会社 保育のデザイン研究所 研究員 高城 恵子 氏

【内 容】

1 子どもの人権・人格の尊重に関連する法令等

- 子どもの権利条約として「第12条 意見を表す権利」「第13条 表現する権利」「第19条 虐待・放任からの保護」等がある
- 子どもにも大人にも「かけがえのない価値を持ったたった一人の人間として尊重される権利」としての「人権」が認められている。子どもが大切にされながら「自分らしく生き、思いやりのある大人へ」と向けて成長していくために必要なものである
- 保育所等の職員による虐待について、児童福祉法を改正し、児童養護施設、障害児者施設、高齢者施設の職員による虐待と同様の規定を設ける。虐待を受けたと思われる児童を発見した者には通告義務がある
- 不適切な保育とは・・・「虐待等と疑われる事案」(保育所等虐待ガイドラインより)
 - ・身体的虐待 ・性的虐待 ・ネグレクト ・心理的虐待
 - ・その他子どもの心身に有害な影響を与える行為 ➡ 早期発見、早期治療が大切
- 不適切な保育が生じる背景
 - ① 保育者一人一人の認識の問題・・・子どもへの適切な関わり方を理解していない
 - ② 職場環境の問題・・・施設における職員体制が十分でない等

2 人権擁護の観点から望ましくない関わりや不適切な関わりについて考えてみよう

<例> 午睡時、なかなか寝つけない3歳児に「いつまでも寝ないと、おやつは無しだからね」と保育者は言った。

その時保育者は何を考えていたのか？

決まった時間に寝てほしい。横になって体力を整えてほしい
子どもが寝たら、溜まっている仕事をしたい・・・

その時子どもは何を感じたか？

ぼくは眠くないのに、おやつ無しはいやだ。先生きらい。悲しい・・・

➡ 普段何気なく言っていることでも子どもにとっては傷付いていることがある人権に配慮していない関わりに気付くこと

○大人が忘れてしまいがちなこと➡「小さな子どもも、ひとりの人間であること」

『子どもの権利条約 — 子どもの最善の利益を守る』

生きる権利、守られる権利、育つ権利、参加する権利

まだ言葉で気持ちを表せない乳幼児も参加する権利はある

➡ それは、**自分の気持ちを表す権利**

○子どもの人権を守ることは保育の基本なのに・・・こんな保育が行われていませんか？

「そんなことばかりしている子は先生は知らない！」・・・怒っていることを知らせたい

言うことを聞かない子どもを「ダメ！！」と大声で叱る・・・きちんと指導したい

「うるさい！」と言って廊下に出す・・・他の子に迷惑だ

➡ 保育者の思い通りに動かそうとする、子どもの人権を無視した行為

○保育者の抑圧的な言動（叱責・暴力）、支配的な言動（命令）

乱暴な言葉、脅す、訴えを無視、完食を強要、からかう、差別的な言動

➡ 子どもの情緒の安定をさまたげる。自己肯定感を阻害する

○もしこのような保育が行われていたとしたら、相手を止める勇気を持ってほしい

3 子どもの人権を守る為に（不適切な関わりを未然に防ぐ為に）

○様々な職種の職員が研修に参加し、人権について学ぶことができる体制作りをする

「人権擁護のためのセルフチェックリスト」（全国保育士会）又は行政や施設のマニュアルをもとに定期的に保育の振り返りを行う

○子どもと大人にとって無理のない保育を行うために、一日の流れ等を見直してみる

➡ 無理のある保育➡切り替えができない、バタバタする、ヒヤリハットが多い

➡ 活動と活動の間の時間を増やす等の見直しを行う。余裕が持てるようにする。

○子どもの興味関心を大切にされた保育活動になっているか。活動や行事の見直しを行う

○職員の負担を減らすために、書類や休み時間のとり方等、働き方の見直しを行う

○職員が一人で悩みを抱え込まないように。困ったときに、周りに「来てください」「助けて」等、互いに言い合える風土をつくっていく

○より良い保育を目指すために、園内研修を設けたり、職員間で日々の保育を振り返り、話し合う機会を持つ。「職員間での対話が生まれる体制整備」をする

<ワーク・・・話し合い>考えてみましょう

●職員間のコミュニケーションがもっと豊かになるために、ご自身の施設ではどんなきっかけづくりが考えられますか？

・明るくあいさつ ・園長が自ら動き、話をする

・食事を通して ・研修での交流

・休憩時間の確保 ・書類を減らす ・・・・etc



4 より良い保育に向けた保育の実践

○やってほしくない行動をとる子どもへの言葉掛け➡危険な事等はストレートに「危ない」「それはいけない」と伝え、その後、何故そうなのかも伝える（真剣に）

・それ以外の時『禁止ワードの変換』➡「してほしいことワード」に変換してみよう

～しようね、 ～するといいね ～してみたらどうかな、等

- ・言葉だけでは限界がある⇒室内環境や生活スケジュールを変える

例) 子どもたちが長い廊下を走り回ってしまう→植物を置く→改善

- 食事や排せつ等生活習慣のシーンでは、どこまでが無理強いとどこまでがそうでないのか、どう関わるか、各施設で具体的なケースを基に話し合い、方向性を確認しておく
- 「いやだ～」 「食べたくない」⇒子どもの行動には全て意味がある。子どもは何を思っているのか・・・子どもとの対話を大切にする

5 不適切な関わりが発生したときの対応

- 不適切な保育が起こる背景や理由として考えられることの一例としては、「かつてやっていた保育をやっている」「この子のためにこうなってほしい、こうあるべき思いが強過ぎ」「一日の計画に縛られ過ぎ(～までに終わらせないと・・・)」「自分の立場を守るため、厳しくしてしまう」「忙し過ぎる、疲れている、個人的に心配事がある」「その人自身の育ち、気質」等が考えられる
- 不適切な関わりをしていると思われる保育者への対応例
 - ・園全体の課題として捉え、チームで動く。話し合い、迅速に対応する
 - ・気になる保育者自身が実は困っている、悩んでいることも多い。相手への気遣いをもちつつ伝えると、相手の心に響き、受け止めてもらいやすい
 - ・改善したい関わりについては、ミーティングで一つの事例として取り上げ、ロールプレイで再現して子どもの立場で考え、感じる体験をするのもよい

<おわりに>

～日々の保育の中で、自分の言葉掛けや関わりは「**子どもにとってどうか?**」を考え、いつも「**子どもとの対話を大切に**してほしい」～

～子どもたちからおとなへのメッセージ～

「川崎市子どもの権利に関する条例」より

まず、おとなが幸せにいてください。おとなが幸せ

じゃないのに子どもだけ幸せにはなれません。おとなが幸せでないと、子どもに虐待とか体罰とかが起きます・・・

～ **子どもも大人も大切に守られる施設**・・・職員の人権を守る、職員の笑顔が大切 ～



【研修を終えて】

「チェックリスト」を基に自園の保育を振り返る良い機会となった。不適切な関わりを防ぐ為には、常に「子どもにとってどうか・・・」と振り返りながら保育をしていくことや、職員同士が何でも言い合える関係性をつくるのが大切であることを学んだ。

最後のメッセージ・・・「子どもが幸せになるために、まず、おとなが幸せにいてください」・・・とても心に響く言葉だった。大人の笑顔の中でこそ、子どもたちは安心して生活することができる。職場環境や現場での様々な問題を見直し、大人も子どもも皆が幸せを感じられる園づくりを目指したい。

第2回設置者・園長等研修会

期 日 令和6年6月10日(月)
会 場 山形テルサ(山形市)
記録者 学校法人天竺学園 認定こども園小松幼稚園
理事長・園長 天竺 善照

【概要】

テーマ 新制度の見直しと今後の園経営の在り方について
演 題 子ども子育て支援新制度の見直しと今後の園経営のあり方について
講 師 全日本私立幼稚園連合会 認定こども園委員会
副委員長 石田 明義 氏

【内 容】

2015年にスタートした「子ども・子育て支援新制度」は、2025年に10年が経過し見直し時期を迎える。とくに「公定価格」の見直しが焦点となる。

今後、どういう園経営をしていくか、未来を見据え、制度の変化に追随していかなければならない。

○私立幼稚園に降りかかる波 今回は「第4の波」か？

- 第1の波・・・学校法人化の波(昭和50年代) → 寄付行為の制定
- 第2の波・・・子ども子育て支援新制度の施行(平成27年) → 認定こども園化
- 第3の波・・・幼児教育・保育無償化(令和元年) → 11時間無償化の問題
- 第4の波・・・(令和6・7年～) こども家庭庁創設、アフターコロナ、誰でも通園制度開始

○子育ては、負担ではなく「投資」である。

例) 魚が欲しい・・・魚を与えるか(現物給付か)、釣り方を教えるか(教育か)

～前半のテーマ～

「子ども・子育て支援新制度」の問題点について

(1) 「子ども・子育て支援新制度」の問題点・課題点について

- ・公定価格単価、中でも特に基本分単価の問題
 - 10年間で最低賃金や物価が上昇しているにもかかわらず、基本分単価は25,700円を全国保育料の平均と捉えた新制度当初のまま10年間ほぼ横ばいで推移しており、物価上昇の中で基本分単価が上がらない問題は、経営を圧迫しているのではないか。
- ・地域区分、8区分の格差の問題
- ・園規模により収支格差が大きい。定員設定により収支格差が大きくなっていく。
 - 公定価格基準額(基本分単価25,700円)が定員区分により変動しており、保育料無償化について、施設ごとに保護者間で不平等が生じている。
- ・制度の複雑さ、事務量の増大、煩雑さの問題
- ・2号児、3号児合算の弊害
 - 2号・3号を分離する方式に見直した方が園の健全経営に期するものと考えられる。
- ・幼保連携型のインセンティブがない

・文科省・子ども家庭庁の二つにまたがる弊害

- ・障がい児の加配
- ・保育教諭免許証の存在有無
- ・保育人材不足＝質の低下となっている。
- ・無償化の問題点



(2) 「幼児教育・保育無償化制度」の問題点・課題点について

- ・ 11 時間保育無償化の問題（保育標準時間）
 - 最大 11 時間無償化のため、愛着障がい、ネグレクトの温床が危惧される。検証が必要では無いか？
 - 「幼児教育の無償化」と「保育の無償化」の趣旨は異なる。
前者は幼児教育の質の向上、後者は保護者の経済的負担軽減と少子化対策・労働雇用政策が目的。
 - 11 時間無償化により、いっそうの保育士不足・保育の質の低下を招いている。
- ・ 処遇改善加算キャリアパス研修 60 時間
- ・ 処遇改善加算 I の基準年度前年度対比問題
 - 前年度対比で園児数が減少した場合、園児数減少による減収の影響を受けて賃金改善総額が下がるはず。今後の園児減に向かう情勢では、経営を圧迫しかねない。
- ・ 土曜日減算
- ・ 障がい児加配について
- ・ 保育人材不足＝保育の質の低下
- ・ 家庭教育力低下
- ・ 愛着障がい増加
- ・ 2 歳児と満 3 歳児の格差（無償化対象児）

《愛着障がいが増えている》

各分野からの 11 時間保育による幼児の成長発達への影響の見解が出ている。

① 医療面・・・小児科医からの見解（新潟市小児科医会会長 柳本利夫氏）

保育時間が 11 時間になると、残りの 13 時間で睡眠・食事・入浴その他を行うことになるが、幼児期には 10 時間の睡眠（1 歳児は 12 時間）が必要。

乳幼児期は、親子の愛着関係が重要な時期。愛着は、発達障がいや虐待問題とも関連してくる。

低年齢児での長時間の集団生活は、感染症疾患のリスクが高まる。

② 睡眠学・・・睡眠学専門家からの見解（江戸川大学教授 福田一夫氏）

就学前子どもの睡眠時間は平均 11.5 時間。24 時間から睡眠時間と保育 11 時間を引くと残りは 1 時間半しかなく、その中で朝食・夕食・入浴をこなすのは到底無理。

③ 精神科・・・精神科医からの見解（精神科医岡田クリニック 岡田尊司氏）

先天的要因とは別に養育者から長時間離されたりした子どもに発達障がいと類似した状態がみられる。これは、発達障がいではなく愛着障がい。養育者との安定した絆の形成に失敗したことによる発達の遅れや対人関係の問題、情緒不安定などを呈するもの。

～後半のテーマ～

これからの付加価値を考える。これからの時代に求められる「リテラシー」と「マネジメント」について

(1) アフターコロナの時代

- 「OECD education2030 プロジェクト」これからの時代は、インターネット・AI との共生社会と捉えている。
- 『令和の日本型学校教育』中央教育審議会（答申）（2021年1月）を受けて
 - ・GIGA スクール構想
 - 社会全体の Dx 化の中で。AI ドリルやスタディログの活用。STEAM 教育。
 - ・学校における働き方改革
 - 教職員の働き方改革
 - ・「全ての子どもたちの可能性を引き出す」ため「個別最適な学びと協働的な学びの実現」へ
 - ・Society5.0 の時代

(2) これからの時代に求められる「自己の存在意義」とは

- 「ウェルビーイング」
 - 個人・社会の幸せを目指すこと。
 - ～ 一人一人の多様な幸せであるとともに
社会全体の幸せでもあるウェルビーイングの理念の実現を目指すこと ～
- ・近江商人「三方良し」
- ・「パーパス」（存在意義）
 - 世間が良くなってほしいという思いを持つ。
 - あなたの園の存在意義は？社会において、どのような責任を果たすのか？考える。
- 「変わらないために、変わり続けること」倉橋惣三の名言から
各園は建学の精神を守りながら、時代に即したアップデートを怠らないことが大切。

【研修を終えて】

「子ども・子育て支援新制度」も10年目を迎え、次の10年に向けた見直し時期となった。この10年間は、「施設型給付」・「認定こども園」への移行という新制度への対応に追われ、新たに乳児保育に取り組んだ園や、施設を改築整備して充実した園も多いことと思う。

多くの私立幼稚園にとって、経営規模の安定・充実につながったという面はあると思う。その反面、複雑化し、従来よりも難しい課題を抱えてきていると思う。

これまでは自園の発展という基軸で考え判断し行動してきたこの10年を経て、次の10年には、地域における自園の存在意義を明確に示し、見える化し、保護者や地域のニーズにも応えていかなければ淘汰されていくだろうということをお示しいただいたという感想を持った。

各園が建学の精神を守りながら、時代に即したアップデートを怠らないこと。地域社会における自園の存在意義と社会的責任を自らに問い直して、教職員と保護者や地域住民に対してそれらを広く示して実行していくことが大切です。

〈全般向け〉教職員研修会

期 日 令和6年6月25日(火)
会 場 山形テルサ(山形市)
記録者 学校法人山形つのぶえ学園 千歳認定こども園
保育教諭 西森 恭子

【概 要】

テーマ 子どもの育ちと経験の理解
演 題 子ども理解と保育者の援助の在り方
講 師 和泉短期大学 児童福祉学科 准教授 久保 小枝子 氏

【内 容】

1. 今、保育に求められていること

〈幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育、保育要領の改訂にあたり〉

(改訂の重要なポイント)

・教育的な役割という点で、3施設(幼稚園、保育園、認定こども園)が同じ機能を持つことが改訂の狙い

園ごとの個性の違いを尊重しつつ、保育内容・方法の基本原則はできるだけ同一にすることとなった。

(改訂のきっかけ)

ヨーロッパ諸国が20世紀末から保育・幼児教育重視策を具体化し始めた。

その根拠として、ヨーロッパ全体をEUと言う1つの大きな政治経済圏に施策を断行したが、各国の政策がバラバラで効果は上がらなかったため、政策・行政の各分野で実態調査と今後の方向性を議論したところ、21世紀の社会・経済政策上各国の人材の質が決定的に重要になることが、わかった。人材の質を上げるためには、保育・幼児教育を重視することが最も効果的だと鮮明になった。

具体的に目指されている3つの側面

「資質・能力を育てる」という言い方で目標概念を新たなことばで明確にした。

- ① 個別の知識やスキルを身につけること
- ② 柔軟に考えたり、粘り強く工夫したり、友だちと相談したりしながら考える力、工夫する力、判断力なども伸ばす
- ③ もっと学びたいという意欲や態度が身につくようになる。

言い方を変えると「認知能力と非認知能力」を合せて身につけようというもの。

知識偏重型から自発的な学び(アクティブラーニング)(思考力や表現力が主体的に育む)が重視される。

〈乳幼児の学びでは〉

- ・主体性を尊重すること。
- ・環境を通じた教育であること。
- ・遊びや生活中心であること。

⇒好奇心や探究心など気持ちがアクティブであることが大切。又、乳幼児期の学びは受け身に学ぶのではなく子どもの主体性を尊重した学びが大切。この時期の育みたい資質、能力を育てていく必要がある。

→資質、能力（3つの柱）

- ・知識、技能の基礎 子ども達が気付いたり、わかったりできるようになる
- ・思考力、判断力、表現力の基礎 子ども達が考え、試し、工夫し、表現したりする
- ・学びに向かう力、人間性 子ども達がやりたいことを見つけて粘り強く取り組む

→今回育てるべき具体的な資質、能力が示された

↓

幼児期の終わりまでに育てて欲しい10の姿である。

「10の姿」と「カリキュラム・マネジメント」を合せ目標、実践、振り返りの回路を鮮明にした保育を要請したいと定められた

「10の姿」→①健康な心と身体②自立心③協同性④道徳性⑤社会との関わり⑥思考力⑦自然との関わり⑧図形、文字への関心⑨言葉の伝え合い⑩豊かな感情

「カリキュラム・マネジメント」→計画→実行→評価→改善→計画へと戻る

<環境を通した教育>

今回の改訂では「環境を通した教育」を重視し「環境を通した保育」とは何かを改めて考える必要がある。

環境作りの2つのポイントとして、物的環境、人的環境がある。

(保育環境の事例を通して)

A園の保育のDVDを見て子ども達が環境を通して遊びや生活の中で何を学んでいるかを考えてみた。

・物的環境→子ども達が園庭で摘んだ草花を保育者は大切に、ドライフラワーなどにしている。子どもの作品から一人一人、個性がでていた作品である。保育室の製作コーナーは、子ども達が使いやすいように工夫されている。自然物をよく使い遊びやプレゼントに使用している。

・人的環境→活動に参加するか、否かは自分で決め、それに対して保育者は寄り添った援助をしている。行事を行う時は保育者が一方的に内容を決めるのではなく、子ども達の声や考えを大切にしている。

・「一人一人の子どもが主体である」

保育は子ども自身が自分で自分の行動を選ぶ事を保証することが大切である。

様々な保育の課程で子どもが自分で主体的に行動を選ぶことを保証していく丁寧さが大切である。

・「体験を共有することが保育の中で大切である」

子どもが体験を言葉化することで仲間と共有し、意見を聞き、体験が次第に共有され「明日もやってみよう」に繋がっていく。

→次の日が今日の続きになり、その次の日もその続きとなり保育が繋がっていく

⇒これが資質、能力を意識的に育てていく大事な方法になる

2. 子どもの「やりたい」が引き出される保育の環境

実践の記録のDVDから考え、他の保育者の意見を聞いてみた。

① 登ってやる（3歳児）より。

園庭の屋根登りと呼ばれる大型遊具、次々と屋根の斜面を駆け上がる大きい組の姿それを真似る3歳児Mは、この遊びを通して何を学んでいるのか。

→成功したときの達成感、最後まで諦めない気持ち、またやってみたいという意欲へとつながる、傍に最後まで応援してくれる保育者がいるから頑張ることができる、保育者は子どもと同じ気持ちで見守る、子どもの出来たという気持ちを大切に作る。

② 運んでハイタワー（5歳児）より。

運動会の競技を通して見られた子ども達の姿。この活動を通して何を学んでいるのか。

→一人ひとりが意見を出し合い、それを形にしていく喜び、勝ったときの嬉しさ、悔しさが次に繋がっていく、友だちと協力して一つのものをつくる、保育者は簡単に答えを出さず子どもの声に耳を傾ける。

→子どもが何かに挑戦したいとき試しに体験してみることで「上手くいった」「思ったよりもできた」「嬉しい」と思えるようになる。

<保育者の役割とは>

1 子どもが思わず挑戦したくなる遊びの環境をつくる

→環境のポイントとして子どもができることとできないこととの間の「できそうなこと」「やってみたくなること」を用意する。

2 こどもの時間に目を向ける

→自分のやりたいことに取り組むことができるように、時間としての環境に配慮する。

3 感情体験がもたらす協同性と創造性

<結果ではなくプロセスが重要である>

→（例）運んでハイタワーより。練習を繰り返す中で勝ってうれしい、負けて悔しい、次は勝ちたい等、様々な気持ちを体験する。こうした感情体験が子どもの協同性を支える原動力となる。

<まとめ>

→幼児期に経験しなければならない様々な経験を保証することは、子ども達の人格の基礎を形成すること。園とは、友達と集団生活を送ることで様々な社会生活に必要なスキルを獲得し遊びの中で喜び、葛藤を体験し自己拡大していく場である。遊びの中には子どもが成長し発達する糧となる体験が数多く含まれている。子どもが環境に関わって生み出す発意の活動としての遊びを時間的、環境的に保証することが大切である。

【研修を終えて】

研修を受講し、子ども達は遊びを通して育つこと、そして主体性を大事にした保育を行う事が大切だと改めて感じました。又、答えを出さない保育という言葉が印象に残りました。保育者が先回りせずに、子どもの声にしっかりと耳を傾け子どもと共に保育を作っていくことが理想の保育であると感じました。これからも子ども達の心に寄り添う保育を目指していきたいです。そして、今回の学びを明日の保育につなげていきたいと思えます。



〈若手リーダー向け〉第1回教職員研修会

期 日 令和6年7月22日(月)
会 場 山形テルサ(山形市)
記録者 学校法人平和学園 ひかり幼稚園認定こども園
保育教諭 工藤 美沙季/森谷 ひかる

【概 要】

テーマ マネジメント、園の一員としての役割
演 題 社会人としての役割
～個人情報の保護、ハラスメントの防止～
講 師 社会保険労務士法人ゆびすい労務センター
代表社員・特定社会保険労務士 平 幸次 氏

【内 容】

○リーダーまでの成長について

| | 新人(1～3年) | 中堅(4年～5年) | 中堅(5年～7年) |
|----------|-------------------|------------------------------------|--|
| 役 割 | 与えられた業務の遂行 | 新人の教育係 新人とベテランのパイプ役 | リーダー |
| 業務内容 | 方針に沿った教育を実践 | 新人保育士や保育実習生の保育指導を行う。行事の企画、実施を担当する。 | 保護者の要望を聞き取り、必要に応じて上司の判断をおおぎつつ、適切に対応する。クラス間の連携や情報共有を主導する。 |
| 成長するためには | 業務の優先順位 効率化を意識 | 計画性及びコミュニケーションスキル | 計画→実行→評価 →改善 調整力 |
| 苦勞すること | 自分のイメージとのギャップ | 人間関係 後輩の指導 | リーダーシップ |
| 楽しいこと | 子供の成長 自分の成長 | 自分で考えたことが達成できる(達成感) | 一番成長できる時期 (完全なる達成感) |

(配布資料3頁)

○リーダーに必要な能力3選

① 自己認識力

自分はどんな強みや弱点を持っているのかを知ることがリーダーとして1番大事である。

コミュニケーションは相手を知ることから始まるが、それ以前に自分を知ることが必要である。

② 言語化

◇言語化とは

(例) あなたは何をしているのですか？

A: 見ればわかるだろ。俺はレンガを積んでいるんだ。

B: 俺はレンガを積んで壁を作っているのさ。

C: 私はレンガを積んで壁を作り、やがてここが学校になります。ここに集まる子ども達がここで勉強をして将来この国に役に立つような人が育ってくれることを期待してレンガを積んでいるのです。

Cが理想であり、言語化した答え方である。保育においては、週案や月案、行事等は何のためにやっているのか、どんな効果が生まれるのかを言えなければならない。



☆Z世代に対しては特に言語化を

特にZ世代（29歳未満）は、何のためにやっているのかが分からないと出来ない人が多く、定期的に業務の目的を認識させる必要がある。「背中を見て育て」「見て学べ」ではなく、失敗しないように事細かに言語化して教えることが大切である。人は上司から教わったやり方でしか部下に教えられない。部下に言語化して教えることで、部下が成長した時にまたその部下に言語化して教えてくれるという好循環が生まれる。

○相性診断テスト

◇相性診断テストとは

交流分析をもとに作成したタイポロジーである。点数の高低で良し悪しを決めるのではなく、あくまで個人のタイプ（性質や特徴）を明らかにするものである。それぞれの項目での点数が近ければ近いほど、タイプが似ていることとなり、共に働く上での相性が良いということになる。

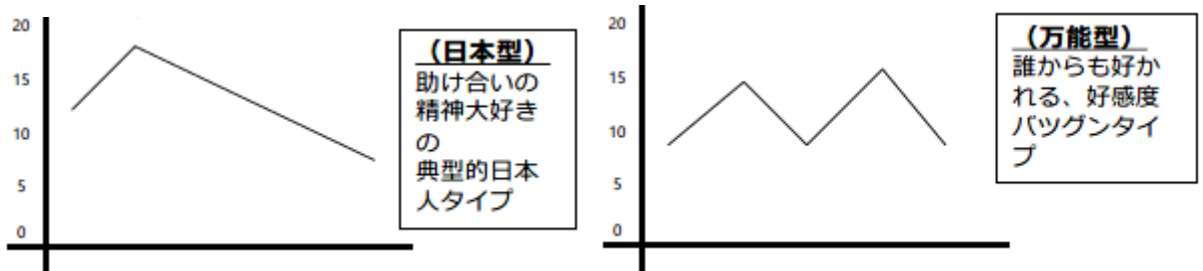
◇相性診断の判別方法

| | 点数が高い人 | 点数が低い人 |
|-------|------------------------|---------------------|
| ①価値観 | 厳格な価値観を持つ | ルーズで他人に流されやすい |
| ②優しさ | 人間関係やチームワークを大切にする | 人に対してドライな関係を好む |
| ③冷静さ | 冷静な判断のもと、仕事を行うロジカルなタイプ | 感覚や直感に頼って仕事をするタイプ |
| ④遊び | 自由奔放で好奇心・想像力のある、子どもタイプ | 喜怒哀楽を顔に出さない大人しいタイプ |
| ⑤我慢強さ | 我慢強く自分の感情を抑えるタイプ | 自由で辛抱や我慢があまり出来ないタイプ |

◇相性診断マップ

相性診断テストで出た点数をグラフ化する。そのグラフの形で様々なタイプに分かれる。

(例)



(配布資料 13 頁)

◇「④遊び」と「⑤我慢強さ」の傾き

- ・傾きが右肩上がり（差が3以上）
→メンバータイプ：楽しむことより我慢強さが勝つ、コツコツタイプ。
- ・差が3未満
→ブレンタイプ：周囲の状況を見て判断する非常に（ズル）賢いタイプ。
- ・傾きが右肩下がり（差が3以上）
→リーダータイプ：熱しやすく冷めやすい、言い出しっぺタイプ。

○リーダーのお悩み

指導方法について

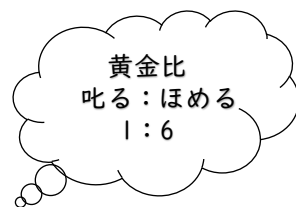
☆承認欲求が今の時代求められる

- ①結果をほめる
- ②過程をほめる
- ③全てをほめる
- ④存在承認

承認のバケツ…毎日声をかけることで、承認が増えていく

(例)具体的にほめる。～先生も〇〇の所をほめていたよ。

⇒①～④をして、初めて指導や注意が出来る



◇価値観の違いを知る

同僚の「大事にしていること・好きなこと」をどれだけ知っているか。価値観が自分とはかけ離れていても、「認める」ことが必要。これらは、部下の立場でも同様に、上司の価値観、立場、動機を想像しながら向き合うことが大事である。

☆コミュニケーションの基盤には、こうした承認の関係が不可欠

○Z世代の考え方

① SNS ネイティブ

なんでも事前に SNS で調べる (例)失敗したくないから、しっかり教えて欲しい

② タイムパフォーマンス

動画等を倍速で見る世代 (例)意味のある、無い残業・2分早く帰るために何をするか

仕事が出来ない人

計画を当日決める
⇒朝出勤してから、今日何をするか決める

仕事出来る人

前もって計画する
⇒前日に明日の予定をメモ書き
時計が頭の中に入っている
優先順位、時間配分、段取り

☆「失敗してよい」は NG ワード・・・時代とともに変化してきている

◇考え方の相違点

- ① 先輩側…なぜ見て学べないのだろうか？
後輩側…失敗しないために、仕事の手順や方法を教えて欲しい
- ② 先輩側…なぜ言われたことしか出来ないのか？
後輩側…新人だから言われたことしか出来ないのは当たり前

○ハラスメントの定義

職場におけるパワーハラスメントは職場において行われる

- ① 優越的な関係を背景とした言動であって、
- ② 業務上必要かつ相当な範囲を超えたものにより、
- ③ 労働者の就業環境が害されるもの

①～③までの3つの要素を
全て満たすものをいう

客観的に見て、業務上必要かつ相当な範囲で行われる適正な業務指示や指導については、職場におけるパワーハラスメントには該当しない。

◇若い職員に言いたいこと

自分の嫌なこと＝パワハラではない！(言動を通して、自分の嫌なこと等ではない)

子どもの命を預かっている職場だからこそ、厳しいこともある！

◇先輩の立場

パワハラを行う人の2大類型

- 1. 仕事ができる人(約7割)
- 2. 客観的に自分を見れない人

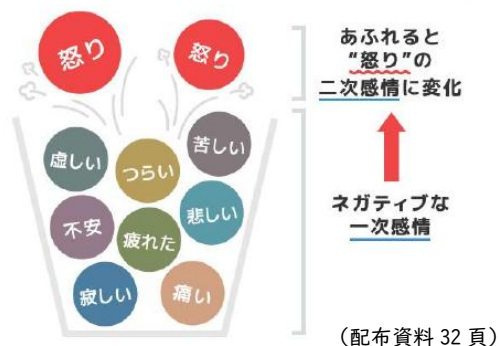
新時代の鉄則 「良いところを見てほめて、認めて育てる」

◇指導の鉄則

- ① まずはアングリーマネジメント(怒りの管理方法)を
- ② 「人格」を否定しない 「行動」をしかる
- ③ 普段からのコミュニケーションが全て

✖パワハラになるかどうか
○この言い方好ましいかな？
大丈夫かな？
=考え方が大事

◇怒りやすい人は



怒りのピークは、長くて6秒 ⇒頭に血が上ったら、6秒間は何も言わずに我慢

○正しい叱り方とは？

(NG例) 報告をしなくちゃだめじゃないの！ 忘れるとはどういうことですか！
無責任です！ あなたのそういうところがダメなのよ！

- ① 叱るべき事実 今日大切な報告が無かったね。
- ② ダメな理由 これが無いと、保護者に迷惑がかかるのよ。
- ③ それについてどう思うか(主観) 私としては、非常に残念に思っています。
- ④ 解決策を提示 今後はどのような取り組みをすると忘れないと思えますか？ ⇒ 一緒に考える

○SNS でよくある事例

- ① 行事の子どもの写真を投稿 ⇒保護者と裁判
└─▶ ストーカーによる性的被害
- ② ストーリー機能を使用し園日誌を投稿 ⇒同僚からの相談で発覚⇒解雇
- ③ 職場の秘密にしていた退職理由を保護者にリーク ⇒職場に居づらくなり退職

◇自分を守るために

接触する主な法律

- ・個人情報保護法
- ・プライバシー権
- ・肖像権
- ・児童福祉法
- ・勤務先の信用失墜

守秘義務で守るべきは …職場で知り得た情報全て

「子ども、保護者、法人(園)、同僚、業者、関係者等」

○まとめ

- ① 『自己認識力』を常にバージョンアップする
- ② 後輩には自分の失敗談／経験談を語る(言語化)
- ③ 人の悪口はプライベートで
- ④ 情報の取り扱いで身を滅ぼさないように

【研修を終えて】

相性診断テストを通して、改めて自分の性格を改めて再認識し、振り返る時間を持つことが出来た。他人の価値観や興味が自分とは異なっても認め、向き合うことが大事だと学んだ。社会人として、自己認識力を持つことや言語化することが大切であり、保育や業務に対して、定期的に何のためにしているのか目的を認識し考えながら、コミュニケーションをとっていきたいと思う。

〈若手リーダー向け〉第2回教職員研修会

期 日 令和6年11月13日(水)
会 場 オンライン・Zoom ミーティング
記録者 学校法人興譲学園 米沢こども園
保育教諭 鈴木 海来

【概 要】

テーマ 観察の視点と記録
演 題 保育実践「観察の視点と記録」について
ードキュメンテーションを中心にー
講 師 玉川大学 教育学部乳幼児発達学科 教授 大豆生田 啓友 氏

【内 容】

○記録を書くことが楽しいか。楽しくないとすればその原因は何でしょうか？

- ・書くことが苦手。
- ・書く時間が取れない。
- ・何を書いてよいかわからない。
- ・保育の役に立つ実感がない。

○様々な保育記録

- ・保育記録には様々なタイプがある。
- ・第一には、「エピソード記録」。これは、「エピソード」と「考察」で構成される。
- ・第二には、「マップ型記録」。保育室や園庭の環境図に子どもの遊びの姿を書いていくもの。
- ・第三には、「個人記録」。これは、個人の遊びをメモしたものや、個人の子どもの成長記録である。
- ・そして、第四には、「ドキュメンテーション」や「ウェブ」である。

○「記録」として大切な基本的な視点

- ・保育者が大切と思われた遊びや活動などの「子どもの姿」が基本的に記されること。
- ・私（保育者）自身の読み取りや振り返りが記されること。
- ・子どもの興味関心が記されること。
- ・人やモノ（自然）とのかかわりなどが記されること。
- ・その遊びや活動を通した「育ちや経験」のプロセスが記されること（5領域や10の姿などの視点）。
- ・子どもたちの葛藤や乗り越えようとしているプロセスが記されていること。
- ・明日へのつながりの展望など（計画）が記されること。

○保育の記録について

- ・その記録は書いていて、楽しさを感じているでしょうか？
- ・その記録は、負担感の大きなものではないでしょうか？
- ・その記録は、書かなければいけないから書いているだけになっていないでしょうか？

- ・その記録は、明日の保育に手ごたえを感じているでしょうか？
- ・その記録には、同僚や保護者との対話ツールになっているでしょうか？

○ドキュメンテーションの作成について

- ・子どもと一緒に「面白い」と感じた時や「子どものやりたい！」が発揮できたときなどに作成する。
- ・園のフォーマットに写真を5～10枚くらい入れる。
- ・子どもとのミーティングタイムに、面白かったや頑張ったこと、楽しかったことなど話したり聞いたりする時間を作っている。子ども一人一人の興味・関心を知ることができる。
- ・クラス用のカメラを使用。パソコンに写真を取り込み園のフォーマットの中に、自由にレイアウトして作成する。



○ドキュメンテーションの振り返り

- ・子どものつぶやきや声、話に耳を傾けるようになった。
- ・子どもの視線の先に何があるのか？何に驚いているのか？に私自身が興味津々。一緒にワクワクしてきた。
- ・子どもの「やりたい！」を実現することで、共に学べる。
- ・年度初めは、子ども同士のトラブルがたくさんありどうなることかと思ったが、図鑑を見ては「あれ作りたい」「これやろう」等「やりたいこと」がたくさんあるクラス。必要な環境を考えながら、これからも子どもたちと一緒にわくわくドキドキ楽しんでいきたい。



○今後に向けての課題

- ・子どもの学びを、10の姿に繋げて考えると育ちが意識できる。
- ・活動が発展し、次につなげるような言葉かけに難しさを感じる。答えを先に言うことが多かった様な気がする。子どもへの問いかけや、わかっているもどうなんだろうね？等、子ども自身が考えるように関わって行きたい。
- ・年度当初、「子ども達の園での様子を伝えるために、ドキュメンテーションの発信回数を手書きでもいいので多くして下さい。」と園長先生から言われたが、なかなか時間が取れずあまり発信できていない。時間の使い方を工夫してもう少し回数を増やしていきたい。

★よくある質問

- ・忙しくて、保育中に写真を撮る時間がない
(→たくさん撮ることよりも、心が動いた場面だけでよい)
- ・どこを撮ってよいかわからない
(→どこが、子どもの育ちの重要なポイントか見えていないのであれば、むしろ撮るべき)
- ・保護者から、あまり反応がない
(→「・・・しました」になっていないか？保育者が子どもの姿や育ちにワクワクしながらの場面であるか？)
- ・作成に時間がかかる
(→毎日の記録が大事なので、15分以内と決めては？あれもこれも書くよりも、どこがポイントか押さえることが大切。)

◎ドキュメンテーションを導入した結果

- ・子どもの興味に、より関わろうという姿勢が出てきた。
- ・保育を振り返り次の遊びに繋がる環境設定がよりできるようになり、遊びの発展（共同的な学び）につながった。
- ・保育者同士、保護者とのコミュニケーションが活発になった。



ドキュメンテーション導入時に期待していた、保育者の「**保育の質の向上**」に繋がっている。

★記録を書く上で大切なこと

- ・記録が書きたくなるような日々の保育が大切である。みなさんの日々の保育はいかがでしょうか？
- ・みなさんの記録は、自分の気持ちが動いた〇〇ちゃんのことが記されているでしょうか？
- ・でも、「・・・しました」記録になっていませんか？これでは、あまり役に立たない。
- ・そこのその子の①何に興味や関心があるか、②何が育ってきたか、③その子が葛藤したり、**がんばっていることは何か**、等が記されているでしょうか？
- ・そしてさらに、「じゃあ、明日、こうしよう」と明日の計画につながるような記録になっているでしょうか？

【研修を終えて】

日々保育を行っていく上で子ども達の様子等、記録のとり方が手書きで出来事だけをズラズラと書いて終わってしまうのではなく、ドキュメンテーションを利用して写真をいれることでその時の様子を保育者同士で共有することができる。また、保護者への発信にもなる。今回の学びを今後の保育に取り入れていきたい。

〈中核・専門リーダー向け〉第1回教職員研修会

期 日 令和6年8月2日(金)
会 場 山形ビッグウイング(山形市)
記録者 学校法人木村学園 認定こども園長井めぐみ幼稚園
保育教諭 佐藤 優

【概 要】

テーマ 自園の保育理解、保育者の協働
演 題 子どもの主体性を尊重する保育を支える「対話」について考える
～子どもをまんやかに「学び合う」ために～
講 師 関東学院大学 教育学部こども発達学科
准教授 三谷 大紀 氏

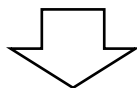
【内 容】

1. 「子どもの主体性を尊重する保育」が改めて志向されるようになってきた社会的背景 ～「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」の策定をめぐって～

保育が子どもの主体性を尊重することは当たり前のことだが、近年改めて強調されてきている。
例えば、2023年4月「こども家庭庁」が創設され、「こども基本法」が施行された。

その基本理念は

- ・子どもの人権を尊重(=子どもを一人の人間としてみるまなざしの重要性)
- ・子どもの「声」を聴き(乳幼児…表情、しぐさ、体の動き等)、子どもの「今」と「これから」にとって最もよいことが優先して考えられることの重要性



「こども基本法」の理念を具現化するために

…「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」の策定

100か月ビジョンとは

…妊娠期～小学校1年生までの期間で大事にしたいことをまとめたもの

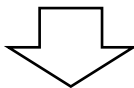
ところが現実には…?

- ・「保育が“子ども主体”であることが重要」と考える園が99.7%
- ・「子ども主体」を実現している園は全体の2割
- ・今後「もっと子ども主体を実現したい」と思っている園は全体の9割

その中で増えたのが“子ども主体へ試行錯誤中”の部分である。

コロナの影響を受けて今まで当たり前になっていたことが“本当に大事なのか? 必要なのか?”と考え直すきっかけとなった園が多くある。

では、「子ども主体」を実現している園と他の園との比較から、「子ども主体」を実現している園には、どんな特徴があるのか？



それは

- ① 子どもの姿に合わせて柔軟に計画を変更している。
- ② 保育のエピソードを様々な形で記録し、多様な活用をしている。
- ③ 先生同士が子どもの姿を語り合い、安心できる雰囲気の中で保育をしている。
- ④ 「子ども主体」ではない園は、採用や離職の課題を抱えやすい。
- ⑤ 保護者の意識も「子ども一人ひとりの個性や主体性の尊重」に向いている。

2. 事例をもとに対話の手がかりとして「子どもの主体性を尊重する保育」を考える

【5つの事例をもとに】

*子ども主体の保育の充実を目指す時、先生方は？

- ・子どもを「一人の尊厳ある人間」としてみている。
 - 自らの「今」と「この先」を充実しようと探求している「主体」に対する信頼がある。
- ・子ども（その子）の興味・関心、問いを大事にしている。
 - 「教えるべきことは何か？」（どうかかわるべきか？）の前に、まずは「今、ある姿（あるがままの姿）」に隠された、その子の「思い」や「意味」を捉えていこうとしている。
- ・一緒に楽しみ、喜び、悩みながら自分でできることを模索している。（保育者も主体）
- ・子どもが、どこを面白いがるか、どこに興味を持ちそうか、子どもの姿から予測したり、振り返ることを仲間と共に楽しんでいる。
- ・保育を可視化する様々な工夫をする。（子ども、同僚、保護者に向けて）
- ・環境構成や教材・素材（廃材、絵本、図鑑、本物の写真、実物など）の準備と再構成。
- ・結果として、1日の保育のタイムスケジュールや保育内容・集まりなどの見直しが生まれ、自分達の保育を振り返り、問い直し（省察）、明日の保育を創る。

※子どもとの対話を対話している（子どもの探求を対話を通して探求する姿勢）

*そもそも子どもの主体性を尊重する保育の「主体性」って？

- ・「主体性」と「自主性」は違う。（混合されがちな部分である）
- ・「主体性」を「積極的」や「能動的」とは考えていないか？「主体性」とは。「自分で決める」「能動的に行動する」「活発に行動する」といった、見るからに積極的な姿を必ずしも意味するわけではない。常に「主体性」はある。
 - 「主体性」を尊重する時は、「主体」を大事にすること＝その人の「その人らしさ」を尊重することになる。その子とのかかわり（その子を取り巻く人・物・状況との関係）の中で、その子の「主体性」を捉えることが大切である。

*「子どもの主体性を尊重した保育」をより充実させていくために

- ・一人ひとりの子どもの声（思い）に目や耳を傾ける。
- ・子どもの声（思い）に寄り添って、理解しようとする。
- ・見取った声（思い）を他者と語り合う。
- ・子どもの声（思い）≡興味・関心に即して、環境を用意したり、計画を吟味し、工夫する。
- ・（可能な範囲で）子どもが主体的に「遊び込む」機会を作る。

- ・「遊び込む」ことを通して育まれる学びや育ちを可視化する。
- ・それらをもとに、再度子どもの声（思い）を捉え直す。

*子どもをまんなかに「学び合う」ためには

- ・安心して語れる雰囲気づくり
- ・語られる内容を価値づける応答→気付きをいかに価値づけてあげるかが重要！
- ・出された思いや、アイデア、課題などを可視化する工夫
→どう変えたらいいか、どう保育すべきか等、さも「正解」があるように示さない。
語られる子どもの姿と、それに対する語り手の思いへの共感がベース。

★「見る側」⇔「見られる側」、「指導する側」⇔「指導される側」といった二項対立的な関係を越えた存在（評価観の転換が不可欠）

※ 「否定」ではなく「肯定」的なまなざしを向けるからこそ見えてくる姿（主体性・思い・学び）がある。

*「子どもの主体性を尊重する保育」を支えるために、大事にしたい3つの対話

- ① 子どもとの対話（保育の中で）
- ② 同僚・保護者・他園との対話
- ③ 自分自身との対話

3. 【ワークショップ】～作ってみよう、「保育ウェブ」

◎ 「保育ウェブ」とは？

- ① 子どもの遊びや活動において大切にしたいキーワードを中心として
- ② 子ども達の興味・関心を読み取りながら
- ③ 子どもの姿を予測し、そこから連想される様々な事柄（新たな遊び、活動、感情、興味・関心、必要な環境構成など）を連続的・発展的に自由に書き加えていく物



★重要な点

- ・子どもの主体的な姿（発想、つぶやき、興味・関心）を重視し、それらと対話しながら、保育を創っていくことを志向。

・一人で作成するのではなく、複数の人で作成することを大切にする。

⇒子ども理解の多様性、メンバー同士のコミュニケーションや相互理解を深めることにもつながっていく。

実践 …映像を視聴し、実際に保育ウェブを作ってみよう！

4. ～子どもとの対話を対話しよう～

子ども＝「教える」・「操作」する対象としてではなく、自ら学ぼうとする「主体」として信頼する。その子ならではの、学ぼうとしている姿を見取り、その意味を、その子の側から考えることが大切である。

◎ 「ともにつくる」保育を！

- ・人は、自分が大事にされるから、相手（他者）を大事にできる。

- ・子どもは、「子ども」である前に一人の人間である。
 - ・子ども（一人の人間として）の「声」を聴く。
 - ・子どもを見る、柔らかくて、温かい、肯定的なまなざしが必要。
 - 子どもの見ている先をともに見て、ともに感じるまなざしであり、子どもを受容し、応答する姿勢。
 - ・子どもの傍にいる大人同士の関係性（「対話」の有無）が問われる。
 - 園内の・地域の大人同士の学び合い、支え合いが「こどもまんなか社会」時代の実現には不可欠である。
- ★子どもに「させる」、誰かに「させる」・「させられる」保育ではなく、「対話」をもとに、子どもと仲間（同僚・保護者）と「ともにつくる」保育を目指す！

【研修を終えて】

三谷先生のお話をお聞きし、改めて「対話」することの大切さを実感した。子どもとの会話でも、話の部分だけではなく、その裏に隠された思いや、興味・関心に目を向けながら対話していくことが重要だと分かった。自園では、何気ない会話の中でも経験年数関係なく、フラットに子どもの姿やエピソードなどを話すことが多く、また、園内研修では“話しやすい雰囲気づくり”を大切にしながら、和気あいあいと行っている。今後も今のスタイルを大切にしながら、三谷先生のお話にもあったように、その語り合いが「子ども達の主体性を尊重した保育」に繋がるよう、子ども理解の多様性に繋がるよう、実践していきたいと感じた。

〈中核・専門リーダー向け〉第2回教職員研修会

期 日 令和6年10月23日(水)
会 場 山形ビッグウイング(山形市)
記録者 学校法人金沢学園 認定こども園金沢幼稚園
教諭 沼澤 悠

【概要】

テーマ ミドルリーダーとしての役割
演 題 同僚性を高める：保育の質を高めるチームづくり
講 師 和洋女子短期大学 こども発達学科 教授 矢藤 誠慈郎 氏

【内 容】

1 コミュニケーションの技術

＜新しい時代の指導者の姿勢＞

- ◇規範論＜現実論 〇〇たるものこうあるべきだ」という考えは用いない
- ◇性格の問題＜技術的問題 個人としてではなく、教師としてかわる
- ◇相手のせいにするをやめる 相手を育てるためにどのようにしたら良いかを考えることで自分のスキルが上がる

2 同僚性を導く環境

◇人格…変えるのが困難、環境…変えるのが比較的容易

「この人をどのように変えようか」という考えでなく「良い方向に向かうよう一緒にやっ
ていこう」という空気を作っていく。

◇人間の行動は人格でなく環境に影響されやすい

環境としての「組織文化」の構築が必要である。園
全体の質が上がるよう、組織としてゆるやかにつな
がっていく。

◇日々の保育実践を通じて職員同士が主体的に学び合
う姿勢と環境が重要であり、職場内での研修の充実
を図る

理想と現実を決めつけず、小さなことを試すことか
ら始める。また子どもの良さを見つけ、どのようにしたら子どもがより楽しむことがで
きるのかを考えることが大切である。それを繰り返していく中で子ども達は発展してい
く。



3 組織目標の共有

◇保育の質向上へのマネジメントとして、PDCA サイクルを繰り返しながらスパイラルアッ
プ(らせん状に向上すること)を目指す。

→目標共有＝スパイラルアップの背骨

◇組織メンバーの保育観に幅があり、利害関心が多様であるからこそ、園として大事にし
ていることを共有できるような具体的な取り組みが必要。

- ①文字・図表等による可視化とその共有
- ②年度初め等節目での周知、会議での定期的な周知
- ③**日常的なコミュニケーション**における明示的または暗黙のメッセージ

4 保育の質向上の方法

- ◇**楽しく**取り組み、**没頭**できる工夫をする
- ◇**ポジティブ**な面に目を向ける
 - 良さの探求をしていくことで課題を少しずつ減らしていく。
- ◇行動変容を促す＝**試行錯誤**を推奨する…正解はない（分からない）ため
 - 試行錯誤の際は（１）行動に移せる（２）チェックできるものを選ぶ。
- ◇**教育要領**（５領域５３項目）をガイドとして活用する
 - 個人と個人の対立になることを防ぐため。また子どもの姿を見つける時に“できた”“できない”で決めつけない。
- ◇**負荷を少なくする**＋**継続**するための工夫をする
 - 全員で園内研修を行おうとすることは難しいため、３人グループで１か月１５分等でも良い。子どもの姿などの記録・対話（教育要領を参照しながら）、ささやかな試行錯誤（行動に移せる、チェックできるものを）行う、気づきを持ち寄る。
- ◇**全員参加**の工夫をする…チームの一員という感覚をもてるようにするため
- ◇完成を目指すよりも、**変化に開かれた組織**にする…小さな変化を地道に試していく
- ◇時間を工夫する…「時間がない」を言い訳にしない
- ◇できない理由を探すより**少しでも進める工夫**をする（１００％を目指さない）

5 保育者の専門性の特質

- ◇保育者は**省察的実践者**であり、「行為中の省察」「状況との対話」が大切
- ◇適切な理念を基盤とする
 - 実践の根拠としての学問知・・・学問により差し当たり正しいとされている知
 - 実践の根拠としての経験知・・・経験により培われたカンやコツなど

6 教育・人材育成の考え方と方法

- ◇不当な支配をせず、教育・人材育成を行っていく

教育・人材育成

- ・潜在的な力を引き出し、エンパワメントして自ら育つことを支える
- ・相手を理解し、安心させ、可能性や兆しを見つけ出して認め、信頼関係を築き、励ます
- ・自ら考え、試行錯誤する（学ぶ）ことを促す
- ・自律的な人に育つ
- ・ものごとをよりよくしていく人に育つ
- ・質の向上
- ・リスクの低減

- ◇職員理解のために①自分から一方的に話すのを**控える**②「謙虚に問いかける」という姿勢を学び、相手にもっと質問するよう**心がける**③傾聴し、相手を認める**努力をする**。

7 同僚性へのコミュニケーション

◇同僚性（同じ方向を見てみんなで力を出し合えること）…協調性とは異なる

問いかけ合い、学び合い、高め合い、支え合う組織文化

◇同僚性の起点としての対話

◎対話のための約束事を定める

- ・笑顔 ・アイコンタクト ・うなづく ・身を乗り出す ・穏やかな声、言葉、態度
- ・否定しない（言語的にも非言語的にも） ・謙虚に問い掛ける（答えの協同的探究）

その場が充実することで他の時間や園全体に波及する

→**同僚性**が広がり、さらに発展していくことで**組織文化**になっていく。

◇人と組織を育てるリーダーシップ

リーダーの仕事は正しい知を伝達して徹底することではない。個々の見方、考え方、経験や知恵、もっている力をいかに組織化することができるかを考え、実践していくことが重要である。

8 労務管理の重要性

◇ワークライフバランスが質の高い仕事、就業継続、成長の基盤となる

◇労働時間への配慮、休憩時間の確保

◇持ち帰り仕事縮減のためのタイムマネジメント

◇種々の休暇等の取得促進をミドルリーダーが率先して行っていく

◇職員を大切にしているというメッセージを送る

安心と挑戦の循環がされるよう、個々の心理的安全を保ち、組織が変化していくための試行錯誤の基盤を作っていく。

【研修を終えて】

園全体の組織のあり方について知ったり、自分の保育を見つめ直す良い機会となった。保育の質を高めるためにはチームづくりが重要であり、チームづくりを行う上で園内研修をし、教師間で共通理解をしたり、保育を振り返ったりすることが大切であると学んだ。日々の慌ただしさに言い訳をするのではなく、できることを見つけ、それを積み重ねながら同僚性を高められるよう努力していきたい。

保健衛生・安全対策研修会

期 日 令和6年6月3日(月)
会 場 山形テルサ(山形市)
記録者 学校法人鶴岡学園 認定こども園鶴岡幼稚園
副園長 佐藤 律

【概要】

テーマ 子どもの健康と安全
演 題 子どもの育ちを支える保健衛生・安全対策
講 師 公立大学法人神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部看護学科
地域・住宅・学校保健領域 教授 臺 有柱 氏

【内容】

1. 健康の観察

① 子どもの「ふだん」を把握することが、適切な応急処置・事故防止につながる。

(平熱・感染症の既往歴・予防接種歴の把握・慢性的な病気の有無・服用している薬等)

② 毎日の健康観察

健康観察票などを用いることで、いつでも誰でも同じように観察でき申し送りができる。

③ 身体計測の意義

発育や栄養状態を評価するうえで非常に重要であり、病気の早期発見にもつながる。



2. 園での保健衛生対策

① 感染症のキホン

感染症にかかるかは、病原体の感染力と体の抵抗力とのバランスで決まる。

② 感染症予防対策

感染を引き起こす原因となる病原微生物を含んでいるものを感染源といい、誰もが何らかの感染症を持っているかもしれない危険性があるものとして取り扱わなければならない。

【園でのスタンダード・プリコーションの例】

| | |
|---|--|
| 1 | 具合の悪い子は、別室保育をする。 |
| 2 | 子どもも職員も、体調不良の時は休む。 |
| 3 | 食材は適切な温度管理をし、加熱できるものは十分に加熱する。 |
| 4 | 血液や排泄物、吐しゃ物は、素手で触らない。手袋・マスク等を着用して処理する。 |
| 5 | 動物とふれあい後の手洗いの徹底。 |
| 6 | 爬虫類はサルモネラ菌を保有している場合があるので、飼育動物を検討する。 |

宿主対策

乳幼児や高齢者、基礎疾患があると、免疫力・抵抗力が低いことが多く、感染しやすくなる。

【免疫機能を高める～リスクを避ける】

| | |
|---|-----------------------|
| 1 | 生活リズムを整える。 |
| 2 | 日ごろから遊びを通じた体力づくりに努める。 |

| | |
|---|--|
| 3 | 年齢に応じた計画的な予防接種の推奨。 |
| 4 | 職員も定期的に抗体価検査、予防接種を受ける。 |
| 5 | 慢性疾患や障がい・医療処置など、免疫力が低下している可能性のある子どもは、保護者と登園について相談する。 |

③ 予防接種

接種した予防接種や罹患した感染症は保護者から伝えてもらい、園では予防接種状況の把握をする。各園で「健康管理一覧表」を作成し、記録していくことで、平常時の感染症対策、感染症発生時の迅速な対応に役立つ。

| 予防接種での事故防止について | |
|----------------|----------------------|
| ・ | 予防接種は適した接種時期がある。 |
| ・ | 子どもの体調を優先に接種を受ける。 |
| ・ | 少しでも不安があるときは、先送りにする。 |

④ 感染症の流行情報を把握

子どもに多い感染症の流行期

| | | | |
|--------|--------------|--------|----------------|
| 5月～9月 | 手足口病・ヘルパンギーナ | 6月～9月 | 咽頭結膜炎・とびひ・みずいぼ |
| 10月～2月 | RSウイルス感染症 | 11月～6月 | 溶連菌感染症 |
| 12月～4月 | 流行性耳下性炎 | 12月～5月 | インフルエンザ |
| 11月～4月 | 感染症胃腸炎 | 12月～7月 | 水痘(水ぼうそう) |

⑤ 感染症(疑い)の子どもへの対応

子どもの病気の早期発見と迅速な対応は、子ども自身の体調管理・周囲への感染拡大防止・先生方、保護者の健康を守る事につながる。

【園で体調不良になった子どもがいたら】

| | |
|---|----------------------------------|
| 1 | 体温測定を行う(1時間おき) |
| 2 | 別室に移動し、健康観察をする。 |
| 3 | 保護者に連絡を入れる。 |
| 4 | 嘱託医や看護師等に相談をし、指示をうける。 |
| 5 | 子どもの症状に応じ、保護者が迎えに来るまで、症状への対処を行う。 |
| 6 | 健康観察(症状・経過)や対処したことを記録する。 |

3. 安全対策

① 安全対策・リスク管理の原理原則

安全管理、危機管理は多くの面で重なり合っており、子どもの立場、園の運営の立場、どちらにおいてもこの2つの視点がバランスよく展開できることが不可欠。

② リスクマネジメント

リスクマネジメントとは、想定されるリスクを日頃から管理し、不利益を最小限に止めること。

③ ハインリッヒの法則

1件の重大事故の背景には、29件の軽い「事故・災害」、さらには一歩間違えば大惨事になっていた「ヒヤリ・ハット」する事例が300件潜んでいるという法則性を示したもの。

インシデント(ヒヤリハット)を丁寧に分析し、事故の根元を断つ必要がある。

④ ヒューマンエラー

事故の多くは、ヒューマン・エラーが関係(勘違い・思い込み・失念・伝達ミス・うっかり)

⑤ SHELL モデル

SHELL モデルはヒヤリハットや事故の原因を探るために、5つの要因に分けて分析する方法。

| | | | |
|---|-----------|---|------------------|
| S | 体制・マニュアル | H | 道具・施設設備 |
| E | 保育を取り巻く環境 | L | 当該保育士の要因 |
| L | 子ども・職員など | M | マネジメント(組織・運営・管理) |

⑥ スイスチーズモデル

事故は単独で発生するのではなく、複数の事象が連鎖して発生する。形の違う複数の対策を多層的に構築して安全管理することが重要。(安全のために何か対策をしたとしても、その対策がすり抜けられてしまえば危険な状態になる。)

⑦ 事故の発生防止(予防)対策

安全な教育・保育環境を確保するため、下記の点に留意し、事故の発生防止に取り組む。

- 子どもの年齢(発達とそれに伴う危険等)
- 場所(保育室・園庭・トイレ・廊下などでの危険等)
- 活動内容(遊具遊びや活動に伴う危険等)
- 指導者特有のリスク(知識、経験・価値観・思い込み・加齢に伴う認知や体力の低下・感情・疲労、緊張・体調不良 等)

⑧ 事故の発生防止に向けた取り組み

- 環境整備、安全点検(チェックリスト)
- ルール作り・安全教室・訓練
- 組織的な体制整備 等
- 予防・対応マニュアル
- 職員の研修

⑨ 緊急時の対応体制づくり

- 緊急時の役割分担を決め、事故発生時に他の職員に指示を出す役割についてマニュアル化した上で、事務室の見やすい場所に掲示する。

⑩ 日常に準備しておくことについて

受診診療機関のリスト・救急車の呼び方・受診時の持ち物・通報先の順番・連絡先等

⑪ 個別配慮を要する子どもへの対応

- 子どもの慢性疾患は、多くが完治しないため、体調や病状を悪化させないための日常的な配慮や治療の継続が必要となる。

⑫ 慢性疾患のある子どもへの個別的配慮

- 集団生活上の配慮
- 急変時の対応
- 治療・療養の継続支援
- 教職員間での共通理解
- 保護者・主治医との連携
- 他の子どもへの説明や対応
- プライバシーへの配慮

⑬ 園における対応マニュアルの整備

- 対応の原則・体制・手順・役割分担・安全な環境整備・誤食防止対策 等
- 生活管理指導表の取り扱い
- アレルギーに関する情報の管理方法
- 緊急時の対応
- 災害への備え
- 研修
- 地域の関係機関との連携

⑭ 配慮を要する子どもへの具体策

※アナフィラキシー(ショック)

アレルギー反応が、複数の臓器に急激に起こる状態をアナフィラキシーという。生命の危険があるので、緊急搬送が必要となる。

- 園でのエピペン®の使用について
必ず救急車を要請しながら、できれば複数名で迅速に対応。
救急隊員には、エピペン®を使用した旨を報告する。

4. 保健計画

① (学校)保健計画の位置づけ

- 教育・保育の全体計画の一環
- 子どもの健康に関する保健計画を全体的な計画に基づいて作成し、全職員がそのねらいや内容を踏まえ、一人ひとりの子どもの健康の保持及び増進に努めていくこと。

② 保健計画/安全計画の意義

- 多様な子どもを受け入れ、一人ひとりが清潔で安全で安心できる環境を提供する。
- 従事する職種間での共通理解
- 保護者や地域との信頼関係

③ 保健計画の作成手順

| | | |
|---|---------|------------------------------|
| 1 | 関係者間の同意 | 管理者や看護職、嘱託医の協力のもとに作成 |
| 2 | 情報収集 | 保健衛生に関する課題や動向などの情報を収集 |
| 3 | 目標設定 | 保健計画の年月週ごとの目標設定 |
| 4 | 活動内容の決定 | 健康管理・環境衛生・健康教育・安全管理・園行事・研修 等 |
| 5 | 評価 | 実施した結果の振り返り |

④ 計画の構成項目

※職員全員、誰が見てもわかるように構成

- 理念と目的・目標
- 活動方法(実施日時・場所・実施内容・実施体制・実施者 等)
- 評価の時期・観点・評価指標

⑤ 保健計画立案の視点(テーマ)

※子ども「個人」だけでなく「集団」としてとらえる。

※園児とその保護者だけでなく、地域の子育て支援の観点でとらえる。

- 子どもの健康支援「基本的な生活習慣の確立」
(子どもの健康状態ならびに発育及び発達状態の把握・健康増進 等)
- 食育の推進
(園の特性を生かした食育・食育の環境の整備 等)
- 環境及び衛生管理ならびに安全管理
(衛生環境の整備・衛生知識の向上・食中毒の予防
・保育事故の予防 等)



【研修を終えて】

園でのスタンダード・プリコーションをふまえ、地域看護学・学校保健を柱に大変分かり易くご講義頂きました。感染する危険性があるものとしてリスクを排除する事が看護学の基本でありながら、園での幼児教育・保育の流れに沿った日常の注意点を教えて頂きました。ワークシートを使ったグループでのディスカッションも他園との情報交換となり、楽しい時間となりました。

食育研修会

期 日 令和6年7月31日(水)
会 場 山形ビッグウイング(山形市)
記録者 学校法人天真林昌学園 認定こども園天真幼稚園
教諭 小野寺 愛菜

【概要】

テーマ 子どもの健康と安全
演 題 子どもの食事と食育
～子どもの健康と食生活・食育の意義～
講 師 上越教育大学大学院 学校教育研究科
発達支援・心理臨床教育学系 教授
健康教育研究センター センター長 野口 孝則 氏

【内 容】

<0・1・2歳児の食育>

○食べること、食べ方を学ぶ

- ・毎日の食事は子どもの命にかかわる。
食べ方を間違ってしまうと、“どんな子”、“どんな食材”でも危険が伴う。
- ・ミニトマトやうずらの卵を窒息の危険性から提供しない園が増えている。
危険を排除するのではなく、食べ方を学ぶ機会が必要である。

○離乳食から幼児食への移行

- ・幼児食に移行した後も、同じ味付けや硬さでいいのか子どもの姿から考える。
移行する段階で工夫することで、偏食予防に繋がる。

<子どもの胃袋が満たされる食事>

- ・残食がないことが良いという考えは間違っている。
「残食がない=子どもの胃袋を満たしていない」という可能性もある。
- ・一人一人の胃袋の大きさは違う。
決められた量を残さず食べることを教えるのではなく、食事の時間を楽しむ気持ちを伸ばしていく。

<5つの子ども像>

1. お腹がすくリズムがもてる子ども
→午前中しっかり身体を動かすことで、お腹がすくリズムを確立し食べたい気持ちが高まっていく。
2. 食べたいもの、好きなものが増える子ども
→食べたいものや好きなものは多くない。毎日の食事の中で増えていく。
3. 一緒に食べたい人がいる子ども
→同じものを食べて感想を共有する。
4. 食事づくり、準備にかかわる子ども

→食事の前の手洗いや、食具の準備など食べる環境を整えることで、気持ちを落ち着かせる。

5. 食べ物を話題にする子ども

<「できていないところ探しの食育」から「できているところを褒める食育」へ>

- ・○○しか食べない子、○○ばかり食べる子
=○○が大好きな子、○○に夢中な子

- ・子どもの姿から、その子が食べられそうなものを広げていく。
例) 白い食べ物を好む→白身魚、豆腐、牛乳、卵の白身…
- ・給食では個別に対応することは難しいので、保護者と連携を図る。
- ・食べられるものが一つでも増えたら褒める。
- ・できない姿を見るのではなく、その子の伸びしろを見る。
- ・子どもの頃、嫌いだった食べ物は次第に克服することができる。少しでも食べるように子どもに頑張らせるのではなく、食べたい気持ちを高め、食べ物を嫌いにならないようにすることが大切である。
- ・小食の子ども …昼食の様子だけで判断せず、朝晩の様子を保護者に聞く。
- ・たくさん食べる子…「好き嫌いせず食べて、おかわりをする子=元気な子」ではない。
朝ご飯を食べていない子、晩ご飯を食べさせてもらえない子という可能性もある。



<明日からできる食育>

- 食べたい気持ちを高める活動、言葉掛けをする。

－活動例－

- ① 園に届いた食材を子どもが調理室に運ぶ。
(キャベツ、白菜、レタスなどの似ている野菜を1週間ごとなど)
- ② バケツリレー方式で運ぶことで食材の感触や重み、匂いを感じる。
- ③ 自分達で運んだ食材が給食に出ることで、食べることを楽しみに思う気持ちや味わって食べようとする気持ちを育む。

- 給食を食べる前にどんな食材が使われているのか、どうやって作られたのかなどを伝える。
- 教師が給食缶を開ける際に、大げさに美味しそうなリアクションをする。教師の姿から給食に興味をもつ。リアクションの理由を子ども達が想像する。
- 嘘は言わない。
「美味しいから食べてみて」と言う教師の言葉を信じて食べたら苦かったという経験をするとう嘘をつかれたと感じる。美味しさは本人が感じるものである。

<イベント型食育>

- 年に一度の貴重な機会だからこそ、ねらいを明確にする。

－活動例(芋掘り)－

- 教師が先に芋の掘り方の見本を見せない。見本を見ると自分なりに工夫して掘ることができなくなってしまう。見本通りにすることを学ばせない。
- 芋を掘るだけで終わらせない。

- ① 事前にどんな風に土の中で育っているか、大きさや深さなどの予想をしてみる。
- ② 給食で芋を使った料理を提供する。
- ③ 芋を家に持ち帰る際に、芋を使ったレシピを配布する。
- ④ 活動の振り返りの時間を設ける。
- ⑤ 同じように育つ他の野菜に興味を広げることができるように促す。

<SDGs と食育>

- ・子どもの残食を食品ロスと捉えない。
給食において「食べ残しをしない=SDGs」ではない。
- ・小学校では残食量を調べる活動を行っている学校が多くある。
残食を減らそうと“食品ロス警察”が現れ、食べられない子どもは給食の時間が嫌になってしまう。

「食べて生きること・元気になることに気付き、食べたい気持ちを育むこと」が
『食育』である。

【研修を終えて】

研修に参加して、食べることは身体が作られるだけでなく、楽しい空間の中で食べることが心の栄養にもなっていることを感じた。野口先生の講演を聞くまでは私自身が残食はなるべく少ない方が良く考えていたが、胃袋がきちんと満たされているか、残食がなくなるようにと子どもに頑張らせていないか、自分の子どもへの言葉掛けや援助の仕方を改めて見直すきっかけになった。

また、研修の中で野口先生が「食事は楽しいことである」と繰り返し話されていたことがとても印象的だった。楽しい食事の時間や空間を提供できるように、目の前の子ども達の姿に合わせた食育を考えていきたい。



新規採用・若手教職員等研修会

期 日 令和6年6月17日(月)
会 場 山形県私学会館(山形市)
記録者 学校法人東陽学園 認定こども園神町幼稚園
保育教諭 細矢 理寿

【概要】

テーマ マネジメント、園の一員としての役割
演 題 社会人としてのモラル・ルール・マナーを知る
たたずまい教育1年生 ～社会人の第一歩～
講 師 株式会社日本総合音楽研究 発達研究所 課長
全日本幼児教育連盟 常任理事 小松 朋子 氏

【内 容】

1. 保育者としての姿

① 挨拶

保護者との第一のコミュニケーションは挨拶から始まる。挨拶はお互いの「心の扉を開ける鍵」となり、保育者(園)の第一印象(イメージ)となる。挨拶をされて不快に感じる人はいない。子どもと一緒に遊んでいる時も、掃除をしている時も、来園者には率先して「爽やかな挨拶」を心がけて行っていく。



② 話し方

人間関係を円滑にし、かつ深めるために、また、明確な保育を日々行う上でも、上手な話し方は必要不可欠である。当たり前なことではあるが、「ギャル語」「外国語をそのまま使った表現」「ら抜き言葉」などを使用して会話が成り立つのは学生時代だけである。一般社会では、いわゆる「学生語・学生会話」は非常に不快な言葉として受け取られてしまう為、社会人としてのルールを体得し、大人同士の会話を心がけていく。

◇ 話し方の基本ポイント ◇

- 1) 話の目的や内容をしっかりと把握し、事前に要点を整理しておく。
- 2) あらすじをきちんと組み立てて、明確に感情豊かに表現する。
- 3) はっきりと発声し、語尾を明瞭に。語尾を濁したり省略することは相手に対して失礼なだけでなく、頼りない印象や誤解を招くものとなる。
- 4) 自分の癖を具体的に把握し、直す努力を怠らない。
- 5) 言葉使いに注意する。相手にとって気持ちの良い言葉、具体的な言葉を使うようにする。言葉には常に関心を持つようにする。
- 6) クッション言葉(申し訳ありませんが、お手数をおかけしますが 等)を使い、話をやわらげる。
- 7) ジェスチャー・表情を使って、明るさ・静けさ・爽やかさ・悲しみなど、相手に伝えた

い感情を体で表現するように心がける。

8) 話すスピードに注意する。普段の話し方が速いか遅いかを把握し、そのうえで時と場合により話すスピードを調整する。

9) 「正しく」「分かりやすく」「感じよく」の三原則を常に注意する。

③ 聞き方

・相手が話しやすいような態度で聞く（胸から相手の方へ向く）

背筋をまっすぐに伸ばした状態から多少前かがみになり、興味と楽しさを示す。

・「相槌」をうつ

相手が話し切ってから、語尾に被せないように相槌を入れる。また、会話の内容によって眉を上げる、微笑む、驚いて口を開く、軽くうなずく等の表情や仕草も、会話のコミュニケーションとして大切である。

・分からないことはすぐに質問する

話が進む前に尋ね、正確に話の内容をつかむ。（恐れ入りますがもう一度おっしゃってください）

・相手の表情、仕草に注意する

相手の目、表情、身体の動きなどから、相手が何を伝えようとしているのかをさりげなく読み取るようにする。

・話の邪魔をしない

相手の話に割り込むようにして自分の意見を述べたり、話を遮ったりするようなことは決してしない。また、そわそわと忙しそうなお態度をしたり、わき見をしたりするようなことも、相手を不愉快にさせる原因となるので慎みたい。



2. 新人保育者としての姿

① 「職場」とは

職場とは「仕事をする場」である。園の保育目標に向かって素早く的確な行動（仕事）ができ、自分の理論にしっかりと裏付けされていけば、限りなくパワフルな保育者になれるだろう。

< 職場と学校の違い >

| | 職 場 | 学 校 |
|-----------|------------------------------------|--------------------------------------|
| 目 的 | 実践の場、 <u>園の保育目標達成</u> | 教育の場、 <u>自分の学業成果</u> |
| 活 動 の 特 徴 | チームワークの重要性 <u>嫌いな人とも一緒に活動する</u> | 自分の判断で行動できる <u>嫌いな人は避けることができる</u> |
| 人 間 関 係 | タテの人間関係 <u>境遇の違う人の集合</u> | ヨコの人間関係 <u>同年代・同質の人の集合</u> |
| 評 価 | <u>考課がある</u> 保育目標に対する厳しい評価 | 定期試験がある 点数による具体的な評価 |
| お 金 | <u>仕事をして給料を戴く</u> | <u>授業料を払って勉強する</u> |

② 職場での基本心得

『人の話をよく聞き、呼ばれたらすぐに返事をし、だれよりも先に動くこと』

・先輩から学ぶ

言葉ではなかなか理解できない仕事、それらの要領・ポイントは先輩方のやり方を見習い、良いことはすべて吸収する。

・仕事に早く慣れる

当分の間は、考えるよりまず行動する。仕事の実践とは自分で悩み、苦勞しながら徐々に覚えていくものである。

・仕事を創造的に行う

自分なりに善後策を講じてみる。先輩方の助言を素直に受け入れ、それにひと工夫加えてオリジナリティあふれる内容を創り出せる柔軟性が必要である。

・報告、連絡、相談をする

どんなに注意していても、失敗や間違いは犯してしまうものである。そんなときには、まず素直に謝ること。謝った後は責任転嫁、言い訳等はせずになぜそうってしまったかを、簡潔に述べる。

◇ ミスの処理 ◇

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1) すぐ事実を先輩・園長先生に報告 | …指示を待つ |
| 2) 素直に謝り、指示を受ける | …自分の非を認める |
| 3) 自分のミスは極力自分で処理する | …責任を持つ |
| 4) 処理の結果を報告する | …いつまでも迷惑をかけない |
| 5) ミスの原因をきちんと究明する | …自分自身への問いかけ |
| 6) 二度と同じ失敗をしない | …肝に銘じ、次の成長へのステップにする |

・エチケットやマナーを守る

相手の立場を考えようとする気配り、相手の気持ちを理解しようとする思いやりが必要である。

・身だしなみ

社会人はまず第一印象。自覚を持った身だしなみと爽やかな笑顔が、どんなオシャレにも勝ることを理解すべきだ。

・人間関係

日常会話にも特に爽やかな明るさと歯切れの良さが出るように注意を払い、誰からも可愛がられる社会人一年生になれるように心がけていく。

3. 基本マナー

私たちは一番下の立場であることから、常に目上の方とかかわることになる。そんなとき、マナーを知らずに相手に不愉快な思いをさせることのないよう基本的なマナーを身につけておくことが好ましい。

① 敬語

敬語は、立場や状況に応じて上手に使い分けることが大切だが、何よりも心から相手を敬う気持ちで接することが基本となる。

<日常で使われる丁寧な対応>

- ・すぐに行きます →すぐに参ります

- ・ちょっと待ってください →少々お待ちください
- ・ここに来てください →こちらにいらしてください
- ・いいですか →よろしいでしょうか
- ・どうしますか →いかがいたします

<間違いやすい文章>

- ・今、園長先生はいらっしゃいません →ただいま、園長は不在でございます
- ・そのように園長先生にお伝えします →そのように園長に申し伝えます
- ・職員室で伺ってください →職員室でお聞きになってください
- ・〇〇さんが参りました →〇〇さんがいらっしゃいました
- ・どうぞお菓子をいただいでください →どうぞお菓子を召し上がってください

② 電話対応

電話対応で最も注意すべき点は、「お互いの顔が見えないこと」である。通常の会話では、相手の表情・感情・仕草を感じることが出来るため、多少のミスも意思の疎通によって補うことが出来るが、電話となると、こちらの「言葉」一つで誤解され、重大なトラブルに発展してしまうことも事例としてかなり多い。面識のない相手となれば、より慎重かつ丁寧に対応しなければならない。

<電話対応の基本>

- ・利き手でない方で受話器を取る。
- ・受話器のそばには常にメモ用紙とペンを置いておく。
- ・取り次ぐ場合は、相手の名前と要件をしっかりと伝える。
- ・取り次ぎたい相手が不在だった場合、その旨を伝え、①こちらからかけるか ②再度電話してもらうか ③伝言を受けるかを確認する。
- ・相手が先に切るのを確認してから受話器をおろす。

【研修を終えて】

社会人としての自覚を持ち、常に向上心を持って日々学んでいく。何事も、経験が一番の成長材料だと感じる為、失敗を恐れず何度も挑戦し、その経験を自分の力にかえていけるよう努めて過ごしていきたい。

山形県幼児教育研修大会

期 日 令和6年6月10日(月)

会 場 山形テルサ(山形市)

記録者 学校法人諏訪学園 認定こども園諏訪幼稚園・諏訪の杜保育園

乳児部 羽柴 香菜子

【概 要】

テーマ 一人ひとりの「こどもがなんなか」をまもる質の高い幼児教育を
～社会全体でつむぎ未来へのつなぐために～

演 題 幼児教育の社会的意義を社会に発信する方策
～社会に開かれた教育課程を意識する～

講 師 一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

専務理事 加藤 篤彦 氏

【内 容】

こども園は子ども社会の中で、どの幼児も受け止められる居場所にならなくてはならない。幼児教育の無償化は親の就労対応や子育て支援だけではなく、人生における基礎を培う「幼児教育」の有効性、子ども自身と家族と社会のウェルビーイングにつながる重要性から日本でも実施されることとなった。目に見えにくい「やる気」「根性」「忍耐」等の非認知能力といわれる心の育ちは幼児期に発芽し、そして一生涯において影響をもたらす。その時期に関わる保育者にはより高い専門性が求められている。



子どもにとって遊びを通して学ぶことは重要で、日々の遊びの中から子どもたちが学んでいくことができるよう、それら遊びが十分にできる環境を豊かに整えることにより子どもが得る資質・能力の質が変化していく。これからの教育は学びを深める「探究志向」への転換が必要であり、自身がわからないことに対して立ち向かえる「楽しい」「面白い」という子どもの育成、「自分ごと」として考え行動しながら学ぶ子ども主体の生活が重要となっている。子ども自身がやりたくなる遊び自体が学びであり、学びは誰かに教えられる、させられるものではない。保育者はそれら子どもの遊びからの発展を考え、予想して保育の環境を準備していく必要がある。

幼児期までの子どもの育ちに係る基本的ビジョン「はじめの100か月育ちビジョン」において、乳幼児の育ちには「安心」アタッチメント(愛着)「挑戦」豊かな学びと体験の繰り返しが大切で、それらが子どもの自立へとつながっていく。アタッチメント(安心)は人のつながりでしか得られないもので、保育者はその安心の基地を作り保障することが大きな役割となる。その中で子どもは自身の力を生み出し自立していく。安心安全を保障し、こども園が生き生きとした子どもの育ちを培う場であるよう、土台を作っていかなければならない。

全ての子どもにおいて幸せな場であるためには何よりもその場が「安心の場」でなくてはならない。それら安心できる場であることが、インクルーシブ教育につながり、その中で社会には多様な人がいて、一緒にいられるという「インクルーシブ」の考えを育ちの中で自然に身につけ子どもは成長していく。

【研修を終えて】

私たち保育者は、これからの未来を作っていく子どもたちと多くの時間を共に過ごし、関わりを持つ。それは子どもたちの続く未来に大きな影響を与えることを改めて実感した。

1日の長い時間、保育を必要とする子どもが多い中、保護者以上に子どもへ与える影響は大きい。その時間の中でどう子どもたちと関わるか。まだ言葉を発することのできない乳児も日々の生活やあそびの中で「不思議」「なぜ?」「どうして?」心弾ませ目を輝かせる瞬間がある。そして子どもたちは無償の笑顔とともにさらに遊びを深めていく。その笑顔を保育者がどうとらえ、次へつなげていくか。何気ない日々の生活の中でそれら心弾ませる経験が「もっとやってみたい」「次はこうしてみたい」の次の探究へとつながっていくように思う。同時のその姿は、保育者と子どもとのアタッチメント形成が十分に作られているからこそその経験であるように思う。0歳児生まれて数か月の子どものがずっと一緒だった母親や父親から離れ、入園した際は初めて事だらけに母親や父親を求めて大きな声で泣く。それは当たり前であり、そこから保育者との愛着関係作りがはじまる。アタッチメントの形成とともに家庭との信頼関係をも築きながら子どもと向き合う日々。試行錯誤を重ねながら子どもたち一人ひとりの好みを受け止め、安心できる保育者、こども園となっていく。その気持ちを園全体で持ち続け子どもと向き合っていきたいと思う。今回研修で多くのことを学びあたらためて保育者としての質の高い保育・教育を心がけていきたいと感じた。

私たち保育者は子どもの成長に大きく関わり、大きな影響をももたらす。日々その気持ちを忘れず、また互いにその気持ちを確認しあいながら、大きな未来を作っていく子どもたちの土台が広く大きく安定したものとなるよう安心できる保育者でありたい。

第31回山形県私立幼稚園・認定こども園教員研修大会酒田大会

第1分科会

期 日 令和6年10月11日(金)
会 場 遊佐町
[公開保育] 学校法人杉の子学園 認定こども園杉の子幼稚園
[研究協議]
記録者 学校法人いつき学園 認定こども園和光幼稚園
今野 直実

【概要】

研究主題 主体性と同僚性を高める保育をめざして
～これまでの“あたりまえ”を見直そう～
指導助言者 秋田大学教育文化学部 教授 山名 裕子 氏

【内容】

1 主題設定の理由

私たちは、子どもも保育者もそれぞれが主体性を発揮し共感的、協働的に学び合っていくことを「杉の子の『共主体』」と名づけ、日常のあたりまえを見直し、子どもの遊びや経験をつないでいく保育をめざして研究を進めてきた。

これまでの習慣や伝統を見直してきたことで、完成度を求めすぎてきた運動会や遊戯会は練習に追われることがなくなった。恒例の豆まきは、コロナ禍を機会に子ども達と保育者達とPTAで話し合い、保護者だけではなく子どもが鬼になる子ども主体の行事へと転換を図った。その結果、子ども達は自分たちでつくり上げる楽しさを知り、日常の遊びに夢中になる姿が増えていった。しかし一方で、保育者それぞれの思いや、日常の保育観のずれに戸惑うことがあり、価値観のすり合わせが課題になったことで、同僚性の育みの必要性を感じ、主体性と同僚性を高めていきたいと考えた。

2 取り組み

(1) 保育者同士が対話を深めていくための工夫

① ドキュメンテーションと日々の振り返り

月に1回発行される遊びや育ちの様子のできごとや日々の振り返りを作成し、子どもの姿や育ちを職員間で共有し、共通理解を図った。

② 様々なミーティング

職員会議の他に、担任ミーティング、学年ミーティング、預かり担当ミーティングを行い、活動を見直したり、発達や年齢ならではの姿や悩みを共有したり、様々な職員と顔を見合わせて、話し合うことができる場を大切にしたい。

③ 子ども参観

保育の良し悪しを見る参観から、子どもの姿や育ちから見た保育と一緒に考える子ども参観へ。多様な保育観や子ども観に触れ、グループワークを通して、それぞれの思いを話し、共



有し合っていく中で、子どもをまんやかに、それぞれの価値観について対話し合い、同僚性を育んだ。

④ ナイト園内研修

子ども参観を通してでた疑問や日常のあたりまえを見直していく為に、全職員で共通理解し、改めて小グループで意見を交わし合った。より多くの職員で話し合うことで、保育観の違いから衝突があったが、「杉の子らしさ」「子どもの発達」「子どもにとってはどうか」という視点で意見をすり合わせ、見直しの方向性を話し合うことができた。

(2) 子ども達が主体性を発揮する行事をめざして

[節分] 子ども・保護者・保育者が一緒に考えつくりあげていく子ども主体の豆まきへ。

[運動会] やらなければならない出来栄重視の保育者主体から、子どもも保育者も楽しむことができる共主体の種目への見直しを図り、子どもの「やりたい」に寄り添った競技へ。

[遊戯会] 日々の生活を大切にしたいとの考えに至り、0・1歳児は参加しない方向へ。

2～5歳児は出来栄よりも子どもと一緒に作っていく遊戯会へ方向転換することで、楽しんで発表し、自信にあふれた一人ひとりが輝く遊戯会へ。

(3) 日常のあたりまえの見直し

◆ 子どもの主体性への寄り添い方を見直そう ～「虫との触れ合いから」～

子どもの「触ってみたい!」「カブトムシと遊んでみたい!」という声を受け止め、虫への興味・関心の芽を育てていく一方、保育者の「命を大切にしてほしい」という思いを伝えていくことも大切。それぞれの主体性を発揮しながらも認め合うことが共主体であると気づいた。

(3歳児クラス)

◆ 自分の当たり前を見直そう ～「お互いの保育観や価値観を伝え合う為の工夫」～

保育者一人ひとりの価値観は違って当たり前であることから、「自分の価値観を押し付けない」「それぞれの保育観を認め合う」「対話しながら歩み寄る」ことが大切だと気づいた。子どもを中心とした考え方を土台に、相手の価値観を否定せずに歩み寄っていく必要性を感じた。

(4歳児クラス)

◆ 活動の在り方を見直そう ～「朝の会の必要性」～

その日の子どもの姿や活動で内容は変更しても良いことを共通理解し、子ども達にとって何が大切で何を育ませたいかを見極めていく。「朝の会」から「みんなの時間」へと名称の変更を検討している。

(5歳児クラス)

3 当日の公開保育の様子

◆ 問いに対する思いや考えを付箋に書きながら保育を参観する

[問1] 本日の子どもの姿から、主体的に遊びや活動に取り組んでいると感じたところ

[問2] 本日の子どもの姿から、遊びや活動をより深く、楽しく、広げていくために、あなたならどのようにかわりますか

◆ グループ協議での話題

〔3歳児グループ〕

- ・ その子の気持ちを汲み取る言葉がけや代弁を大切に
する一方、この言葉がけは必要だったのかと振り返
ってみることも大切にしていきたい。

その子の姿をどこまで見守るか、どう寄り添うかが
悩みどころ。保育者同士の対話を通して、様々な視点
からの考えに共感し考察し合うことで、共主体への
アプローチ方法が見えてくるのではないかな。



〔4歳児グループ〕

- ・ 一緒に遊んでいるわけではない同じ場に居合わせた
子ども達。次第に興味や心がつながっていき、考えを
出し合いかわり合う姿があった。

子どもの主体性を引き出す力は、子ども達のつぶや
きを拾いながら、遊びの展開をワクワクしたもの
にしていこうとする子ども達自身と保育者自身にあ
る。共にワクワクを楽しむことが、主体性を引き出す
ことにつながっていると感じた。



〔5歳児グループ〕

- ・ 「みんなの時間」という今日の振り返りの時間では、
楽しかったことだけでなく、困ったことも話題として
共有していた。子どもの伝える力や聞く力、共感する
力や相互扶助の育みにつながる「みんなの時間」だ
った。サークルになって座り、子どもも保育者も同じ目
線で話し合いの場を作り、雰囲気が良かった。

- ・ 行事は恒例になっているからではなく、主人公である
「子ども達」にとってどんな育みや学びがあるのかという視点で対話を重ねていきたい。



4 今後の課題とまとめ

「今までやってきたから」と受け継がれている方針や活動は大切だが、固定概念にとらわれ
すぎず、保育現場の中で「なぜ?」「なんのために?」と疑問が湧いてきた時が、あたりまえを
見直すチャンスである。しかし、自分の常識や意識を変えることは容易ではなく、変えていく勇
気が必要であると感じた。保育者同士の対話を重ねていく中でそれぞれの保育観や価値観の中
で生じる葛藤や悩みを、年齢関係なく、打ち明けられるような雰囲気づくりを心掛けていき
たい。そして、互いに相手の思いに共感し、思いやりの心を忘れず、対話し合う心が大切だと考
える。これからも、あたりまえについて見直しながら、変化ばかりを求めていくのではなく、こ
れまで大切にしてきた「杉の子の良さ」や「杉の子らしさ」とは何かについて話し合いを深め、研
修を進めていきたい。子どもも保育者も主体性を発揮し合いながら、保育を楽しく、変化するこ
とを恐れず、更なる保育の質の向上の為、職員同士、切磋琢磨していきたい。

5 指導助言

秋田大学教育文化学部 教授 山名裕子先生より

◆「主体性」と「同僚性」を「高める」ということ

- ・保育の実践として具現化する時に、主体と主体がぶつかり合う。どちらも正論であり、保育に正解はない。時と場合と状況により、子どもの価値観もぶつかり合う。
- ・正解がない保育だが、だからといって何でもいいわけではない。そこが難しさであり、醍醐味である。

◆「あたりまえ」を「見直す」ということ

- ・「見直す」「変える」ということを説明し、納得してもらうための「自分の考え」を表明して話し合うことには難しさがある。
- ・「やらなければ」「やらせたい」からという保育者の思い、子ども達の「やりたい！」に向けて、子どもと保育者が共に考えていくことが大切である。
- ・保育者同士の意見が一致しなくても、向かう方向や園全体の方針が同じことが重要である。
- ・行事は日々の保育の延長であり、子どもの興味関心、経験の積み重ねで得た結果だが、自分の業務を圧迫していないか、やらされていないか、子ども達が練習疲れを起こしていないか、目の前の子どもにあったものであるか等、行事の有無ややり方を見直す必要がある。例えば… 学期ごとの始業式・終業式、お泊り保育、朝の会、当番活動等。

◆「子どもの主体性」と「保育者の意図」

- ・生き物へのかかわりについては保育者の価値観や意図が表れやすく、「子どもの主体」と「保育者の意図」のせめぎ合いである。だからこそ自分の思いを出し合い、子どもと共に考えることが大切である。

◆「遊び」のさらなる充実

- ・主体的な「遊び」の保障。環境構成、教材研究、それらを含めた「計画」、生き生きした子どもと保育者が見える「記録」。環境に十分にかかわれる時間の保障や生活リズムの見直しが必要である。同時に夢中になって遊びこむ時間も大事にしたい。
- ・保育者もときには研修として一緒に遊んでみることも大切。保育者同士で「遊ぶ」こと、保育者の「やってみよう！」を保障してくれる園、「どうして？」とお互いに問い続けられる同僚性でありたい。

◆「主体」としての子どもをさらに育むために

- ・多様な他者がいることと、自分を認めてくれる保育者の存在が必要である。まずは一人一人を認めることで信頼関係を築く。
- ・遊びや生活の中での葛藤の経験は、本気と本気のぶつかり合いであり、一人一人の育ちから集団になっていく過程の保障である。

◆「あたりまえ」のさらなる見直し

- ・幼稚園は小学校の準備期間ではない。乳幼児期独自の教育・保育の保障の中で、興味関心があることをとことん遊びこむことが、結果として小学校の土台になる。
- ・正解はない保育だが、「こどもをまんなか」に考え続けていく保育者の問いにこそ、保育者自身の答え（応え）を見つけていける。



[山名先生の助言指導]

第31回山形県私立幼稚園・認定こども園教員研修大会酒田大会

第2分科会

期 日 令和6年10月11日(金)
会 場 酒田市
[公開保育] 学校法人アテネ学園 アテネ認定こども園
[研究協議] 港南コミュニティ防災センター
記録者 学校法人キリスト教若葉学園 認定こども園若葉幼稚園
主幹教諭 長橋 美香/千葉 百合香

【概要】

研究主題 楽しいね、またやりたいね。
～子どもの主体性によりそった保育教諭のかかわり～
指導助言者 羽陽学園短期大学幼児教育科 学科長・教授 高桑 秀郎 氏

【内容】

◎テーマの捉え方

子ども達は、生活や遊びの中で『やってみたいこと』や『知りたいこと』を見つけ自ら興味をもってかかわることで、充実感や満足感を味わうと考える。充実感や満足感は、「楽しいね。」「またやりたいね。」という子ども達の言葉から伝わってくる。この言葉が聞かれるような活動を展開していくにはどうしたらいいのかを探っていきたいと考えた。

また、自分の意思で行動が決定できる力が養われるような支援が求められる。そのためには、自らかかわりたくなり、自ら考えて行動できるようになるための保育教諭のかかわり方や環境構成のあり方を探っていきたいと考えた。

◎研究の手がかり

- ①子ども達がどんなことに興味や関心をもち、やってみたい・知りたいと意欲がわくのか、理解を深めていく。
- ②子ども達がまたやりたいと思える環境構成のあり方を探っていく。
- ③子ども達が活動している場面での、保育教諭の言葉のかけ方やかかわり方を考える。

◎研究の計画、実践

- ・昨年度、各学年担当が年2回園内研修を計画し、他の学年の担当者から参観してもらい参観した感想等を話し合うことを実践してきた。
- ・今年度は、昨年度の園内研修で学んだことを活かし、各学年でそれぞれ研究に取り組み実践してきた。取り組んだ内容はみんなで共有し、実践事例にまとめることにした。

◎研究のまとめと今後の課題

今回、研究テーマに沿った保育・教育を実践していく上で、『主体性』とはどういうことなのかということから、改めてみんなで考えることができた。

『主体性とは』

自分で決められることは自分で決め行動すること。

決まっていることをやるかやらないか決めることではなく、自分はこれをやってみてみたいからやってみようかなというところからのスタートになる。

子ども達の思いを受け止めて、子ども自身から「やってみたい。」という気持ちがうまれてこない、「またやりたいね。」という気持ちにはつながらないということを再認識することができた。

「楽しいね、またやりたいね。」と思える単発的な教育・保育ではなく、その前のもっと深い部分の『やってみたい。』という気持ちがある子ども達を育てることの大切さに気付かされた。そのためには、日頃から、子ども達へ丁寧なかかわりをして、子どもと保育教諭の強い信頼関係を築いていくことが大切なことだと学ぶことができた。

今後も継続して、子ども達へのかかわり方を考えていきたい。

【本日の保育より】

★2 歳児・満3 歳児

主に見られた遊び・・・砂遊び（川遊び）・落ち葉を使ったおままごと・いもほりごっこ
子ども達は、何でも自分でやりたいと、意思や欲求を伝えられるようになってきている。

「走りたい!」「ボールを投げたい!」「虫や落ち葉を拾って持っていきたい」などという気持ちを受けとめながら環境作りや言葉がけをして遊びを広げてきた。今は、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わっている。

今までさつまいもの生長を見てきたので、今日はいもほりごっこをみんなで楽しんだ。「明日もやりたい!」という子ども達の姿が見られた。



★3 歳児

主に見られた遊び・・・砂遊び（ダム作り）・秋さがし・おままごと

年上の子ども達の遊び方や道具の使い方などに憧れをもってチャレンジしていた。やりたいことと出来ることのギャップに、怒って泣いたり、試行錯誤したりする姿が見られた。その中で、自分の気持ちを伝えたり、相手の思いを聞き話し合ったり、気持ちに折り合いをつけて過ごしている。

先週から、葉っぱを拾って頭につけたり、色の変化に気付き、見立てて遊んだりする姿が見られ、「葉っぱを貼りたい」という声も上がり、模様を描く子もいて遊びが広がっていった。

今日は、「もっと外遊びがしたい」との声が多かったため、子どもの声を聞き、さりげない援助の中で遊びが発展していくかを想定しながら過ごした。伸び伸びと過ごし、満足した表情が見られた。



★4 歳児

主に見られた遊び・・・砂遊び・おままごと・虫捕まえなどアテネフェスティバルに向けてグループで色塗り制作を行った。自分の意見を伝え合いながら協力して制作する姿があった。

様々な虫が出来上がり、最後に見せ合ったところ、いろいろな形や色があることに気づき、伝え合う子ども達の姿が見られた。



★5 歳児

主に見られた遊び・・・砂遊び・虫捕まえ・ボール遊びなど今回で6回目になるビー玉転がし大会。各グループごと試行錯誤しながら作る姿が見られた。

毎回グループ分けをし、自分のアイデアを他のグループでも活かせるようにしてきた。「もっとやりたい!」「ここをこうすればよかった!」と発見や気づきを伝え合う姿が見られた。



【講師より】

◎乳幼児期の子どもは・・・

- ・保護者や保育教諭等の特定の大人との親しい人間関係を軸にして営まれる生活からより広い世界に目を向け、生活の場や他者との関係や興味関心が急激に広がる。
- ・依存から自立に向かう。
- ・運動機能が急速に発達し、身体を通して様々な環境にかかわる中で色々なことをやってみようとする行動意欲が高まる。
- ・保護者や周囲の大人との愛情の中で見守られているという安心感に支えられて行動範囲は広がりを見せ始める。

◎一人ひとりの発達の理解に基づく保育の評価

- ・子ども達の遊びや生活実態、発達に対する理解
- ・指導全体のねらいや内容が適切だったか、環境に構成が適切だったか
- ・必要な援助が行えたか

⇒保育者の主観だけでなく、他の保育者の視点も交え、多角的に評価することが大切。

◎保育者側のアプローチを考える3つの観点

① 保育者の子どもの理解

子どもの現在の育ちの実情と個々の経験、能力、興味・関心など

② 保育者の環境設定

子どもの興味・関心をひきつけるものであるか？

子どもの実情に即し、活動に必要な能力を発揮できるものか？

ねらいにあった活動を選んでいるか？

環境設定が目的にあったものになっているか？

③ 活動における保育者の子どもに対する働きかけ

子どもの活動を引き出すための働きかけが適切なものであるか？

◎遊びの経験と自己決定

- ・「遊び」・・・安定した情緒の下で子ども自身が興味・関心を持った環境に関わることによって生まれるもの
- ・「自己決定感」・・・自分の行っている活動は人に指示されたものではなく、自分で決めて行っているという感覚

→遊びの中で子ども達自身が「自分で考え」「自分で選択し」「友達の意見に耳を傾け」「自分で行動を調整する」と言った経験を大切にする。

経験が子どもの発達を促すばかりではなく、社会的、心理的な発達に好ましい影響を与えていくことが期待できる。

⇒子ども自身が考え、判断する機会を与えることが大切

◎応答的環境

- ・応答的環境・・・子どもが行動したことに対して正当な評価が与えられること
- 達成できなかった子どもに対する応答的環境とは、やろうとしたことが「できた」「できなかった」という評価だけでなく、子どもの取り組み方を含めて評価していくことが大切。

【グループワーク】

- ・子どもの主体的な活動を支えるため、あるいは主体性を育てるために意識していることや大事にしていることを付箋に書き出しグループごと情報交換を行う。



《大事にしていることの活動例》

- ・一緒に参加し楽しさを共有している。
- ・子ども同士話し合いの時をもっている。
- ・子ども達の声に耳を傾け、意見を尊重する。心の動きも大切にしている。
- ・イメージを聞き出しながら、一緒に作り、次の制作へとつながるようにする。
- ・子ども達の思いをかたちにするために、サポートをする。
- ・失敗を大切にし、まずは自分でやってみる！その後、どうしたらいいか、どうしていくかを子ども達と考えている。
- ・異年齢交流を大切にし、自分達もやってみたいという気持ちを尊重している。

【助言・指導】

◎保育者に求められている役割とは

- ・子どもが興味を抱く環境を準備していくこと。
- ・環境へのアクセスを通して子どもが能力を十分に発揮できるようにすること。

○子どもの気持ちを尊重し、自然な流れで子ども達にやりたいという気持ちを出させるような環境を準備するのが大切。

○子どもが夢中で遊べるという事は、興味あることに全力で取り組んでいる、充実した時間を過ごしているという証。

○友達とのかかわりの中で、他者の存在や他者の思いに気付くプロセスが必要。この経験を通して自己主張しつつ周囲と調和のとれた行動を学んでいく。

○園の魅力は子ども同士の育ち合いがあること

幼児教育が環境を通しての保育と言われるのも、保育者が用意した環境だけでなく、そこに関わる子ども同士が影響し合い、子どもなりに情報を交換し、蓄えながら、挑戦しようという意欲を育んだり、行動を生み出したりすることにある。

⇒自分らしさを作るには、本当に自由な選択があって可能になる。

自分で自分を発揮できるような場を見つけられるような多様さを重視していく。

個を見ること、個を認め、それぞれの活動を尊重していくかかわりが子どもの自己の存在感に関する実感を高めることで、その子どもならではの興味・関心に繋がる。

その多様な興味・関心に対応できる選択肢、あるいは集団として共通に感じている興味・関心を捉え、環境を構成することが主体性を育むことに繋がる。

第31回山形県私立幼稚園・認定こども園教員研修大会酒田大会

第3分科会

| | |
|--------|---|
| 期 日 | 令和6年10月11日（金） |
| 会 場 | 酒田市 |
| [公開保育] | 学校法人酒田幼稚園 認定こども園酒田幼稚園 |
| [研究協議] | 酒田市総合文化センター |
| 記録者 | 学校法人酒田幼稚園 認定こども園酒田第二幼稚園 教務主任 齊藤 奈央／教諭 佐藤 しおり |

【概 要】

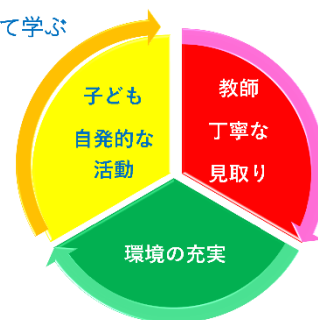
| | |
|-------|---------------------------------------|
| 研究主題 | 一人一人の遊びが充実するために ～自発的な活動を支える丁寧な見取り～ |
| 指導助言者 | 山形県教育局義務教育課 指導主事 倉岡 寿幸 氏 |

【内 容】

1. 研究にあたって

昨年度より2年間を通して、一人一人の遊びが充実するために自発的な活動を支える丁寧な見取りをテーマに研究を進めてきた。「令和の日本型学校教育」「幼保小の架け橋プログラム」など新時代の幼児教育のあり方について学びながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を踏まえ、園の教育理念および指導計画の見直しに取り組んだ。そのうえで、遊びを通して育まれた子どもの気付きや学び、新たな興味・関心・意欲などに教師自身が気付くことを大切にし、子ども達の自発的な活動を支え一人一人の遊びの充実につなげていく。その積み重ねが子どもの主体的な姿につながると考えた私達は3つのサイクル【教師の丁寧な見取り→環境の整理→子どもの自発的な活動につながる】が必要であると予想し、研究を進めた。

遊びを通して学ぶ
ために



2. 研究の手がかり

○保育記録（ドキュメンテーション）の継続

- ・子どもの自発的な姿を捉えるために、「教育・保育要領 解説」を活用した。
- ・個人の見取りだけではなく、事例検討会を設け、教員間で話し合うことを大事にしてきた
→ 記録の中に発達や学びを連続的に捉え、どうつながってきたかを考え、“遊びを通して学ぶ”とはどういうことなのか、教員間で話し合った。
- ・事例検討会において、自発的な遊びの場面を話し合う中で、個人では見取ることができなかった意見を聞いて様々な見取りを知る機会となり、教員間で子ども観の共有を図った。
- ・見取ったものをドキュメンテーションとしてまとめ、家庭へ発信した。

○環境の見直し

自発的な活動を支えるとはどのような環境かを教員間で点検しながら、事例検討を重ね、話し合い、教職員で環境を整えてきた。

○教育課程の見直し

- ・幼児期にふさわしい生活か、学校法人教職員全員で考えを出し合った。
→ 内部研修会において、教育課程の内容や文言などについていくつかのグループに分かれて意見を出し合ってきた。(2024年度より学法の教育課程が改訂)

3. 取り組みとして（昨年度）

○保育記録（ドキュメンテーション）の継続

- ・「教育・保育要領解説」を頻繁に開くようになり、いろいろな文言に触れ、本や資料をよく読むようになった。また、文字として残すことで子どもの姿を振り返ることができ、記録することで発達や学びを連続的に捉えることができてよかった。しかし、言葉の選択や表現など、言い表す難しさも同時に感じた。
- ・事例検討会を土曜日に設定し、教員間で考える機会を設けたり、アプリを活用していつでも誰でも各クラスの活動の様子を確認できるようにしたりして工夫した。

○環境の見直し

- ・園庭の道具置き場は、場所や素材、道具を子ども自身で選び、準備できるようにした。水飲み場にグレーチングを設置して子ども達が水を汲みやすいようにし、取り出しやすさを考えた棚の設置も行った。十分な遊びの場所や時間の確保の環境づくりのために、1・2歳児の砂場の確保をしたり、コロナ禍で時間割となっていた園庭遊びを見直したり、子ども達の声を聞きながらの場づくりも大事にしてきた。

○教育課程の見直し

- ・「教育目的」「心も体もたくましい子ども」 → そのままで大切にしていく。
- ・「教育目標」「めあてをもち、美しい心とつよい体で、たくましく生きる子どもを育てる」を
→ “地域の文化と人を愛し、自ら行動する子どもを育てる”とした。
(酒田を愛する子どもを育てたい)
- ・「目指す子ども像」「健康で明るい子ども・仲良く遊べる子ども・礼儀正しい子ども・思いを
↓
表現できる子ども・進んで学べる子ども」を
「育みたい力」と変えて、“生きる意欲・自他を尊ぶ心・学び、考える力”とした。

4. 取り組みとして（今年度）

“子どもの自発的な活動”を支えるために、教師ができること、組織として見取る力を向上させることを大切にしてきた。

○“子どもの自発的な活動”

- ・研究のスタートにあたり、自発的な活動とは何かを教員間で出し合い、その内容をカテゴリー分けし、子どもの姿はどうだったか、どんなところが自発的な活動であるかを取り上げた。意見を出した時に、「じっくり（意欲）」「かかわり（協同）」「考える（興味）」の3つに分ける結果となった。
- ・「じっくり（意欲）」…調べたり、集中したり、試行錯誤をする姿、自分なりに問題を解決しようとする力
- ・「考える（興味）」…友達の遊びや作品を見て、「やりたい！」と思ったり、挑戦したり、新しいことや難しいことにも意欲的になる姿
- ・「かかわり（協同）」…先生や友達にアドバイスを求めたり、友達と思いを共有したり、話し合

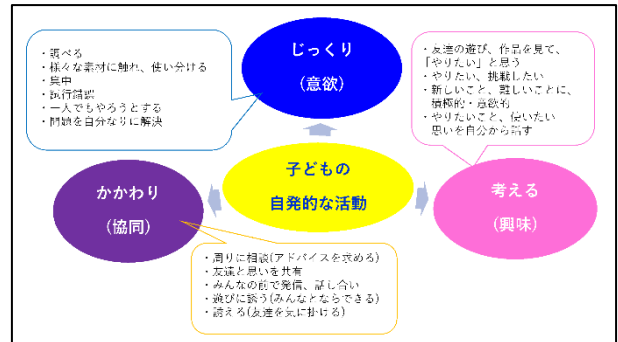
ったり、お互い誘い合ったりする姿

○自発的な活動を支えるために教師ができること

- ・「じっくり（意欲）」…時間や場所の保証、情報提供、園だけではなく、家庭を巻き込むことも大事である。また、本物を知る機会をあえてつくることを大切にする。
- ・「考える（興味）」…新しいものとの出会いの場を大切にし、知っていてもすぐには教えず、子ども達にもっと考えてもらい、気づきを待ち、気付くことを大切にする。
- ・「かかわり（協同）」…教師が頼られる存在となり、一緒に調べたり、橋渡しをしたり、相手を認めたり、教師にとって大切にしたい部分を再確認した。

○組織として見取る力を向上させる

- ・活動記録はアプリを通して継続して残していく。
- ・事例検討を重ね、丁寧な見取りへとつなげていく。



5. 研究の成果と今後の課題 (◇成果 ◆課題)

◇事例検討を通し、「じっくり（意欲）」「かかわり（協同）」「考える（興味）」の3つのポイントで、子ども達の見取りを共有しようとするようになった。

◇自分だけではなく、他の教師の見取りも聞き、次への保育につながった。

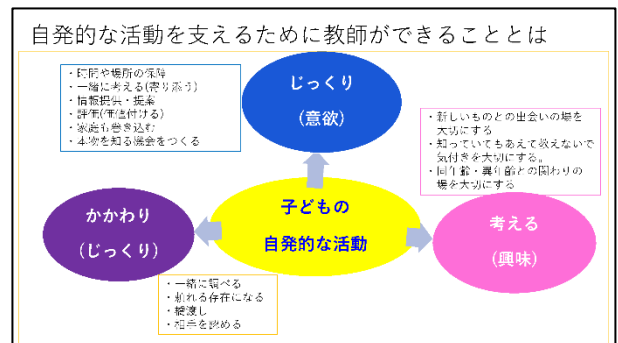
◇様々な子どもの見方の参考になった。

◆教員会や園全体で子ども観について話し合い、発見をしながら、丁寧な見取りへつなげるために、3つのポイントをより共有していくことが必要であると感じた。

◆子どもの姿や遊びが「教育・保育要領解説」の中のどの分野の学び、姿なのか、結びつくまでに時間がかかってしまい、ドキュメンテーションづくりに時間を要してしまった。

◆事例検討の時間づくりが難しいため、3~4名の少人数のグループで随時行っていきたい。

◆教師の思いやねらいが子どもや保護者にどの程度伝わっているのか、家庭への発信・理解をはかることが難しい。



6. グループ討議

○参観において見てほしいポイント

- ・一人一人が自発的・協働的に遊んでいるか。
- ・子ども達が楽しく、自発的に遊べる環境構成になっていたか。
- ・子どもに寄り添っている教師の姿勢が感じられたか。



○学年毎の問い

【年長】

- ・今日の保育で、子ども達がじっくりと遊び込む姿はありましたか。
- ・一人一人の遊びを見取るための遊びの渡り方や工夫を教えてください。

【年中】

- ・今日の環境設定においてお気づきのことがあれば教えてください。



・日頃の保育室の素材や場づくりで工夫していることを教えてください。

【年少】

- ・思いを伝え合う場面での教師の関わりとして、今日の保育で気付いたことや感じたことを教えてください。
- ・相手の思いに気付けるような働きかけとは。日頃、工夫している点があれば教えてください。



○指導助言者より

- ・「年中は年長の遊びを壊してしまうため、関わらせることが難しい」という話題があったが、本当にそうだろうか？壊す理由、触ってみたいとなった背景を考えていくことで視野が広がっていくのではないだろうか。“環境の固定化”は、そのような形も固定化していくことになる。
- ・保育者の構えとして、専門性の目で子ども達に溶け込みながら客観的に見ることで見取りをすることができる。
- ・保育者は子どもと一緒に心が躍っているか、主観的に見る見取りも大事である。
- ・アウトプットをすることで、大人も子どもも学び直すことができる。

7. 指導助言

乳幼児含め言葉が少ない時期の子どもにとって、学びとはとても静かな世界になるのではない。傍にいる大人（保育者）が気付かなければ無かったことになってしまう、静かな世界での学び。乳幼児は遊んであげる存在、という感覚をもつ保育者は、静かな世界に簡単に踏み入ってしまう。一瞬でかき消されてしまう儚い世界が、乳幼児の学びの世界であると思う。

【2年前の酒田幼稚園】

既製品の玩具が多く、子ども達の目指す姿を考えた時に、限定的な遊びの中で限定的に育てることが教育的によいのか、教師に投げかけた。玩具の既製品をそろえて遊ばせることは、支援センターでもできることではないか？子どもを、遊びを通して育てていくと考えた時に、既製品の中で遊ばせるだけで十分なのか？豊かな体験と言えるのか、教育の専門家として問う必要があるのではないか？研究を始めるにあたり、【①教育的意義として「環境」を見直す ②環境のマンネリ化・固定化は人間関係の固定化を生む ③応答性のある物的環境へ ④幼児教育の基本は「環境を通して行う教育」 ⑤「環境への研究」は、保育者としての責務】の問い直しを投げかけた。4つの視点から研究をまとめると、環境の再考、子ども理解・見取り（子ども観の変換）、組織機動力、管理職の視点から、主題に向かって研究をすすめてきたことと思う。目の前の子どもが成人した時にどんな大人になってほしいかをイメージすることが大切である。



【遊びの重要性を語るか】

これからは3R（reading（読み）writing（書き）arithmetic（計算））から、4C（Creativity（創造性）Critical thinking（批判的思考）Collaboration（協働・協調性）Communication（コミュニケーション））になる。4Cは豊かな遊びの中に含まれている。決まった答えを出す能力は急速に不要になっていると言われている。これから子どもと教師に求められることは、いろいろと疑問をもつ力、『こういうことを考えたい』と構想を描く力、その人なりの『心のベクトル』（感性・知覚・美的感覚）を育てていくことである。この中で教師の役割は、多様な才能を引き出したり、異質な存在を排除せず、居場所をつくり見守ったりする、子どもと並走するファシリ

テーターであること。幼児教育の果たす役割とは、非認知能力の観点から、幼児教育こそ非認知能力を育む時期である。

【なぜ遊びを中心とした保育は広がらないのか】

社会的に求められる点があったり、教職員で話し合う時間がもてなかつたりすることなどが、遊びを中心とした教育が抱える慢性的な課題となっている。教えないと子どもは育たない、遊んでさえいれば子どもは育つ、という偏った考えを議論していくことがこれからは必要になってくる。子どもの遊びや生活を見取るには、教育観の転換・子ども観の更新と共有が必要である。

【見取るとは】

複線的に見る、背景を見る、多面的に見る、その子の面白さを見る、その子のワクワクを見る、内面を見るということが、見取るということに含まれるのではないか。砂で遊んだり、石を集めたり、イメージをひろげたり、自然物を持ってきて魚に見立てたり、猫じゃらしをラーメンに見立てたり、子どもが「何に喜び、何を伝えたくて、自分の元へ走ってきたのか、知りたい」という思いを含めて、子どもの姿や状況を見取り、次の援助につなげていくか、次の援助の可能性を探っていくことが保育者に求められる大切なことだと考える。



「見ること」と「見えること」は違う。保育者が目指すことは、「見ようとして見ること」ではなく、「見えてくることを見逃さないで見ること」、実は見えている「子どもをよく見ている」と「子どもがよく見えている」は全く異なるものである。

その子にとっての“今”とは、その子に教わる。目の前の子どもが教えてくれる。「興味がある」「心が不安定だよ」ということを行為や仕草で教えてくれている。その子の面白さや真剣さをその子の価値として心を寄せて、謙虚に感じられる保育者になれるとよい。

【見取るための援助】

“遊びの質”をどう高めるか？

- ① 子どもが環境に興味関心をもつ
- ② 興味をもった対象に関わろうとする
- ③ おもしろいと繰り返し、過去の経験を関連づけたり、編集したり、取捨選択したりしながら、さらなる面白さに向けて再構成する
 - ・プロセスの深まりが“遊びの質”を高めると考えられる。
 - ・遊びのプロセスが大切にされた教育課程の実現が大切である。
 - ・対象との関係の深まりが遊びの質の高さとなる。
 - 一人一人が、やりたいことを生成
 - 一人一人の、内的時間の充実
 - ・幼児の興味や関心に基づいて、遊びが十分に繰り返し、発展するように援助することが大切である。
 - ・園全体、教育全体で取り組み続けることが重要である。

【これからの幼児教育への期待】

- ・幼稚園教育要領等の着実な実施（教育課程の実現）を進めていく
 - 都合のいい勝手な解釈はしない
- ・環境とは何か、環境への探究を、日々の基本にする。
- ・遊びとは何か、遊び中心の生活で育てる教育課程の実現。
- ・資質・能力は子ども主体の遊びを通して育まれるという自覚をもつ。
- ・子ども主体の遊びが「学び」の盤石な基礎を育むという自覚をもつ。
- ・子どもや同僚と共に、徹底した「遊びこみ」を研究する。

- ・遊び・その子ども理解等について研修する園内体制づくりの充実を行う
→目の前の子どものための園内での保育研究・保育の更新ができるか…。

【まとめ】

「子ども観×対話」:「対話」とは、参加者があるテーマに関して自分の思いを対等な立場で持ち寄り、互いのズレを認識し合いながら、よりよい方向性を導き合うプロセスを含むコミュニケーションである。

「遊び×対話」:互いの葛藤を通して、「どうすべきだったか」「ああすべきだった」よりも「私はこう感じた」「私はこう考えた」と、自己フィルターを通して、自分語りをしていくことに対話の大切さがあると考え。自分の保育観を語ることは、自己表出することでもあるため、みんなで成長し合うことにつながる。

「幼保小の架け橋プログラム」の鍵:それぞれの園の先生が、小学校の先生に何を伝えられるか、何を語れるか、力量が問われる。→遊びの質向上に向けた持続可能な園内の取り組みが重要となる。目の前の子どもと目の前の環境の中で、どのようにして子ども達の強みやよさを生かし、育み、遊びの質を向上させていくか研究をしていく。

日々子どもの遊びを中心に丁寧に保育している園は、子どもの見方、育ちの姿や発達観、環境構成、一人一人の遊びの意味と援助を小学校側にたくさん伝えたいはずである。そのためには、教職員間で「遊びは学び」の意味を語っていくことが大切となる。

第31回山形県私立幼稚園・認定こども園教員研修大会酒田大会

第4分科会

期 日 令和6年10月11日(金)
会 場 酒田市
〔公開保育〕 学校法人龍州学園 認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム
〔研究協議〕 琢成コミュニティセンター
記録者 学校法人龍州学園 認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム
保育教諭 高橋 智子

【概 要】

研究主題 主体性を育む環境とは
～園庭の見直しを通して遊びの深まりを考える～
指導助言者 群馬大学 名誉教授
臨床発達心理士 松永 あけみ 氏

【内 容】

1 テーマ設定の理由

自然豊かな園庭には、樹木・草花が生い茂り、ビオトープや畑は様々な生き物の出会いに満ちている。子どもたち一人ひとりの好奇心が掻き立てられ、「なぜ?」「試したい」「やってみたい」と動きだし、できた時の満足感・達成感を味わう姿が見られる。

しかし、果たして私たち保育者は、この環境を保育に生かしているだろうか。「恵まれた環境」と思い込み、環境構成が疎かになってはいないだろうか。子どもたちが自ら周囲の環境に関わる姿を見逃してはいないだろうか。そもそも、環境に主体的に関わろうとする力を育むことができているだろうか。さらに、昨今は子どもの事故に関する事案が多く、安全面を危惧するあまり、子どもの行動を必要以上に規制し、主体性を抑えてしまっていないだろうか。このように課題が多く見えてきた。

以上のことから、園庭の環境の見直しの視点をきっかけに、主体的な遊びの深まりを目指して子どもの主体性を育む環境について探っていききたい。

2 テーマの捉え

- ・「主体性」とは子どものどんな姿か。また、遊びの深まりとはどんな姿のことをいうのかについて意見を出し合い共通理解していく。
- ・「主体性」について、子どもが自ら考え動き出す姿や自ら心を動かしまわりの環境(人的・物的)に関わろうとしている姿などを主体的と考えることを共通理解する。
- ・「遊びの深まり」については保育者によっても学年によっても捉えやイメージが違うのが現状。子どもたちの姿を追っていくことで、「遊びの深まり」についても考えていこうと研究をスタートする。
- ・環境に恵まれていると感じている本園の園庭ではあるが、「主体性」が育まれるような設定、工夫はなされているか、遊びの深まりにつながるような環境、保育者の関わりとはどんなことか等の視点で研究を進めていくことを確認する。

3 研究の方法

◎KJ法による園庭の環境の現状把握と見直し、改善点を出し合う。

- ◎環境設定・改善（子どもの動線、遊びの動向からの遊具、教材の置き場所の見直しなど）
- ◎事例研究・エピソードからの振り返り（子どもたちの見取り、環境にどう関わっているか、教師の関わりと環境の再構成について）
- ◎成果と今後の課題

4 研究の内容

◎KJ法による園庭の環境の現状把握と見直し、改善点を出し合う。

本園の園庭の魅力を出し合い、現状把握すると共に改善点や職員の「こうしたい」「やってみたい」を書き出し可視化していく。

（KJ法によって出された改善点）

あそびの基地となるようなテーブル（木製ケーブル）や、パラソルなんかもあったらいいね。

池の近くに網や洗面器を収納できたらいいね。

グラウンドにサッカーゴールやタイヤを置いておく場所があったら扱いやすいかも！

身近に作物の成長を見たり、世話をしたり収穫できるように園庭でプランター栽培をしよう！

雨どいは砂場付近だけでなく、井戸の周辺でも使えるよう砂場と井戸の間の見えやすい場所に置こう。

うさぎ小屋は子どもが触れ合いやすいよう園庭のなかに…

ビールケースや板など子どもたちが自分たちで持ち運べて、基地を作れるような素材を増やそう。

（環境構成・改善後の子どもの姿の例）

椅子やテーブルを自分たちで動かして、いろいろな場所に遊びの基地ができた！！



飼育ケースを増やして手に取りやすい場所に。生き物を捕まるのが楽しくなった。じっくり観察もできるね！「なぜ？」「不思議！」知的好奇心や「かわいい」親しみにもつながったね。



うさぎ小屋を泥んこ広場から保育室すぐ横に持ってきたことで、世話をしやすくなりうさぎとの触れ合いが増えた。うさぎへの関心が広がり、生き物への親しみの思いにもつながっているね。いずれ「命」の大切さに気付いてほしいね。遊びの中で、ビールケースが自由に使えることで組み合わせてゲージを作って触れ合う姿も。

◎事例研究・エピソードからの振り返り（公開保育資料から抜粋）

エピソード（4歳児）
 前日までの子どもの遊びのイメージから保育者がコンテナで囲いを作る。そこを基地にして遊ぶ子どもたちの姿からコンテナを動かし、出入り口を作ることで、子どもたちのイメージが広がった。また、自分たちでコンテナの向きを変え、「冷蔵庫」に見立てる姿もあった。次第にお店屋さんのイメージになっていく。その姿を受け、囲いの中にあった木製ケーブルのテーブルを囲いの外側にすると囲いの中（お店屋さん）と囲いの外（お客さん）のやり取りが生まれた。
 しかし、翌日は天候が不安定なこともあり、朝のコンテナの設定をしないで園庭に出ると、子どもたちだけでは前日の遊びの続きは始まらず、保育者がともに環境設定していくことで遊びが再開した。



前日までの子どもの動向をよく観察し、翌朝の環境設定に生かしていく。さらに、そこで遊ぶ子どもたちの姿をしっかりと見取り、遊びを通して子どもたちにどんな経験をしてほしいかによって、次の姿を予測しながら環境の再構成をしていくことを大事にしたい。
 今回は出入り口があることで、子ども同士のイメージが膨らむこと、また、テーブルの位置でやり取りが生まれることを予測しての再構成だった。
 子ども自身が道具、用具を置き換え、遊びに合わせて環境を変えていく姿は主体的で理想ではあるが、保育者が先走ると今回のように遊びが始まらなかった。保育者が一緒になって場を作っていく経験を重ねていくことで、いずれ自分たちで遊びを進めていく力となることを願い、目の前の子どもの発ち段階に合わせた保育者の関わりが必要だと思った。
人的環境である保育者の関わりについて、育ってほしい子どもの姿を見据え、待つ、見守る、促す、一緒に遊ぶ、考え合うきっかけをつくるなど、考え続け実践していくことが大切だと思った。

○エピソード（1歳児クラス）
 保育室でいつも走り回るBちゃん。他の子にぶつかりあぶない。特に仲良しのCちゃんと一緒にになるとエスカレート。好きな遊びが見つからないから？遊びの設定（環境構成）がマンネリ？もっと工夫しなければ…

走り回りたい気持ちは当たり前。危険のないように広く設定することで満足し次の遊びに意向する場合もある。Bちゃんはよく見ると、遊びを工夫している。他の子に貸したりして思いやる場面、他の子に気を遣う場面があった。保育者はそこをみているか？認め、褒めているか？「やんちゃな子」と思い込んではいないか？子どもと一緒に楽しむ。制御するのではなく、関係をつくっていく。一緒に楽しんでいい。保育者のやりやすい視点での環境構成になってないか？

片付け～0歳から2歳（3歳も個々、状況に応じて）保育者が率先して片付けていい。片付ける姿を見せる。
 ・片付け～きちんとしていると遊びにくい。一方で散乱しすぎても遊びたくなる。
・ひっきりかえすことが楽しい。ひっきりかえしても困らないもの（環境・遊具等）を出す。
 ・友達とのかかわりを求め過ぎない。

○エピソード（2歳児クラス）
 片付けに悩む。ひっきりかえす。あぶない。

・保育者を求める子について～
 ① 保育者だとスムーズに遊びが進むから
 ② 一緒にいて安心したいから
 保育者を求めるのは、遊びがうまく進むからだとしても、もっと奥にひそむものがあるのかもしれない。急がずとも、十分遊んで満たされると、自分から離れていく。
根本のところを解決しないで次にステップしても変わらない。「年長だから」と考えず対応してもいいのでは。やはり個々の見方を丁寧に。

○エピソード（5歳児クラス）
 なかなか友達とつながらないRくん。野球で遊びたいと担任を誘う。担任とキャッチボールをしているところにクラスの子どもたちが参加すると、遊びからめけてしまう。

*これらのエピソードの振り返りを受け、物的環境の視点ばかりを意識しがちになっていたが、人的環境である、私達保育者の関わりの大切さ、子どもたちにとって「安心・安全」が土台になること、子どもの姿を丁寧に見取ろうとする保育者の姿勢についても改めて確認する。

◎成果と今後の課題

- ・「幼稚園」から「認定こども園」への移行に加えしコロナ禍には公開保育や、各園の職員が集まった研修は自粛傾向にあり、今回のような研修の機会をいただいたことで、職員間で保育の質について話し合う雰囲気が出たことは大きな成果である。また、ベビールームと幼稚園の職員が一緒、研修を行う機会になり、0～5歳の保育のつながりについても考え合う良いきっかけとなった。
- ・環境の見直しと改善では、子どもの動線を考え、用具の置き場所、使いやすさ、片付けやすさ、必要な量、素材などを見直しの視点として改善し、その後子どもたちの動きが実際に変わっていった。保育者が理想をもって話し合い、その都度環境の見直しを行っていくことの大切さを再確認した。
- ・「自然環境に恵まれた園庭を保育に生かしているか」そんな疑問から始まった研究だが自然はありのまま、そこにあるだけで、子どもの行動を引き出し、好奇心・挑戦心を駆り立てたり、「なぜ?」「どうして?」などの不思議や疑問を子どもたちに抱かせる環境である。子どもたちが、環境に自ら関わり、その特徴や面白さ、魅力を肌で感じ、理解し遊びに生かしている姿に保育者も園庭の良さに気付く機会になった。私たち保育者の子どもを見取る視点を研ぎ澄まし、環境が引き出す子どもの姿をよく見ようとする姿勢ができてきたことは大きな実りである。
- ・環境に誘発されて「なぜだろう?」「やってみよう」と心が動かされ、自ら動き出す姿は主体的と言えるのではないだろうか。また、思いを実現するために、じっくりと事象に向き合ったり、調べたり、何度も試したりする姿や、時に意見がぶつかりながらも友だちと考えを出し合ったり、力を合わせたりしながら試行錯誤する姿も主体的であるし、「遊びの深まり」につながっていくと思う。こうした子どもの遊びが存分に行えるもの、こと、時間が保証され、さらに保育者の意図的な関わりが主体性を育む環境と言えるのではないだろうか。
- ・ありのままの自然の中でも子どもたちは育っていくが、その視点だけでは不十分。保育者が意図を持ち環境を構成したり、再構成をしていくことで遊びが深まっていくのではないかと改めて感じた。物的環境の再構成だけでなく、人的環境としての保育者の関わりも遊びを変化させる大きな要因となる。保育者は、待つ、見守る、促す、一緒に遊ぶ、考えるきっかけを作るなど、様々な関わりを考え実践していくことを続けていきたい。
- ・事例研究を進める中で物的環境の視点が大きくなっていったが、保育者との関わり、アタッチメントによる安心感・信頼関係の構築など当たり前の大切なことを再確認した。特に0, 1, 2歳では「安心・安全」を土台に保育にあたることを共通理解できた。
- ・「主体性」を大切に考えた時、子どもたち自身で遊びを進めていく姿をイメージし、急ぎがちだが、発ち段階に応じて保育者が一緒になって遊び場を作っていくことが必要である。一方では、保育者が意図をもち率先して遊んだり、子どもたちのつぶつぶの遊びが消滅したり、壊れることを恐れず、子どもたちを信じて見守り続けていくことも大切ではないかと感じる。こうした経験が土台となって、いずれ子どもたち自身で遊びを進めていけるようになっていくのだと思う。0～5歳の長いスパンで考えた時、年長までに育ってほしい姿を園内で確認し合いそれぞれの時期に必要な経験を積み重ねていけるよう連携を図りたい。
- ・今現在、各学年の遊びや環境設定の共通理解のために園庭の見取り図を活用している。情報共有と翌日になるための記録の取り方などは今後の課題であり研究を続けていきたい。



(グループ協議)

- 研究発表後、A～Kグループに分かれ協議を行う。各グループで質問や話題になったこと
- ・以前若草幼稚園を参観したことがあるが、広大な園庭の雰囲気は昔と変わらず、この中で育まれることがたくさんあり、素晴らしい。一方で、以前は人数も多く、危ないことをしたら止める子がいて、子ども同士学び合う姿がたくさんあり、園庭で過ごすだけで培われていた「力」が、今は育たなくなっているのかもしれない。現代は怪我・先生たちの働き方、意識も含め全

- く違う。このままではいけないと研究を始めた主旨がよくわかる。
- ・園庭の環境が素晴らしく、恵まれていると感じた。
 - ・水遊びに井戸を使っていた。水道だけでは、個々がそれぞれに使うが、井戸は誰かの協力が必要で、友達や異年齢の関わりが生まれていた。
 - ・虫かごや網がたくさんあり、取り出しやすい場所にあった。他の素材も豊富で、子どもの動線が考えてあり、工夫が感じられた。
 - ・防災用のヘルメットが各所にあり、防災意識の高さを感じた。
 - ・クラスに一台 iPad やデジカメ、トランシーバーの活用など設備面も整っている。
 - ・2歳児も含めのびのび遊んでいた。危ないと思われることも止めずに見守っていた。注意禁止の言葉が聞かれなかったが、安全面に関するルールはあるのか？
園より→起伏のある園庭だからこそその動き、体力向上等がみられる。安全面には十分配慮しながらも、「やってみたい」という意欲が主体性に繋がると信じ、努力している。
 - ・保育者の配置はどうしているのか？
園より→トランシーバーを各担任、フリーの職員が持ち、安全面の確認、幼児の動向を把握できるようにしているが、機器に頼りすぎることなく、職員間で声を掛け合い、遊びに入ったり見守ったりしている。
 - ・2歳児と0.1歳児の交流、介護施設との関わりについて
園より→コミュニティセンターのホールには、外を通らず気軽に行くことができ、1歳児と2歳児が交流している。また、隣接している介護施設など地域の方との触れ合いの場も設け、日頃から外部の大人とも交流がある。



(助言者より)

○本日の保育について

- ・環境を整えすぎていたところもあったのでは？ただ、今はこういう環境設定が必要なのかもかもしれない。いつになったら、自分で必要なものを自分で作りだすことができるのか。
- ・保育室内で、年長児が主体的に遊び、協同の遊び、ルールのある遊び、数人でルールをつくりだす遊びが見られたが、園庭では見られなかった。なぜルールのある遊び（協同の遊び）が見られなかったのか。そもそも若草幼稚園の園庭は魅力的な環境ではあるが、そのことに満足して、協同的な遊びが生まれにくいのか。
- ・年長になったから、協同的な遊びができるようになるわけではない。認定こども園では0歳児～卒園までを見通してどう育ててほしいのか、卒園するときどんな姿になってほしいのか、どんなことを大切にしていけるのかを長いスパンで考えていくことが必要。

○園庭での遊び、環境について

- ・外（園庭での遊び）、空気、風、雲、太陽などの自然を直接感じる、動植物とのふれあいができることが、園庭の重要性である。
- ・アフォーダンス…保育場面では、環境から子どもたちの行動が引き出される、引き出される行動は、子どもによって異なる。→環境がいかに大事か。重要か。
- ・園庭の環境設定では、朝出しているものも子どもの様子に合わせて、出したり引いたりすることが重要である。日常の環境から、前日までの子どもたちの遊びにそった環境設定、子どもの遊びに寄り添った環境の再構成を、室内と同じように行っていくことが必要になってくる。

○人的環境について

- ・アタッチメント理論から考えられる3つの機能
 - ① 安全の基地 →ネガティブな感情から守る機能
 - ② 安心の基地 →その人といるとほっとする、気が楽になるなどポジティブな環境をもたらす機能

- ③ 探索の基地 →主体的な遊びを支える関わり
 子どもの心を支える、子ども同士の関わりを支える
 0・1歳児だけではなく、年長になっても大人になっても必要な存在である



○主体的な遊びの重要性

- ・他者にさせられる、させられているのではない
- ・自ら考える
- ・自ら面白さを見出し、試行錯誤して、充実感、達成感を感じる
- ・様々な感情を経験する：楽しい、悲しい、嬉しい、悔しいなど
- ・自己統制 情動調整
- ・他者理解：他者の気持ち 考え 特性 など
- ・仲間との共感・協力・協同することの楽しさを感じる
- ・知的好奇心
- ・自分で考えて自分で見出す
- ・一緒に感じていく、社会人としてどういう人が望まれるのか
- ・ルールに従うことも大事だが、自分で考えることの重要性
- ・人に言われたからその通りに従うだけの子ではなく、小さいときから自分で考える経験、大人の思い通りにいかない幼児の方が保育を反省させられる子なのかもしれない。

生涯発達の視点
からの重要性

○幼児教育で大切にしたいこと

- ・基本的信頼感をもてるようにしていくことで、他人に頼ることができる。
- ・並列関係でやりとりの楽しさを感じられるようにしていく。

(公開保育後の気づき、課題)

○職員で共有したこと、振り返り

- ・参加者から多くの感想やご意見をいただき、本園の魅力を再確認し、励みとなった。また、研究にあたり、今まで以上に職員間で話し合いの場をもてたことは、保育の喜びややりがいにつながった。保育者自身が考えることや試行錯誤する楽しさを感じたことが、研究を続けていける意欲につながっていくと感じた。
- ・環境構成の難しさを改めて感じた。松永先生より、「整えすぎたのではないか」「園庭での協同の姿が見られたか」というご指摘をいただいた。子どもの年齢や時期、これまでの経験、ねらいによって環境構成も変わってくるので、やはり幼児理解が大切である。そして、「主体性」を意識した環境設定、教師の関わりについて今後も研究を続けたい。
- ・本園としての「協同」の姿を共通理解できるよう努めたい。それには、0～5歳児の生活の中で、どんな経験を積み重ねたいか、「協同」とはどんな姿かなど実際の子どもを通して話し合っていきたい。
- ・ベビールームも公開したが、日頃から介護施設の利用者、幼稚園の職員や運転者との関わりがあるため、見慣れない方々に対しても大きな不安なく過ごす姿があった。その良さを生かし、今後も連携を深めたい。あわせて、0～5歳を通しての教育課程や指導計画の見直しをしながら、職員間で共通理解しやすいような内容、方法を考えていきたい。
- ・「遊びの深まり」については、今後も継続して事例研究を通し、考えあっている。

第31回山形県私立幼稚園・認定こども園教員研修大会酒田大会

第5分科会

| | |
|--------|---|
| 期 日 | 令和6年10月11日(金) |
| 会 場 | 酒田市 |
| [公開保育] | 学校法人明照学園 認定こども園浄徳幼稚園・じょうとく保育園 |
| [研究協議] | 酒田まちなかホール |
| 記録者 | 学校法人いなば学園 幼稚園型認定こども園いなば幼稚園 石川 温子/木野 佳奈 |

【概 要】

| | |
|-------|---|
| 研究主題 | 子ども主体の保育を目指して ～あそびの時間とみんなの時間の相乗効果～ |
| 指導助言者 | 玉川大学、洗足こども短期大学 非常勤講師 宮前幼稚園・宮前おひさまこども園 副園長 亀ヶ谷 元讓 氏 |

【内 容】

1. テーマの捉え方

本園では「たくましく こころゆたかな 成長を」というスローガンを掲げ、子どもたちの生活の中で遊びを重視し、受容的で応答的な雰囲気の中でひとりひとりの思いや興味を大切にしながら子どもと向き合ってきた。

園内研修にて研究を進めてきたが、子ども主体であってほしいと願いながらも、本当に遊びが大切にされているのか、保育者主導になってはいないだろうかという悩みがあった。昨年度は、従来「自由遊び」「一斉活動」と呼んでいた時間を「あそびの時間」「みんなの時間」と呼ぶようにあらため、玉川大学教授の田澤里喜先生からお話を伺い、その呼び名の概念を深く知ることによって保育者が共通認識を持てたことは大きな成果だった。今年度は、それぞれの時間がよりよい相乗効果を生み出すことを実現するための、様々なアプローチを探求していきたい。

2. 研究の方法・内容

○はじめに

「あそびの時間」と「みんなの時間」とは？

- 「あそびの時間」：以前は「自由あそび」と呼んでいた時間。子どもたちが興味関心をもとに主体的に選び取り、十分に遊び込むことができる時間である。遊びの中で子どもが育つことを意識し、遊びが充実する環境を考え、整えていくことが大切。
- 「みんなの時間」：以前は「一斉活動」と呼んでいた時間。保育者主導の下、クラスのみならず活動する時間ではなく、子どもたちの興味や関心を豊かにするためにクラスなどで共有する時間や、家族団欒のような安心の時間など。決まった時間を作らず、ない日もあったり、みんなが集まる帰りの会などを相当させたりなど、形式よりも考え方を大切にする。

◎ 「あそびの時間」と「みんなの時間」の関係

本来、子どもたちの生活は大人によって区切られるものではなく、一日がつながりを持ち、どの時間も大切な時間である。子どもたちの生活の中の「あそびの時間」と「みんなの時間」がつながって相乗効果となり、遊びが充実していくと考える。

① 物的環境へのアプローチ：各保育室の設定について

- ・ 保育室の環境にどんな意図をこめているのか、他の保育者と共有することで自分の意図の明確化や、他の保育者の話を聞くことで様々な視点やアイデアをもらえる機会としたいと考

えた。それぞれの保育室を実際に見ながら行なったワークだったが、指定の時間では足りず先生たちが環境設定をいかに重要視しているかということ、そしてひとりひとりがたくさんのアイデアを持っていることがうかがえた。結果として、物的環境が豊かになるだけでなく、職員同士の対話が増えるきっかけにもなった。

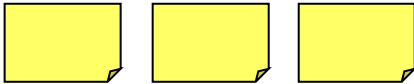
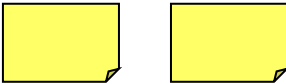
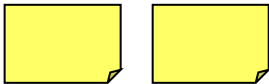
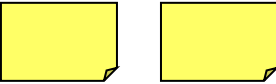
②人的環境へのアプローチ：園内でお互いの保育を観察

・保育の実際を見合う時間を設ける。各クラスの保育の雰囲気に出会うことができ、園の文化にもつながる。「保育者のかかわりでいいなと思ったところ」「保育者のかかわりで聞いてみたいところ」「自分がかかわりで悩んでいるところ」を見る視点としフィードバックをもらうことで、見てもらう側の保育者にとって自信に繋がるような研修になった。再びこのような形の研修を求める声が出たことはとてもよかった。

③それぞれの保育へのアプローチ：亀ヶ谷先生の事前研修を通して

・自園の良さや強みを再認識し、悩みや課題をともに考えていくきっかけ作りとして、亀ヶ谷先生を招いての事前園内研修にて田の字法を使ってのグループワークを行なった。

<田の字法>

| | |
|---|---|
| <p>①嬉しい・手ごたえ (頑張っていること こだわっていること 子どもたちのおもしろい遊び 嬉しい姿 環境構成の工夫等)</p>  | <p>④今年の課題 (こんなクラスになるといいな こんな子どもたちに育ってほしいな)</p>  |
| <p>②悩み・課題</p>  | <p>③これから (悩み 課題に対して これから取り組みたいこと)</p>  |

3. ここまでの総括

◎年少3歳児

ひとりひとりが安心して園生活を楽しめるように保育者との信頼関係を築くことを優先してきた。ひとりひとりが夢中になる遊びを見つけられるよう「みんなの時間」が子どもたちにとっての遊びのきっかけとなっていけばと願う。「みんなの時間」において、ポイントの見極めと保育者の援助に悩むことがあった。やり方は様々であっても、しっかりとした信頼関係があることで安心して生活を送れるため、安心の場で好きな遊びを見つけることができるよう、子ども理解やクラスの理解が重要であると実感した。

◎年中4歳児

「あそびの時間」を見てみると、ひとりひとりが好きなことや自分の興味のあることに積極的にかかわり、じっくりと遊びを楽しむことができていると感じる。しかし、「みんなの時間」では全員が興味のあることを取り上げることは難しく、中にはどうしても気持ちが向かない子も見られていた。亀ヶ谷先生から『ひとりひとりの幼児理解は「良さの発見」から導きだされる』というキーワードをいただき、その子の特徴や良さ、興味関心、友だちとのつながり方について多くの気付きを得ることができた。保育者は個の特徴や思いをよく理解し、その子が主体的に、より幅広い経験を体験できるよう様々な手立てを考え、模索していく必要があると実感した。ネガティブな視点から脱却したひとりひとりの深い理解と様々な実践を繰り返し、「みんなの時間」を有効に活用しながらひとりひとりが集団の一員として自己発揮し充実感を味わえるように努めていきたい。友だちや周囲の環境に刺激を受け自分の興味関心として広げていったり、集団の中で自分を発揮したり認められたりする経験を大切にしたい。

◎年長5歳児

集団で向かうことの楽しさや集団ならではの良さを生かすことに着目し、個の遊びを大切にしながら遊びへの興味関心やより深い学びへとつながることを意識し実践を行なった。個の興味関心が集団（クラス）へと広がり、そして遊びが広がったり深まったり、様々な場面でひとりひとりが自己発揮し協同して遊ぶ姿が見られた。個の良さを大切にしながらも、集団も意識しつなげる場として「みんなの時間」を活用することで、個の良さでクラスの良さがどんどん広がっていくことを感じた。

土台になるのは保育者による丁寧な子ども理解と遊びの理解、受容的で対話的なかわりの積み重ねがあったと考える。保育者がひとりひとりの良い面に着目し、あたたかなまなざしを向けかかわってきたことが子どもたちのモデルにもなり、お互いを認め合い協同して遊ぶ今の姿につながったように思う。この土台があるからこそ「あそびの時間」でも「みんなの時間」でも自己発揮し、集団として協同して遊ぶ姿が見られるようになったのだと感じている。

◎まとめとして

保育者とのしっかりとした信頼関係の下、安心して園生活を過ごせる力が育まれること、そして自分の好きな遊びを夢中になって楽しめる力・友だちや周囲の環境から刺激を受け、自分の興味関心意欲を広げていく力・集団の中で自己発揮する力・友だちと協同して遊ぶ力、その根底を支えるのが保育者の受容的対話的雰囲気と良さを見出していく視点と考える。「対話」をより保育に活かせるように、今後ウェブ型記録にすることで保育者同士の「対話」をより効果的に活かしていけるように取り入れていきたい。

この研究を通して、保育者だけでなく園としても多くの得られたものがあり、それを活かしつつ、子どもと保育者、子ども同士、そして保育者同士の対話と連携（＝同僚性）を大切に、子ども主体の保育を目指していきたい。

【助言指導】

★一人ひとりの存在が大切にされている

（例）

- ・すいかの種…個人写真付きカップ

→ 写真があるだけで種に対する思いや見方が変わってくる

- ・作品…題名、何を作ったか

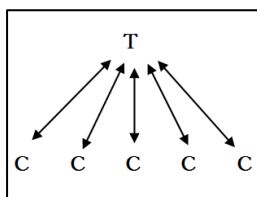
→（片付けなければいけない状況もあるが）作っている工程や出来上がった作品を写真に収めたり、掲示したり可視化する事で子どもの思いは満たされる。

- ・「みんなの時間」の在り方（年長児）…どういう姿勢で参加するか、一人ひとりが主体的に参加できるための工夫が必要。子ども一人ひとりが仲間（友達）や先生に対して信頼感をもち共通の理解があるからこそ落ち着いて待つことができるに繋がる。

★多様な遊びの拠点が室内、室外に保障されている

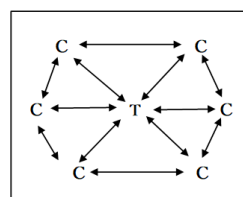
- ・ままごとコーナー、乗り物遊びの充実
- ・発達に合わせた拠点設定、道具の充実
- ・築山で豪快に遊ぶ経験
- ・それぞれの年次クラス前にフリースペースがある

★保育者と子どもの関わりを図で表すと・・・



～4月・一学期の頃～

- ・保育者(T)が中心。
- ・常に保育者一人で子どもと関わる。



～子ども同士の関係性ができてくる～

- ・保育者も必要不可欠な存在だが子ども同士が関わりながら必要に応じて保育者が関わっていく。
- ・友達との関わりが深まる。
- ・子ども同士を繋いでいく意識を持ちながら保育をしている成果が表れてくる。

★幼児の主体的な活動と環境の構成（幼稚園教育要領参照）

- ・主体的に活動を展開することが幼児期の教育の前提
- ・思わず、関わりたくなるようなものや人、事柄があることが大事

① 子どもの主体性

「子どもの主体性」→「保育者が口出しをしてはいけない」と極端な理解をしている保育者が多い

- ・ “ VS (対立) ” ではなく “ & (～と～) ” という考え方



- ・ **見守る保育とは…** 子ども達の遊びを見守ることは大事。
しかし子どもに任せっきりは放任になってしまう。
協力的な援助、支援、指導が大切。
- ・ **子ども達が自由感をもって選択できる自由な保育とは…**
子ども達が自由な発想、選択ができる保育も大切。
しかし、みんなで取り組むからこそ楽しい時間、活動もある。
- ・ 自由保育と一斉保育の賛否ではなく両方大切だから “ & ” だという考え
(著者：大豆生田啓友『子どもが中心の「共主体」の保育へ』参照)

環境を通して行う教育
 幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味を持って環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない。
 (幼稚園教育要領解説より)

主体的とは？
 (幼児が計画的に構成された環境に)
 主体的に関わるとは・・・
 「幼児なりに (思い) や (願い) をもち続け、関わっていくことである。」

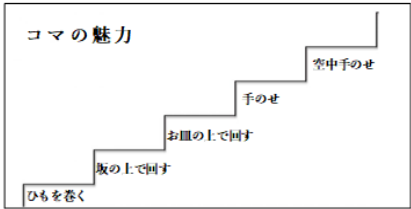
シンプルだが、とても大切な考え方。遊びに対して子どもの思いがないと関わりたいと思わない。子どもが思いや願いを持つこと、関わっていくうちに遊び方は変化していく。それが継続、持続していき思いを持ち続けられることを主体的という。

《 今日姿から 》

- ・ 化石発掘 → 化石に似た石、泥の塊を発見 → 手押し車に乗せて運ぶ → ブラシやスプーンで整える
⇒ 見つけた化石を図鑑と照らし合わせたり、見比べたりできる環境
- 結果** 子どもが化石に対して主体的に関わっていけるような環境構成や保育者の工夫があったからこそ、子どもの化石への思いや願いが深まることに繋がった。

《 コマにまつわる環境 (神奈川県川崎市 宮前幼稚園・宮前おひさまこども園 事例) 》

- ・ 年長児クリスマスプレゼント → コマ → 冬休み明けにコマ遊びが盛り上がる
⇒ 上達していくうちに難しい技、場所に挑戦し始める (平坦な場所から困難な場所へ)
⇒ 子ども達が自発的に難しさを求める姿に応じて場所作りをした
- ・ コマは回せるが手のせが難しい児への援助
⇒ 多くの子は回っているコマを指でつまんで手のひらへのせた
⇒ つまんで手のひらへのせることが難しい
⇒ そこで…
⇒ 傾斜のある板、手のせという技への「投げる」「手を出す」段差を少なくした装置を作成



結果 子ども自身ができた感を味わうことのできる環境となった。園長先生＝コマ名人 (得意) だからこそ考えついた装置、環境構成。子どもの姿、思い、願いは何かを摸索した結果。

結論 子どもが思いや願いを持ち続けて関わっていけるように保育者も環境を構成、再構成しながら保育していくことが大切。

② 環境の充実、再構成、教材研究

○ 幼児の主体的な活動と環境の構成

- ・ 環境の再構成が必要不可欠

例) 砂場 → 4月(新学期)と8月(水が気持ちよくなる時期)の環境構成では必要な道具が変わってくる。

幼児の主体的な活動と環境の構成

幼児が興味や関心を持ち、**思わず、関わりたくなるようなものや人、事柄**があり、さらに、興味や関心が深まり、意欲が引き出され、意味のある体験をすることができるように**適切に構成された環境**の下で、幼児の主体的な活動が生じる。
(幼稚園教育要領解説より)

基本なことだが基本は大事

≪ 絵の具遊び (5歳児) ≫

- ・ 黄色、緑、桃色、青を準備 → 混ぜてもきれいになる色

願
結
果
論

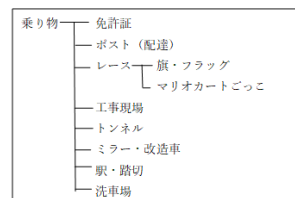
子ども達が様々なきれいな色水を作るのではないかと遊んでいるうちに手や筆についた絵の具が混ざりあい…きれい?とは程遠くなった絵の具コーナーと水コーナーを合体させ、思いきり楽しめるコーナーへと再構成。日々、子どもの心の動き、姿に合わせながら環境を整えていくことが大切。

≪ 教材研究・遊びの課題・取り組み発表 ≫

○ 5歳児 まつ組

講師感想

保育者が子どもの意見に丁寧に答え、関わり、環境を構成させたことが子どもの興味関心を深めた



★Work マップ型記録 乗り物遊び (マインドマップ使用)

- ・ 乗り物遊びがより充実するための環境とは?
- ・ 取り組み、工夫 (宮前幼稚園・宮前おひさまこども園 事例)

例) ガソリンスタンド、洗車場 → 本物のブラシ、ホース (廃材) で制作 → 自然に仕事生まれる → 子どもの姿から環境の必要性を気づかされる

結論) 子どもの思わず関わりたくなるようなものや人、事柄についてマップを通しながら考えることは大切

- ・ 『発達』「ウェブ型記録とカンファレンス」佐伯絵美 著より

→ 「日常の“お喋り”がとても大事。その日、心を動かされた瞬間を、思わず言葉にして誰かに伝えたい。」心の動きが大切

→ ウェブ型記録は、日々の保育の中で心が動いたことを「お喋り」しながら、やり取りや課題を同時にマップにしていく媒体。他者と一緒に語り合う中から記録や計画が生まれていく

- ・ せりりひじり幼稚園 園長 安達 譲 氏の言葉

「他人のレシピを借りて、いつかは自分の味がだせるように」

意味) 保育の積み重ねの中で魅力的な環境構成の工夫が生まれてきた。先輩たちの素敵な環境構成の工夫を借りて、後輩たちは真似しながらいつかは自分で考えた保育や味をだしながら環境設定ができるように

③ 子ども一人ひとりへのまなざし

○ 4歳児 ばら組

講師感想

M君を中心にマップを広げることで、個別理解やM君の魅力をクラス全体へとみんなの時間を活用して丁寧に発信することができた

- ・ こどもへのまなざし (宮前幼稚園・宮前おひさまこども園 事例)

保育者) Kくん4歳児 (年中児)

願

乗る物遊びだけでなく他の遊びにも興味を持ってほしい。友だち関係も広げてあげたい

背景

年少から進級して2か月、乗り物遊びへの興味関心は高いがほかの遊びには興味を示さない

Kくんへ丁寧に関わりを持つ → 一週間後 → 「乗り物を甘く見られたら困る!」保育者の考えに変化

保育者に何が見えた?

→ 出発前にならぬ乗り物をピカピカに洗車してから出発する

- 免許証をかならずセットして出発（担任がK君のために作成）
- 乗り味から乗り物の異変に気付く（シャフト故障）
- 砂場で遊んでいる子を運搬、他児との関わりを発見！

結論 子どもの視点に丁寧に向き合うことで保育者のまなざしや枠組みが変化する。

④ みんなの時間・あそびの時間

○ 3歳児 はと組

「自由保育」と「一斉保育」 P.10

- 子どもにとってふさわしい生活としてもっとも重要なことは、**子どもの能動性が尊重されているか**ということである。保育の形態が自由であっても自発性が引き出されないような自由では望ましくないし、一斉の保育（場面）であっても**子どもの自発性は大事に**されなければならない。
- 「遊びを中心とした保育」とは、単に「自由」か「一斉」か、といったような保育方法や保育形態で分けた場合の「自由」な保育のことを指すのではない。子どもの発達に即した保育を目指す理念であると考えたい。子どもにとって**どんな経験が必要か**ということを第一に考える保育のことである。

「自由保育」と「一斉保育」②

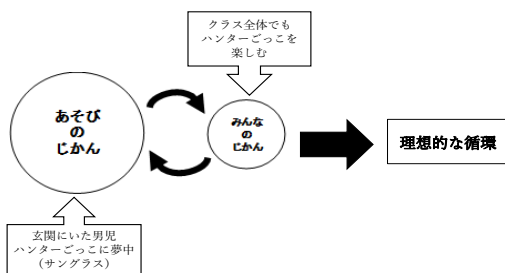
- 子どもが生み出す**自発的な活動は**もちろん第一に大切にされ、それを保障する時間が十分に確保される。そしてまた、同時に**必要な経験を積み重ねていく**ために、そして**自己充実感を高める**ために、必要に応じて**クラス全体グループで取り組む一斉的な活動も柔軟に取り入れられる**のである。
- 遊びを中心とした保育とは、単に子どもに自由に遊ぶ時間を与える保育ではない。保育者からの適切な援助を受けながら、**自発的活動としての遊びを中心とした生活の中で、子どもが必要な経験を積み重ねていくことができる保育**である。本書では、遊びを中心とした保育をこのようにとらえる。

友だちとやるから楽しい！
(リレーごっこ)

遊びを中心とした保育
～保育記録から読み解く「援助」と「展開」～
河邊貴子 著より

講師感想

みんなの時間＝①情報共有（発表タイム） ②楽しさ、面白さ、魅力を体験、共感生活の中で○君は～が得意。○ちゃんは～が得意。など子どもたちがわかる、知っているということが大事。誰かが気付いた**発見が経験**となる。



★（小学校において）一斉指導の何がどう問題なのか？

意味) 何事も素早くはやくできる子（ウサギ）と何事も遅い子（カメ）がいる。けして、はやい子が優れていて遅い子が劣っているというわけではない。

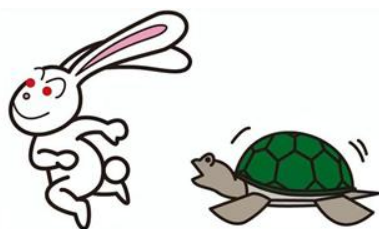
↓ もしかすると…

遅い子は、じっくり深く物事を考えて丁寧な仕事をするかも。
はやい子は、仕事が粗かったりはやとちりをしたりするかも。

↓ しかし

小学校の現状ははやい子が有利。
それって保育の現場でも言えるのでは…？

願い
保育の場においてもウサギとカメを意識して保育を進めてほしい。



★最後に・・・

・私たちの仕事は、子どもの命を預かるという重い責任を担っている。「自由保育」という響きのいい言葉に惑わされず真摯に向き合ってほしい。

第31回山形県私立幼稚園・認定こども園教員研修大会酒田大会

第6分科会

| | |
|--------|---|
| 期 日 | 令和6年10月11日(金) |
| 会 場 | 酒田市 |
| [公開保育] | 学校法人天真林昌学園 |
| [研究協議] | 認定こども園天真幼稚園 |
| 記録者 | 学校法人齋藤学園 認定こども園みどり幼稚園 主幹教諭 五十嵐 亜弥 学校法人鶴岡城南学園 認定こども園城南幼保園 主幹教諭 岡 美和 |

【概 要】

| | |
|-------|---|
| 研究主題 | インクルーシブ教育を考える ～子どもの主体性が発揮される保育環境を目指して～ |
| 指導助言者 | 羽陽学園短期大学 教授 渡辺 聡 氏 |

【内 容】

1. テーマの受け止め方

平成31年度から認定こども園になり、1歳児からの保育の実施を始め、在園する年齢の幅が広がった。現在、年齢だけでなく家庭の状況も個性も異なる、さまざまな子ども達が在園している。

そのような現状の中、子ども達が同じ場所で、ともに遊び、ともに生活していくにはどのような環境が望ましいのかを考えた。一人一人の異なる個性を“幼稚園”という場所でどのように発揮させていくのか、また、子ども達の興味や関心を育み、自立と主体性を促す環境とはどのようなものなのか、現在の環境に課題を感じ、テーマに設定した。

園生活の中で子ども達ができないこと、もしくはできていないことは、園内の環境にも原因があると考えられる。生活の流れや動線、発達の特性に沿った体験ができる環境になっているか等を見直し、取り組んでいる。

また、研究を進めていく中で、個と集団のどちらも大切にできる環境とはどのようなものなのかということについても探っている。多様な子ども達がともに学び、ともに成長し合えるようなインクルーシブ保育・インクルーシブ教育を目指していきたい。

2. 研究の手がかり

①現状の把握・共通理解

- 園内の環境設定について、園内のルールについて共通理解を図る。
- 子ども達の姿や動き、遊び方から現状を把握、理解する。
- 子ども達の姿や遊び方、学年のスペース、全園児での共有スペース、園内のルール等それぞれの問題点や課題を明確にする。随時ミーティング等の話題に挙げ、職員で現状について共通理解する。

②実践事例の検討・園内環境の再構成

○現状（子ども達の姿）から園内のルールや園内環境について検証し、再構成する。

○子ども達の姿をよく観察することで、実態を把握し、課題から環境を再構成するシステムを確立する。

- ・環境を設定した後は、子ども達の姿をよく観察し、検証、再構成することを繰り返す。よりよい環境構成の答えは、子ども達の姿にあることを実感することで、保育や教育の資質向上を図っていく。
- ・環境構成や個人的な指導については、保護者や酒田市の「育ちのサポート事業」との連携を図る。

【公開保育】

1 自由選択活動

●室内（オープンスペース）…ブロック、パズル、製作遊び、ままごと等

年中組のままごと遊びでは、それぞれ役割をもって遊ぶ姿が多く見られた。自分達で紙粘土を使って作ったアイスやケーキを遊びに取り入れながら、友達とのかかわりを楽しむ姿が見られた。

●園庭…サッカー、虫捕まえ、砂遊び、自然物を使った色水遊び等

年長組は虫を捕まえるだけでなく、図鑑や虫メガネを使い種類を調べたり体のつくりを観察したりしていた。色水遊びや砂遊びではこれまでの経験から工夫して遊びを進めていた。さまざまな遊びの中で、年齢を超えてかかわり合う様子も見られた。

●その他

遊びの準備から片付けるまでを『遊び』と捉えている。子ども達は片付け時間が示されている“お知らせ時計”と実際の時計を見比べて行動する姿があり、職員が必要以上に片付けを促すような言葉掛けをすることはなかった。

2 一斉活動…身支度・朝の会・帰りの会

●朝の会が始まるまで

それぞれ遊んでいた場所を片付け、各部屋に戻る。トイレや手洗い、水分補給等、自分達がやるべきことを年少組から年長組まではほとんど把握している様子が見られた。満3歳児クラスでは、短くより具体的な言葉で活動内容を知らせていた。それに対し、年長組では片付け時間と朝の会が始まる時間だけが、2つのお知らせ時計を使って表示されていた。

●朝の会

朝の会や帰りの会の進行の仕方は基本形が決まっており、年齢に応じて内容が追加されている。公開保育当日も年長児は朝の会や帰りの会を当番が進めていた。挨拶や歌、出席確認だけでなく、日付や天気等も確認することで、気候や数字、曜日等にも関心が広がるような内容になっていた。

●帰りの会

帰りの身支度は、全ての学年において言葉で伝えるだけでなく、目で見て自分で確認しながら取り組めるよう、持ち帰るものを一つ一つ写真で表示していた。帰りの会は、ゆったりとした雰囲気の中で、翌週への期待がもてるような進め方をしていた。絵本を読んだり、翌週の予定を伝えたり、子ども達の声に耳を傾けながら過ごしていた。来客への挨拶も定着しているような様子があった。

【分科会】

1 研究発表

(1) 研究の内容

全ての環境は独立して存在するのではなく、相互がかかわり合い、影響し合い存在している。子ども達はさまざまな環境にかかわる中で、たくさんの発見をし、学びを繰り返しながら日々変化、成長していくものと考えられる。子ども達の成長に大きな影響を与える『環境構成』とは、どのようなものであるか、実践を通して考えていく。(人的環境、物的環境、空間的環境)

また、次に挙げる4つの視点に立ち、よりよい園内環境について考える。

- ①生活の流れや動線を考えた環境について
- ②発達の特性に沿った経験を積み重ねることができる環境について
- ③自らが考え、生活していく力“自立心”を育む環境について
- ④人と人とのかかわりや“共生”を育む環境について

(2) これまでの研究のまとめ

本園では子ども達の主体性を育むために、「インクルーシブ保育・インクルーシブ教育」という観点から研究を進めてきた。その中で、年齢や成長過程、個性の異なるさまざまな子ども達が共に成長し、互いを認め合える『環境』には、まず、子ども達一人一人の“自立”が大切であることが感じられた。子ども達が自立に向かい園生活を送る中で、友達とかかわり、共生し、互いを認め合う気持ちが育まれていると感じる場面がいくつも見られたからである。

“自立”とは自分の力で物事を進めていくことであり、“共生”とは他者と共に同じ場所で生活することである。そのため、“自立”は自分一人のことで、“共生”は自分と他者との複数のことであり、自立と共生は相反しているかのように感じる。

しかし、子ども達一人一人が自立に向かうことは、徐々に子ども達の主体性を育み、インクルーシブ保育・インクルーシブ教育へとつながっていった。

2 グループ協議

4つのグループに分かれて、グループ協議が行われた。

公開保育を見ての感想や質問等を出し合った。また、各学年に設定されていた『問い』に関して意見を出し合ったり、具体的な手立てについて話し合ったりしたことで学びが深まり、一人一人にとって実りのあるグループ協議になったと思われる。

3 指導助言

羽陽学園短期大学 幼児教育科
教授 渡辺 聡 先生

《インクルーシブ教育を考える》～子どもの主体性が発揮される保育環境を目指して～

インクルーシブとは…答えがあるようでないもの。答えがないからこそ、自分たちで実践し「うまくいった」「今回はだめだった」と悩み、考えて保育をすることが醍醐味なのだ。

天真幼稚園の方向性、大切にしていることは子どもたちの姿や遊びをよく観察する(見守る)



こと、子どもたちの小さなつぶやきや自発性を見逃さない意識である。つまり “見る” = ケアすることである。そもそもインクルーシブとは障がいの有無を前提とせず、一人一人が異なることを踏まえ、ニーズや発達に応じた対応（保育・教育）をすることである。全体と一緒に行動できない子がいたとしても、どうして動けないのだろうと悩む必要はない。それはあたりまえのことなのだ。

1. 本園の物的環境

A. ユニバーサルな視点（誰もが快適に使える工夫）

(1) 「みて」即理解可能な情報 (2) 見通しが持てる (3) 集中できる

(ex. オープンスペース、小割ブース等) **自立**

B. 生活リズム作りで～大人に振り回されない生活 **自立** = (ex. 時計など)

C. コーナー活動（保育） **自立** **共生** ～一人でも・友達とでも活動できる空間

D. 異年齢集団の保育：子ども同士が影響し、育ち合う～ (ex. 預かり保育の環境等) **共生**

物的環境の留意点として

(1) 「選べる」保育環境：選択できる環境

設定で主体的態度の育成（保育者はやり遂げた価値を認めてあげるかかわりの反復：自尊感情の育成）

インクルーシブ保育：どの子ども同じに遊ぶは目指さない！

(理由：興味の狭さ・固執・繰返し・他者共有が下手・制止はパニック・暴れる

・ルールは守れない・集団化は苦手)

(2) 「安心できる」保育環境 →イライラ感の解消方法：「隠れ家」（基地）

①保育室をロッカーで区切る方法

大空間：友達と活動・ワイワイ空間 小空間：個人で活動・じっくり空間

②コーナー設定方法 絵本コーナー ままごとコーナーetc

2. 人的環境として

保育者の専門性：「どの子ども多様な特性をもつ子ども」として理解できる度量を持てる。

⇒PDCA サイクルで保育にあたる

<子ども同士の関係が育つ> を支えていくこと

介入を極力少なく＝「チーム」で保育にかかわることでPDCA サイクルを協同で行っていく。

<インクルーシブ保育の効果>

・一緒に過ごす時、いろいろな個性を自然に理解していく。

・一緒に過ごす時、助け合いや支え合いを学ぶ機会を得る。

・保護者にとっても障がいや子どものいろいろな個性の理解が進む。

《インクルーシブ保育で目指すこども像：子どもの主体性の育成》から自信をもって生活

⇒子ども自身が共に問題を克服していく姿（我慢・折り合い付け・言葉で交渉）

3. 制度的環境として

1 日スケジュール、年間カリキュラムの大幅な改編の実施が、視野に入ってくる。

助け合いやお互いに学ぶ機会を得ること、これは自立と共生である。なぜ自立させると共生に結びつくのか。自立すると自信につながるからである。自分が満足し自信があれば人に対しても優しくなれる、そんな社会の支え、基盤を作る為の保育がインクルーシブ保育の考えなのだ。どこかで自分と相手の思いに折り合いをつけないと社会は回っていかない。自分も納得し相手も納得できる最適解を求めるかかわり合いをしていかなければならない。それらができるような環境を考えていく。

子どもたち同士で問題を解決していくためには環境構成、物とのかかわり、事柄とのかかわりをつくっていくことが大事である。そのようなかかわりができるよう、環境を常に考え子どもたちのニーズや発達に応じた対応（保育・教育）をしていくということがインクルーシブ教育を考えるということなのではないか。

第 2 編

個人研究・
共同研究発表

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人金井学園 金井幼稚園

研究主題 幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進 ～主体的なあそびから学びへ～

主題の設定理由 (ねらい) 本園では、令和3年から3年間「子どもの主体的な活動としてのあそびが充実するための環境を考える」をテーマに研究と実践を積み重ねてきた。幼児の「やってみよう」が、あそびとして実現していく中で、子どもの興味関心、どこに面白さを感じているのか、子どもの姿を読みとり、次の環境を考えていくことの大切さを学び実践してきた。

昨今、「幼保小の架け橋プログラムが大切である」と言われているが、あそびを通して学び、環境を通して行う幼児教育と、教科を中心とした小学校教育には、まだまだ段差があると感じている。幼児教育と小学校教育の円滑な接続のためには、互いを認め合い、子どもの育ちの連続性を知ることが重要だと考える。幼児教育の重要性を改めて見直し、幼児教育で大切にしたいことを再確認するとともに、小学校との積極的な交流や連携を図り、子ども一人ひとりの育ちの連続性を考えていきたい。

1. 研究の方法

- (1) 幼保小の架け橋プログラムについて学び、理解を深める。
- (2) 子どもの主体的な活動としてのあそびの保育実践と事例検討会で話し合う。
- (3) 小学校との連携を図る。

2. 研究内容

(1) 幼保小の架け橋プログラムについて学び、理解を深める。

- ・ 文部科学省幼保小架け橋プログラム動画視聴

「幼児期の終わりまで育ってほしい姿を架け橋プログラムで活用するために」

白梅学園大学名誉教授 無藤隆先生

- ・ 園内オンライン研修

「幼児期の学びとその学びを活かした小学校での学び」

聖心女子大学 教授 河邊貴子先生

- ・ 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）の読み合わせ。

- ・ 保育雑誌「保育ナビ」幼保小の10の姿で見る小学校の活動の連載記事を読む。

まずは、幼保小の架け橋プログラムをよく知ることから始めた。園内研修で、幼保小の架け橋プログラムを学び、保育者間で話し合いをする中で、見えてきたこと、確認し合ったことが3つある。

- ① 幼小の接続と言っても、決して小学校に合わせ前倒しするのではない。幼児期はあそびが学び。あそびは環境を通して行われるものである。あそびを面白がり、探究し、あそびの中の対話を大切にしながら、子どもが主体的に遊ぶ姿を大切にしていく。あそびの充実にむけて更に工夫と実践を続けていこう。本園が行っている幼児主体の保育を続け、あそびの大切さ、環境づくりを探究しよう。
- ② 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿は、到達目標ではないことを忘れてはならない。5歳児だけでなく2歳児からの積み重ねで育っていくものである。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿は、総合的に育まれていくものであるということも共通理解を図った。あそびの中で、10の姿は意識しすぎず、記録や事例検討会で振り返ってみよう。
- ③ 幼稚園と小学校の学び方の違いをふまえた上で、教師同士の対話、理解の共有が必要である。小学校と積極的に交流をもち、保育を知ってもらおう。まず一度、研修の機会をもとう。

(2) 保育実践と事例検討

本園では、子ども達が小学校へ行っても、存分に自己を発揮し、学ぶ力を育てるためには、安心して自分を出せる集団づくりと子ども達が主体的に人、モノ、コトにかかわる力が大切であると考え。幼児教育では、幼児期の学びである「あそび」が充実するための環境づくりが重要で、子ども達の主体的な活動としての「あそび」が充実したものになるために、保育者は、日々子どものあそびをとらえ、読み取り考えながら、環境構成をしてきている。

また、充実したあそびの中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」は、総合的に徐々に育まれるものである。とにかく「あそび」がいかに大切で、子どもにとって充実したものになるかを考え保育している。「あそび」と言っても、ただ自由に遊んでいる訳ではなく、こうなってほしいという長期の指導計画に基づいて環境構成している。それが年齢ごとにどのような姿なのか以下事例で述べていきたい。

事例1 【2歳児3月】「小麦粉粘土って、楽しいな」

安心した生活と保育者との信頼関係

《幼児の姿》

2月の保育参観でお家の人と小麦粉粘土あそびをした。素材の感触から楽しんでほしかったため、小麦粉の状態から作ってもらった。日頃より、新しいことへの抵抗感、感覚の過敏さがあったA児は、母が作るのをじっと見て、興味はあるが、なかなか触れられずにいた。保育参観後も、“やりたい”と子ども達の声があり、クラスで繰り返し楽しんでいった。すると、友達の姿を見て、A児も小麦粉粘土を触り始めた。A児はこねこねすることを楽しんでいる。他児は、ラーメン、パン、たこ焼き、うどん…それぞれ作りたいものを作り、お店屋さんようになってきた。子ども達のイメージはそれぞれ違うようだが、もっと楽しくなるように、小麦粉粘土に色を付けてみた。色を付けたことでさらに広がり、年長児も加わってきた。今度は、いろいろな色を混ぜてマーブリングのように楽しんでいた。

《考察》

- ・ 保育参観でお家の人と小麦粉粘土を作った経験。クラスで繰り返し遊び、友達が楽しんでいる姿を見てA児もやってみたい気持ちが出てきたようだ。友達がやっている安心感がA児の心を動かした。
- ・ 子ども達のやりたいイメージのままを受けとめて保育者が関わったことで、安心して遊ぶ姿が見られた。受けとめる保育者の存在の重要性を感じた。
- ・ 更に楽しくなるように色をつける環境設定をしたことで、あそびがどんどん変化して楽しんでいるのがわかる。何を楽しみ次のあそびを予測する、あそびの読み取りが大切である。



事例2 【3歳児5月】「の～せて！電車に乗って出発だ！」

友達と一緒にの楽しさ

《幼児の姿》

保育室で、段ボールを電車にして遊んでいた。今日は、保育室の「さくら組駅」を出発。保育者も一緒に電車に乗り、スロープ階段を線路に見立ててどんどん進んでいく。途中、2歳児が電車に乗りたそうに見ていると、「いいよ～」と乗せてくれたり、「今度は私が運転手」と運転手を交換したり、3歳児でも進級児は、やりとりをしながら楽しんでいる。その様子を、じっと見ていた新入児。保育者は、友達とのかかわりのきっかけになるように「乗せてって言うってみる？」と言うと、「うん」「の～せて」と言って乗せてもらう子もいれば、じっと見ている事で満足している子もいた。繰り返し遊び、電車ごっこは続いていった。



《考察》

- ・ この電車ごっこは、「みんなで乗ること」を楽しんでいる。みんなでいろいろな場所に行けること、「乗せて」と言われることもうれしい。
- ・ 友達と一緒にの楽しさ、かかわり、簡単なやりとりを経験させたいと願い援助したことで、かかわりのきっかけになっていた。
- ・ 保育者も電車に乗って遊びながら、一人ひとりの思いをくみとって、「乗せて」「混ぜて」などのかかわりの言葉ややりとりと一緒に楽しんでいくかかわりが大切である。
- ・ 保育者が無理強いすることなく、一人ひとりの電車ごっこの楽しみ方を尊重し、温かく見守りかかわることで、安心感が生まれている。

事例3 【4歳児5月】「もっと暗い、もっと怖い、おばけやしきにしよう！」

自分の思いを伝えながらあそび、友達とのつながりを感じる

《幼児の姿》

絵本「かいじゅうたちのいるところ」を見ていた子ども達が、自分達は「おばけやしきがしたい！」と遊びはじめた。はじめはテラスでやっていたが、保育者が子ども達にいろいろ聞いてみると、「もっと暗くしたい！」「じゃあ、ぱんだの部屋（空き部屋）でやったら？」などと、子ども達からいろいろな考えがでてきた。ぱんだの部屋へ行き、みんなで考え、テーブルに黒い袋をかぶせてみた。「これじゃあ、全然暗くないし、通れない…」今度は袋を広げてみたが、「これでもまだ通れないし、穴だらけ。」子どもたちはがっかりしていたが、暗くしたい思いが実現できるように、保育者は「一旦おろして、頑丈にしてみようか」と提案してみた。みんなでテープを貼ると頑丈になり、壁の対角線上に紐をつけひっかけることにした。「どんどん暗くなってきた！」と子ども達は大喜び。「おばけ描いて、ぶらさげよう」と書いてくる子、「もっと怖くするには、おばけになろう」とお面を作っかぶる子、どんどん楽しくなってきた。



《考察》

- ・このおばけやしきは、「創ること」を楽しんでいる。おばけやしき＝暗い。どうやったら暗くなるのかを追求している。暗くならなかった失敗経験があり、次につながっている。
- ・ほとんどが進級児のため、5月でもお互い自分の意見が安心して言い合える関係性ができていた。自分を安心して出せる集団作りが大切である。
- ・4歳児は、自分の考えや意見がどんどん出てくるものの、子ども達のあそびのイメージを引き出し、言葉にして整理したり、どうすればそのイメージに近づくのかヒントを与えたり、提案したり、保育者のかかわりは大切であると考えます。
- ・保育者が子どもと一緒に遊び、遊び仲間になっているからこそ、アドバイスや提案があっても、子ども主体のあそびが続いている。
- ・子ども達の意見の出し合いの中で、ぶつかり合いもあるが、その過程もこの時期の育ちに重要である。ぶつかり合う経験、うまくいかない経験も大切にしていきたい。

事例4 【5歳児6月】「星いっぱいプラネタリウムだね」

共通のイメージをもって、自分達であそびを進める楽しさ

《幼児の姿》

6月、年長組の園外保育でプラネタリウムに行った。翌日、「プラネタリウムにまた行きたいな」という子どものつぶやきから、実際に作ってみることになった。「お家で星の作り方を覚えてきたよ」というR児が、友達に星の作り方を教え、星作りが始まった。星を作る係と星を貼る係に分かれてどんどんあそびは進んでいく。黒いビニールの夜空に星がいっぱいになった。絵本コーナーから、ふかふかソファを運び、みんなで座って見上げると、「いい感じだね～」と嬉しそうににっこり。

今度は、見てきた天の川を再現しようと、色画用紙に、絵の具と網とブラシで細かい星空にしたり、ストローで絵の具を吹いてみたり、保育者の提案からもあそびは広がり、壁にも星空が広がった。家から星の作り方を覚えてきたR児とL児、それぞれ違う作り方だったので、クラス活動で取り上げみんなに教えてもらうことにした。それをきっかけに、子ども同士で教え合う姿がみられた。園内の廊下の角に作られたプラネタリウムは、他学年の子ども達も立ち寄って、癒しの場となっている。



《考察》

- ・園外保育でプラネタリウムに行き、みんなで星空を見て感動し、心を動かされた共通の経験があそびへとつながった。同じ経験をしたことで、みんなのイメージが共有されやすく、自分達であそびを進めることを楽しむことができた。
- ・星作りを面白がっていた子もいたため、折り紙だけでなく、絵の具やその他の道具での星空の作り方も保育者が提案すると、更にあそびが広がっていった。
- ・プラネタリウムづくりは、自ら選んだあそびの時間で始まったが、クラス活動にも取り入れると、子ども同士で教え合う経験につながり、その後も子ども同士教え合ったり意見を出し合ったりする姿が見られた。幼児の主体的な姿と保育者の意図、自ら選んだあそびの時間とクラス活動の時間、どちらも大切である。

事例からの考察

| | |
|------------|---|
| 2歳児 3歳児 | 保育者との安心できる関係と園生活の安全な環境の中で自己発揮する 友達とかかわりをもちはじめ、一緒に遊ぶことが楽しくなってくる |
| 4歳児 | 友達と一緒に遊ぶ面白さを感じる時期 思いがうまく伝わらずトラブルも増えるが、友達とつながりたい思いが強くなる |
| 5歳児 | 思いやイメージを言葉で伝えあい、自分達であそびを進めることを楽しむ 共通のめあてをもち、協力してやり遂げる喜びを味わう |

年齢ごとに大切にしたいこと、発達の道筋をとらえ、総合的に経験を積み重ねていく事が大切である。架け橋期である5歳児の姿は、2歳児からの積み重ねの姿であることがわかった。幼児期の学びであるあそびを通して主体的に行動できる力と、人、モノ、コトに主体的にかかわる力を育むことが大切であると改めて感じた。幼児教育の中で、これらのことを大切に保育していく事で、小学校へ行ってからも、学び方は違っても、子どもが主体的に学ぶ人間として連続して教育を受けることに繋がると考える。

(3) 小学校との連携

①基盤づくり

- ・連携窓口の明確化
- ・自園、自校の先生への意識啓発と参画

【現状】

- ・小学校から案内があり、進学する子ども達の引継ぎの場（2月）と、進学した子ども達の授業参観に伺う場（6月）などの幼保小連絡会があり、交流を持っている。就学児の引継ぎが主となっている。子ども同士の交流は、コロナ前は、小学校見学などがあったが、現在は全くない。

【小学校へのアプローチ・連携を図るまで】

- ・連携の依頼時期が、年度末、何度初めのお互いに慌ただしい時期だったため、なかなか進まず課題も多かった。
- ・山形市の幼稚園はほとんどが私立、小学校は公立である。各園からのアプローチよりも、教育委員会、教育事務所、アドバイザーなど、行政が入ることで、スムーズになると思う。他県のような幼児教育センターを設けてほしいと感じた。

②検討・開発

- ・幼保小の合同会議の設置
- ・相互の教育の内容や方法に関する理解の共有

連携Ⅰ 金井幼稚園 公開保育 6月26日(水) 9:30～

参観者6名(小学校2名、村山教育事務所2名、東北文教大学附属幼稚園2名)

《あそびの様子》

室内では様々な素材や材料を使って、遊びに必要なものを作り、製作あそびやごっこあそびが広がっていた。戸外では、砂場で樋やパイプを使って山作り、トンネル作りに夢中になっていた。草花で色水あそびや、せっけんで泡あそびなどを楽しんでいた。



《グループ討議》

- ・ 3グループに分かれ話し合う。
- ・ 視点 ①あそびの中で育っているものは？(10の姿を視点として)
- ②どのような連携の方法があるか？



* 小学校の先生方の感想

- ・ 子ども達が、遊びを通して、たくさんの力をつけていることに感動。小学校へ就学するうえでのギャップを感じたが、幼児教育のねらい、小学校教育のねらいがあり、相反するものではない。何より今日たくさんの力をつけている子ども達の姿を見て、いかにスムーズにつなげていくかが課題だと思った。
- ・ 保育を見る機会がなく、とても新鮮だった。子ども達が、自分達であそびを選び、その中で、人や物、環境とかかわりながら活動する姿が生き生きしていた。自然に活動や生活を進められていた。小学校生活とのギャップが大きいかもしれない。改めて連携の必要性を感じた。

* 公開保育を終えての考察

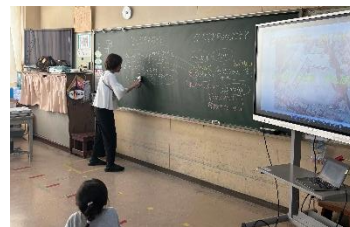
- ・ 公開保育、その後の語り合いこそが、連携の大きな一歩になった。
- ・ 10の姿の視点であそびを見ていく時、幼稚園側は、遊んでいる子どもの姿からいくつかの10の姿を見つけているが、小学校の先生方は、10の姿の一つ一つを窓口にして、あそびをあてはめながら見ていることに気づいた。このように、あそびの見方が違っていたが、語り合うことで、あそびは学びだということを共有することができた。
- ・ 小学校の先生方が、保育参観での子どもの姿に感動し、協議でも真剣に意見を出してくださいました。幼稚園の先生も、あそびのねらいや保育を熱く語っていた。教師同士が交流を持つこと、語り合うことから、架け橋プログラムは始まるのだ。教育方法は違っても子どもの姿から語り合うことはできる。子どもの姿を真ん中に考えていくことが重要である。今後も継続していきたい。

連携2 金井小学校1年生授業参観 10月31日(木) 13:30～

参観者9名：金井幼稚園（園長・教頭・主幹教諭・教諭6名）

《授業の様子》

- 1-1 国語（漢字・カタカナ）
- 1-2 国語（漢字・音読）
- 1-3 学活（創立記念日を祝おう）
- 1-4 算数（かたち）



《授業後の協議》

3グループに分かれて、カフェ方式で話し合う。



金井小学校教員6名
（校長・教務主任・1年生担任4名）
本園教員9名

*** 本園職員の感想**

- ・さまざまな授業の中に、幼児教育の要素が取り入れられ工夫されていると感じた。
- ・子どもの発想やつぶやきが大事にされている。子どもの主体的な姿があった。
- ・教師の雰囲気や口調、言葉かけは大切だと感じた。教師の共感的な声掛けがあった。教師のテンションを少し上げてもいいのではないかと感じた。授業の雰囲気づくりは大切。
- ・授業の中に、ドキドキワクワクがあり、子どもの興味関心につながっていた。
- ・電子黒板等、ICT化が取り入れられてわかりやすい。空中書き順は子どもにとって、難しいのではないかと感じた。
- ・クラスの人数がもっと少ないと自分をもっと出せるのではないかと感じた。30人を1人の教師では、幼児教育との段差が大きいと感じる。

*** 授業参観を終えての考察**

- ・自分の思い、意見を言葉で伝えることは大切であると改めて感じた。人と違う意見でも自信をもって言える子に育てていきたい。
- ・相手に伝わるように話す、友達や先生の話の間を聞き取る姿勢を育てていきたい。対話する語り合う保育をしていきたい。
- ・気づきの目が大切。驚き、発見、疑問、探究が生まれるドキドキワクワクなあそびを幼児教育で今後も大切にしていきたい。
- ・子ども同士の交流（学校見学・生活科交流）にも取り組んでいきたい。
- ・教師同士で定期的に交流することでお互いの理解に繋がった。小学校の先生と語り合い、交流ができてよかった。近いので、気軽に行き来して、語り合いができる、持続可能な教師同士の交流を続けていきたい。

3. まとめと今後の方向性

・質の高い保育の充実

- ・安心して自分を発揮できる保育者との信頼関係、クラス集団作りが大切である。
- ・幼児主体の保育、あそびや生活の中で、子どもの主体性を育てていくことが、小学校での学びにつながっていく。
- ・主体的に遊ぶ子ども達を目指すためには、子ども同士のかかわりと子どもと共に遊ぶ保育者のかかわりがとても大切である。
- ・幼児期の学びである「あそび」が子どもの育ちに重要であることを再確認した。そのための環境づくり、保育者のあそびと子どもを見取る力が大切である。

・小学校の学びを見通して

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を保育者がとらえていくことが大切である。小学校へどう繋がっていくのかを学んだり、話し合ったりすることで、深まってきた。
- ・今後も園内研修を続け、保育、あそびが更に充実するようにしたい。

・子どもの姿をまんなかにした語り合い

- ・連携の第1歩は語り合い。教育、保育を熱く語り合い、幼稚園と小学校の教師同士の距離、段差を縮めていく。保育を見てもらい、知ってもらうことが大切である。
- ・幼児教育の重要性を自分達は理解しているが、それを今後、外へと発信し理解してもらう事がまだまだ必要である。今後、保護者や小学校、地域へと発信し伝えていきたい。どうしたら、伝わるか、理解を得られるか、工夫していきたい。

・幼保小とも、他人事ではない、自分事の連携

- ・幼保小一体となり、架け橋プログラムに取り組んでいく必要がある。まずは管理職が窓口となりながら、小学校との関係性を築いていきたい。
- ・連携には継続と積み上げが大切であると思う。合同の研究として取り組んだり、互いに教育課程、年間計画などに入れたり、連携の工夫をしていきたい。
- ・気軽に保育、授業を見せ合う関係、積極的に教師同士が語り合う場や子ども同士がかかわる場を設けていきたい。

主体的なあそびは主体的な学びへとつながる！

～学びの連続性を考え、これからも連携と研究を続けていきたい～

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人花岡学園 楯岡幼稚園

教諭 大石 梨乃／藤原 彩香

研究主題 一人ひとりを尊重した質の高い教育・保育
～園及び家庭教育の在り方について～

主題の設定理由 (ねらい) 昨今の子どもたちを取り巻く生活環境の変化にあたり、園生活の工夫や行事・カリキュラムの見直しを試行錯誤しながらも行ってきた。園においても家庭においても様々な活動が制限されたことによる「子どもたちの経験不足」も心配される中、このような状況が、子どもたちだけでなく、「保護者」「教師／保育者」にもどのような影響を及ぼしてきたかを検証し、「子どもたちの今」「これからの育ち」につながる教育・保育の本質を見直し、「こどもがまんなか」として園と保護者が適切な環境で「共に」子どもたちの成長や育ちを支えていくことが重要であると考えた。

1. 研究の方法・研究の手がかり・研究の内容

今現在の園の「教育課程」「教育目標」「教育方針」等を再検証するとともに、コロナ禍という未曾有中での子育てに「保護者」自身がどのような思い・考え・どのような気持ちで子育てをし、また「幼稚園」「子どもの育ち」に何を求めて生活を送っているかを知り・検証し、「家庭」と「幼稚園」が共に「こどもがまんなか」を考えた「教育／保育／支援」の在り方を模索する。

保護者アンケートを実施し、「今現在のニーズを考え知る」。そのニーズに合った内容のカリキュラムの検討や行事の在り方、また、「園が育てたい子ども像」と「保護者が求めている（感じている）子ども像」の「ズレ」を読み解き、共に子どもの成長や育ちを支えていくための発信を模索する。

◆研究方法

- ◎自園の「教育課程」「教育目標」「教育方針」などを今一度読み解き、「自園とは」を考える。また教師間が思うコロナ禍前後の実態の書き出しを行う。
- ◎各家庭からのアンケートをもとに、現在の保護者の考えや困り感を知る。
- ◎それをもとに、現在の「幼稚園の教育課程／教育方針」に「ズレ」があるか検証。
- ◎今後、子どもの育ちについて「家庭」との連携を図るために「どのように」「どのような」工夫が最適か（支援をするとは？）（共有するとは？）（共にとは？）（今現在の最適な教育・保育とは？）。
- ◎これからの「子どもの育ち」「園や家庭が育てたい子どもの姿」を考える。

◆研究スケジュール

検証1 自園の教育カリキュラムや自園らしさを教師間で話し合う。また教師が思うコロナ禍の実態の書き出し（子どもたちの変化、環境の変化、保護者の変化、教師の変化など）

検証2 保護者に聞いてみたいアンケート内容の話し合い

検証3 保護者アンケート実施、集計をもとに話し合い、読み解く

検証4 今後の園の課題を検討

検証5 実践とまとめ

検証1

◇自園の教育カリキュラムなどから自園らしさを考える◇

◇教師が思うコロナ禍の実態の書き出し◇

保護者にアンケートで考えを聞く前に、まずは教師自身が思うコロナ禍前後を見ての環境の変化（子ども・保護者・自分自身）を話し合うことにした。教師の経験年数は多少バラつきがあるものの、各々が園生活の中で感じている子ども含め保護者、また、生活全般においての変化や気付きについて書き出してみた。

〈子どもたちに関して〉

- ・経験不足（基本的生活習慣や身体的な面、コミュニケーションにおいても）
- ・身体面・精神面の幼さ
- ・ネットメディアの過多
- ・話が伝わらない／指示が通らない→時代？
- ・感染予防が定着した
- ・子どもの本質的な行動はあまり変わらないような…

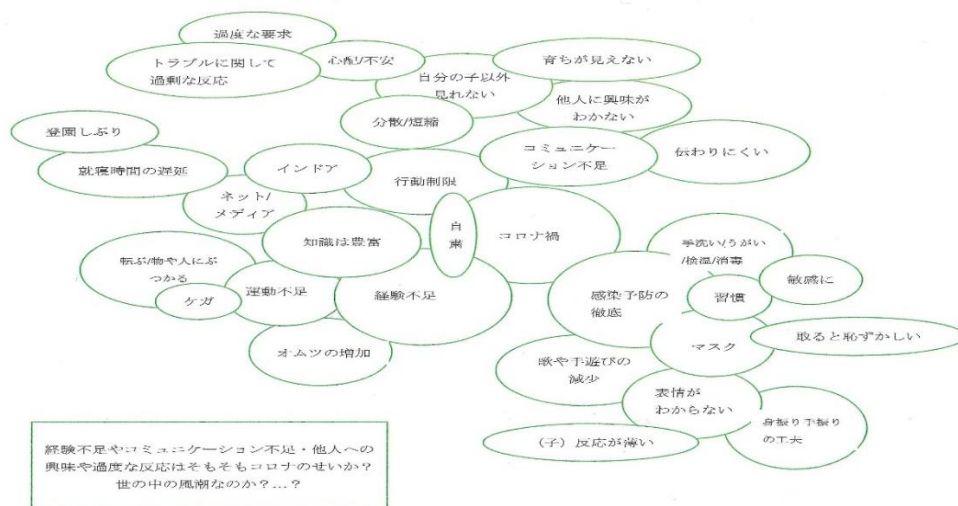
〈保護者に関して〉

- ・コミュニケーション不足（他人への興味関心の欠乏、行事に対する興味関心の薄れ）
- ・（子どものことだけでなく様々な情報での）過度な反応／要求
- ・ネット活用の頻度の増加
- ・習い事をさせたがる
- ・感染予防の意識が強くなった

〈園生活（環境や行事）について〉

- ・「個」が見やすくなった（今までよりさらに主体的に取り組みやすい環境へ）
- ・マスク生活で「表情を意識」することができるようになった
- ・行事の見直しができるようになった（1つの行事に集中しやすくなった）
- ・行事も工夫（分散や縮小）することで、今までと変わらない経験はさせてあげられたかな…
- ・行事に工夫が生まれ、職員同士が話し合い、模索する姿があり、チームワークはレベルアップした
- ・入り口での消毒等「衛生面」を徹底する環境が身に付いた

教師間で子どもたちの変化／親の変化（気が付いたこと・感じていること）／園生活について話し合ったことのマインドマップを作成してみる



○自分たちが感じていることを書き出し、それをもとに話し合いをしてみた結果○

- 1. 果たして、経験不足やコミュニケーション不足、他人への興味関心のなさ、過度な反応・要求などは、コロナ禍によるものだけなのだろうか？それとも世の中の風潮なのだろうか？
- 2. 園生活や行事を工夫・模索しながら進めてきたが、果たして、保護者は何を求めて参加しているのだろうか？教師の考えは伝わっているのだろうか？園と保護者間で「子ども」に対する考え方に「ズレ」はあるのだろうか？

等の意見が上がった。普段行っている園評価アンケートではわからない保護者の「子ども」「幼稚園」に対する本音、「幼児教育」に対する思いを聞いてみたいと思った。

検証 2

◇保護者に聞いてみたいアンケート内容の話し合い◇

教師の話し合いのもと、保護者の考えを知るためのアンケートを作成することにする
実態の調査〈保護者アンケート〉（一部抜粋）

| | | |
|--|---|---|
| <p>【子どもに関して】</p> <p>●コロナ禍発生によって子どもが園生活に慣れずいると感じたことはありますか？</p> <p>また、どんな理由に感じましたか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●子どもが園生活に慣れずいると感じた理由を具体的に教えてください。感じた理由がどんな理由ですか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> | <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> | <p>【その他】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> <p>●園生活で感じたこと、気づき、学び、成長はありますか？</p> <p>【回答欄】</p> |
|--|---|---|

○具体的な内容

- ・子育てに不安というものを感じているのか？（育児に対して孤独感はあるか、それはコロナ禍からのものなのか？）
- ・保護者はどう子どもを見ているか？（どう育ててほしいか、子どもの将来に不安は感じているか？）

- ・自分や個性を大切にできるように、他の子の個性も尊重し、輝ける姿が見たい
- ・適応力、判断力、決断力が備わった人間になってほしい
- ・右ならえではなく、自らが発信できるような、自尊心を持った大人になり、自分のフィールドで生きてほしい
- ・AI時代に入り、今後の生活が大きく変化すると思われるが、柔軟に対応できる子になってほしい
- ・自分の頭で考え、自分のことは自分でしっかりでき、自分の行動に責任がとれる子、かつコミュニケーションをとれる子になってほしい

〈幼稚園教育に期待すること〉

- ・子どもが主体的であり、ジェンダーフリーも含め個性・個人を大切にした教育
- ・少子化はより進んでいくため、一律の教育よりもその子その子で個別に合う教育
- ・制限のない経験や体験を通して、選択力や行動力、考える力、解決力を伸ばす、身に付ける
- ・家庭では経験できない戸外遊びや園外保育を通して自然を身近に感じ、なおかつ運動量の増加を図る
- ・自分の五感で体験させてほしい
- ・ICT化やグローバル化、英語教育など令和の時代に合った教育（異文化交流）
- ・楽しいはもちろん、褒める叱るをしっかりとした手厚いサポートのある教育
- ・コロナ禍前の教育が全て正しかったのかはわからないが、互いの良し悪しを考え、より進化した教育へ
- ・家庭と園の相互理解を図り、子どもたちの未来のために、共に進んでいくような教育のあり方
- ・集団生活において、協調性を養うことも大事だが、子どもがやりたいこと、長所となることは存分にやらせてあげてほしい
- ・職員の一人ひとりの質の向上
- ・困ったときに解決法を自分で考えられる声掛けをしていただく等の、今の日々の活動の中での“教育”で十二分

などの各項目共に、様々な意見をたくさんいただいた。

保護者アンケートを紐解き見てみると、私たち教師が感じている「子どもの変化や環境の変化」とさほど「ズレ」は感じられなかった。

子育てに対する「孤独感」「不安感」といったものも、私たちが思い描くほど保護者は思っておらず、コロナ禍に関してはむしろ人間関係の見直し等として捉えている人も多かった。

これからの子どもたちに「どう育ててほしいか」やこれからの「幼児教育に期待すること」に関しては、現代～未来に向けて世の中が劇的に変化することに対しての不安や心配が多く見られ、「ネット」「ジェンダーフリー」「個」「少子化」「ICT化」等の現代の世相を感じる事ができた。（いかにこれからのVUCA（ブーカ）の時代に順応できるかが保護者の中では最大のポイントのように感じた）

検証4

◇アンケートをもとに職員間で自園の教育課程と教育方針の検討会◇

自園の教育目標『健康で素直な思いやりのある子どもに』

- ・自分の命、人の命の尊さを感じられる心
- ・思いやりの気持ちを大切にすること
- ・祖先を敬い感謝する心
- ・美しいことに感謝する心

から日々の園生活の中で大切にしていることとして、キーワードは4つ

- ☆感謝するという心
- ☆チャレンジ！！
- ☆あこがれ
- ☆マナーとルール

○保護者アンケートをもとに、今後の園の課題を検討○

～アンケートをもとに教師間で話し合いを行った結果～

- ・普段聞くことができない意見を豊富に聞くことができ、保護者の思いを知れてよかった
- ・幼稚園の教育課程や教育方針と保護者と保育者の思いや考えに大きな「ズレ」はなかったように思うとの意見があがった。

幼稚園が大切に考える「感謝」「チャレンジ」「マナーやルール」「素直」に加え、「個」VUCA時代を生き抜くため、またAIを上手に活用するための能力を育むためには、「互いの存在を認め合いながら、自ら考え挑戦し、変化にとんだ時代を生き抜くための力」を身に付けてほしいと願っている保護者が多かった。このことから、今一度「子どもが主体」の面から自園らしい保育スタイルを見直してみることにする。

○自園らしい子どもが主体的を考える○

- ・遊びの中で学びの芽は沢山見受けられるが、それを主体的と教師が語れる目をどのくらい持っているのだろうか。
- ・毎日の生活の中で埋もれてしまっている子ども主体の学びをうまく拾えていないのではないだろうか？
- ・子どもたちの生活の中で、主体的・自主的な場面はたくさん見受けられるが、それを育ちとして保護者に伝えられていない現状がある。そのため、何もしない日々があるような捉え方の保護者ももしかしたらいるのかもしれない。

など、教師自身の力量点についての意見が多くあがった。

○園での生活や遊びの様子をどう発信して保護者をどう巻き込んでいくかを考える○

発信力

それには教師の今まで以上の観察力が必要で、まずは今子どもたちが行っていることをよく観察し、それを教師がどう語れるか。

遊びの内容だけではなく、「育ち」や「発達」についても保護者に伝えられると、わかりやすいのではないだろうかと考える。

教師間での話し合いの後日に7月の参観日、また9月には運動会を控えていたため、そこでの発信のやり方を第一ステップに行ってみた。

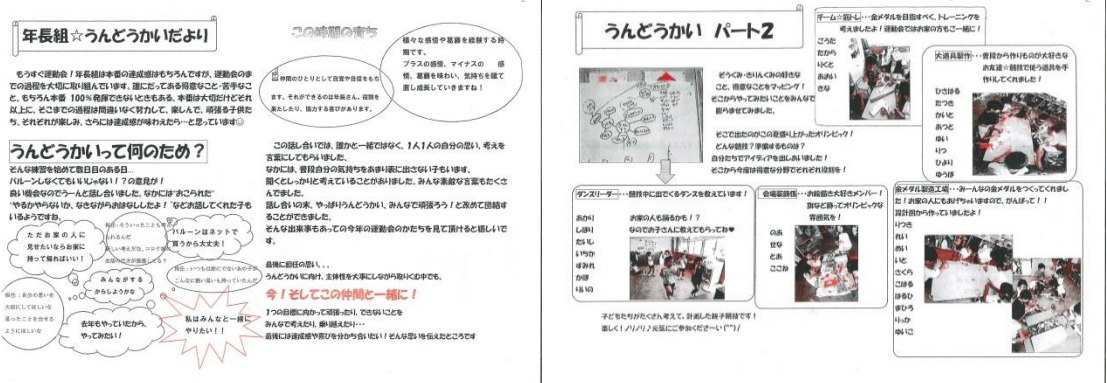
年次の発達を捉え、保護者に知らせていき、成長を共有してみる。(遊びや発達など個人差があることを伝えることも必要)

↑【改善後】 文章だけではなく、写真を入れたり、4歳児の発達について添えてみました。チャレンジしていることも多く交え発信してみました。年次に合わせた姿を伝えることで、何ができないなどという過度な心配をせず、これでもいいんだという安心感を持たせることができる。

事例2 運動会



運動会前にはこれまでの取り組みの過程と発達を踏まえた手紙を各年次発信した。
(年少組・年中組)



年長組は取り組みや過程にプラスし、教師と子どもたちの話し合いもあったのでそのことも伝えながら手紙にまとめてみた。

- ・発達や育ちを手紙に組み込んでみたものの、文章のみの少し読みにくいものとなってしまった。写真等も入れてわかりやすくとは思っているのだが、文章が長いと忙しい保護者には読みにくいのではないかとという問いも出た。
- ・そこで、伝えられているかということを知るために、再びアンケートをして実際の声を集めてみることにする。

◇発信について保護者にアンケートで意見をもらう◇

- ・アンケートの結果を見ると、内容的にわかりやすいが多く見られ、また手紙の頻度も丁度いいとの意見が多かった。
- ・写真の印刷が赤黒2色または白黒での配布なので、見にくい等やICT化を検討したほうが教師の負担も減るのでは等の意見も多くあった。
- ・多くの保護者が各クラスからの手書きの発信を「温かい」「楽しみ」「嬉しい」と感じてくれていたことがわかり、教師の喜びとなるアンケート結果となった。

2. 今後の課題

「こどもがまんなか」で、保護者や教師とつながる教育を目指していくにあたり、子どもたちの成長やその過程をいかに共有し、互いに同じ方向を向いて育ちを喜び合っていくかが大切である。今回、発信の仕方を変え、より詳しく育ちを伝える工夫をしてみたところ、成長や子どもたちの様子は表面上は伝わっているようであったが、教師の思いとしてさらに浸透するまでにはもう少し時間をかけていく必要がある。

自園としては、園・学年・クラスとしての発信だけでなく、一人ひとりへの発信の仕方も課題である。また、見やすさ・伝え方の改善や工夫も向上できるよう、今後も研修・研究を進めていきたい。さらには、教師の発信により、保護者と対話的なやり取りが生まれ、個々のニーズや保護者の困り感にも寄り添っていけるようになれば、さらにお互いの理解が進むことになるのではないだろうか。そのためには、発信の方法をおたよりのみならず、どんな形で子どもたちの成長や育ちを具体的に示し、保護者と対話的なものにしていくのかを今後も模索していきたい。

3. まとめ

子どもたちの成長を発表する場として行っている行事もコロナ禍の影響により、縮小や制限が課せられてきた。当たり前であった日常が変わってしまった中、自園も様々な対応・対策・工夫をしてきたが、ここ最近は徐々にコロナ禍前の開催に戻つつある。“成長の過程を見てほしい”という園の思いから、昨年度の発表会においては換気・消毒等をしながらも、分散や人数制限をなくし、今まで開催していた形に戻した。保護者からは「分散のほうがよかった」「他学年を見なくてもよい」などという意見をいただき、園の思い（子どもたちの成長を見届けてほしい、他学年の成長を感じてほしい…など）は伝わっていなかったのかと感じる場面があった。だが、保護者アンケートをもとに、教師間で話し合いを行ってみると、保護者の思いと園の思いとでは、大きな「ズレ」はなく、“子どもたちの育ち”ということを共に共有できているようで安堵したところである。

最初の話し合いの際、教師の認識としては伝え方が一方通行であるのではないかとの意見も多かった。そのため、日々の出来事ばかりではなく、年齢に合った発達や成長、行事の意味や在り方、取り組み方など、より詳しく発信するように努めてみた。発信し、そのことについて保護者の方と対話し合えたら、充実した保育につながるのではないだろうか。保護者と共に子どもについて語り合える園・教師になりたいと思う。

今回の研究で、発信の仕方ということに重点を置き取り組んだが、園からの発信を通して、保護者の「こどもがまんなか」を、考えていくきっかけになってきている。

私自身も子育てをしてみて、親や周りに相談もするが、ネットに頼ることも少なくはない。ネット社会が急速に加速している中、世の中の情報はネットからというのが多い時代になってきた。ネットは便利であるが、どれが正解なのかわからない部分もたくさんあり、不安も大きい。子どもたちは幼稚園という初めての社会に入り、ネットでは教えてくれない大切なことを遊びを通して学んでいく。幼児教育というものは、やはり大切な意味を持ち、日々進化していくべきものだと教師一人ひとりが思う必要があると考える。

世の中の情報に惑わされず、「こどもがまんなか」とした家庭の橋渡しになれば、共に未来へ進めるのではないだろうか。これからも保護者の思いに寄り添い、「こどもがまんなか」に理解を深めていけるよう、努めていきたい。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人松原学園

幼保連携型認定こども園ひばりが丘幼稚園

保育教諭 鈴木 友子／佐藤 真澄

研究主題 「園内インクルーシブ保育」を目指して

～取り組みを通しての成果と課題について～

1. 主題設定理由（ねらい）

本園は、幼保連携型の認定こども園として、0歳児から小学校就学前までの子どもが在籍しているが、まずは乳児組・幼児組共通して、令和6年度の研究テーマを「一人ひとりの育ちに寄り添い、保育者との安定したかかわりの中で成長を育む」と設定して、各々日常保育の中で課題となるところを意識しながら保育に取り組んできた。

そこから更に乳児組、幼児組の重点事項を掲げ、それを達成するための具体的な方策を挙げて実践してきたが、勿論その中には支援を必要とする子どもや、気になる子どもも含んでの捉え方としている。専門的なかかわりや支援の方法、必要な環境構成の大切さも感じるところであるが、まずは、集団生活の中で、子ども自身、多様なあり方を相互に認め合える環境こそが、一人ひとりの育ちを促すことが出来ることをこれまでの実績として感じている。お互いを受け入れ、認め合い尊重されることが良い効果をあげている実感を得て、園内インクルーシブ保育を目指し子どもたちの育ちを支援していきたいと考えている。

2. 研究方法・内容

○令和6年度園内研究テーマの理解

乳児組の重点事項

「個々の発達段階を考慮した保育を通し、アタッチメント(愛着形成)を重視し、安定した生活を送る」

《達成させるためのポイント》

- ・アタッチメントを大切にされた保育の展開に心掛ける
- ・発達段階、個性、育ちの過程等、総体的に捉えてかかわる
- ・子どもの欲求を大切にしてい

幼児組の重点事項

「安心できる・遊び込める環境の中で、経験を深めながら探究心を育む」

《達成させるためのポイント》

- ・遊び込める環境の設定と工夫

- ・安全対策を講じながら教材・教具・色々な素材（廃材）の設定
 - ・子どもの声に耳を傾け、必要に応じて遊びを繰り広げられるような工夫
 - ・ユニバーサルデザインを取り入れた、どの子にも分かりやすい環境の設定
 - ・「何故だろう」「不思議だな」という思いから更に探究できるような工夫
 - ・子どもの「やってみたい」という思いを尊重した保育の展開
- 支援を必要とする子、気になる子についての共通理解と情報の共有化を図る
- ・これまでの記録から抜粋した内容を基にその子の理解を深めていく
 - ・その子に対する援助の在り方と、保護者支援について考えるきっかけとする
 - ・行事への参加における事例をあげ、その子にとって相応しい支援の方法について、話し合い実践を重ねていく
 - ・療育における支援について
- 本園が目指すインクルーシブ保育の方向性と支援の方法・手立てについて深めていく
- 成果と課題について

3. 情報の共有化

- ① 各専門機関を利用しながら、当園に在籍している子ども、並びに気になる子ども（グレーゾーン児）の姿を、これまでの記録から抜粋して職員間で共有し理解を深める。

<施設併用児 事例Ⅰ>

| | |
|---|--------------|
| A. 年長 5 歳児 K 男の事例 | |
| 生年月日 平成 31 年 2 月 12 日 | 2 歳の妹と 2 人兄弟 |
| 《診断名》 ADHD の疑い、愛着障がいの疑い | |
| 令和 6 年 6 月より年長組へ転園してくる これまでの経過 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・令和 2 年 1 月～山形市のこども園に入園。 ・山形市の 4 か月健診、9 か月健診、1 歳 6 か月健診では特に指摘事項なし。 ・令和 3 年 6 月～11 月、妹の手術の為、こども園を休園。 ・令和 4 年 9 月に山形市保育所等発達相談事業（巡回相談）を受け、10 月に外来相談を受ける。 ・令和 4 年 9 月末より、本市での生活となる。 | |

【個別支援計画】

| 前期目標 (6～10 月迄) | ・園生活のリズムに慣れる ・集団生活の過ごし方や約束事等を知りながら、友達と楽しく生活する |
|---|--|
| 具体的な目標 | 支援内容・留意点等 |
| ○生活（食事・排泄・午睡・身支度） ・身の回りの事を自ら行う。 ・食具の正しい持ち方を身につける。 | ・自分でできることの喜びが、自信へと繋がるよう励まし、援助する。 ・こまめな声掛けを行う。 |
| ○保育者とのかかわり ・安心してかかわる中で、困った場面では言葉で支援を求められるようになる。 | ・コミュニケーションを多くとりながら安心して過ごせるようかかわっていく。 |
| ○言葉 ・友達や保育者とのコミュニケーションの中で、言葉遣いや善悪を学ぶ。 | ・その都度声掛けをしながらかかわり方や言葉遣いを伝えていく。 |
| ○遊び（友だちとのかかわり） ・積極的に遊びに参加し、刺激を受ける。 | ・友達とのかかわりの中で、多くの刺激や学びが得られるよう見守りながら、必要に応じて援助を行う。 |
| ○環境構成 ・感情の起伏が激しい為、安定した気持ちで過ごせるよう、クラスの友達の力も借りな | ・気持ちの切り替えの援助をしつつ、様々な活動に興味をもって友達と一緒に活動できるよう寄り添う。 |

| | |
|--|------------------------------------|
| がら環境を整えていく。 | |
| ○家庭・関係機関との連携 ・こまめに園生活での様子を知らせ、本児の頑張りを共に支えていけるようにする。 | ・連絡帳や送迎時に、園での様子を伝えたり、家庭での様子を伺っていく。 |

【友達とのかかわりを通して】

| 子どもの姿 | 保育者の願い(かかわり)・支援 | 保護者への支援 |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 登園時の身支度や着替えの意欲があまり感じられなかった。友達の様子を観察していたところ、遊びに誘われ楽しさを味わうことができる、スムーズに身支度をし、遊びに移ることができるようになった。 転園当初より、本児をよく面倒見てくれるS男の存在があり、園生活の仕方等について、手を繋いで説明してくれたが、本児も嫌がらずにS男と一緒に過ごす時間が多かった。 園生活にも慣れてくると、友達に積極的に声を掛けて遊びに参加する一方、思い通りにならない事があると大声を出したり、泣いたりして訴える。 空腹時気持ちが不安定になり、些細な事で怒り、大声で泣き、欲求が満たされるまで気持ちの切り替えが困難になる。昼食の支度を済ませて待つことはできる。 | <ul style="list-style-type: none"> 身の回りのことをこなすことに対して苦手意識がある様子であったが、自分でできる喜びが得られるよう声掛けや手助けを行う。 集団での遊びのルールや、友達とのかかわりを知りながら過ごせるよう、その都度寄り添って声掛けを行う。  <ul style="list-style-type: none"> 癩癩、地団駄を踏む等々の本来の姿が見られるようになった。個別に声掛けの配慮をする事で、他児と一緒に行動はできるが、寄り添いながら援助するように努めた。 昼食の支度を自分で行き、友達と同じタイミングで食べ始めることができるよう、寄り添い声掛けや援助を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> 発達相談事業所より受理された連絡状等々はその都度保護者から直接手渡されるため、その際は園の状況等伝えるようにし、転園当初は特に安心感をもってもらえるよう心掛けた。また、それらの書類は保護者にも同じものが手元にいつている為、情報の共有はしやすかった。 癩癩、地団駄を踏む等々の姿が見られた際、園での対処法を事前にお知らせしたり、逆に家庭でのかかわり方なども、教えてもらい連携をしながら進める。  |

《考察》

- ・本児の行動を探ると、保育者の気を引こうとしたり、反応を試すような時もあるので、他児と同様にけじめをつけて接するように共通理解を図っている。
- ・本児に困り感があり戸惑っているときは、その理由を見極めて対応していく事で安定を図れるのではないかとと思われる。

<施設併用児 事例2>

| | |
|---------------------------------------|-----------|
| B. 年中 4歳児 S男の事例 | |
| 生年月日 令和1年5月28日 | 2歳の妹と2人兄妹 |
| 《診断名》 | |
| ・自閉症スペクトラム、軽度知的発達症、言語発達遅滞、精神遅滞の傾向 | |
| 令和5年4月1日付けにて年少組へ転園してくる。 | |
| 令和5年6月 療育センターにて上記の疑いがあるとの診断を受ける。 | |
| 令和5年10月 1週間のうち3日の保育利用に変更する。 | |
| 令和5年11月 言葉の教室に通い始める。 | |
| 令和6年11月 これまで月1回行ってきた支援センターの訪問支援を終了する。 | |

【個別支援計画】

| | |
|---|--|
| <p>前期目標 (4～10月迄)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・進級したクラスの雰囲気慣れ、友達と一緒に活動する。 ・日常で必要な言葉を覚え、表現しようとする。 |
| <p>具体的な目標</p> | <p>支援内容・留意点等</p> |
| <p>○生活（食事・排泄・午睡・身支度）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣の中で自分で出来ることを増やしていく。 | <ul style="list-style-type: none"> ・本人ができる部分は見守り、必要に応じて援助しながら、自分でできる事を増やしていくようにする。 |
| <p>○保育者とのかかわり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安心して関わったり、困った時には自ら支援を求められるようになる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・スキンシップをとりながら、本人が安心して活動できるよう援助していく。 |
| <p>○言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活に必要な言葉を覚えて使ってみる | <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中で、必要な単語を繰り返し伝えていくことで、本人が覚えて使えるよう援助していく。 |
| <p>○遊び（友だちとのかかわり）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達の遊びに参加してみようとするようになる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・友達の遊びに保育者と一緒に参加する事で、友達に興味を持てるようにしていく。 |
| <p>○環境構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者だけでなく、友達の力も借りながら、本人が安心して生活できる環境を整えていく。 | <ul style="list-style-type: none"> ・積極的に友達の輪に参加する機会を設けながら、みんなで助け合えるような雰囲気作りを行っていく。 |
| <p>○家庭・関係機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・こまめに連携をとり、家族の心配事や不安感を取り除きながら、本児の成長を共に喜び合えるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳や電話、時に面接を行いながら、家庭での様子と、園での様子を照合せ本人の成長につなげていくようにする。 |

【行事を通しての子ども理解】

| 子どもの姿 | 保育者の願い(かかわり)・支援 | 保護者への支援 |
|--|---|--|
| <p>【年少組 学園祭】 いつもと違う日の登園や雰囲気の違いに戸惑い、駐車場から園に来るまでの間、泣いて暴れる為学園祭に参加せずに帰宅した。</p> <p>【年中組 夏祭り】 日々の生活の中で、友達や保育者とも信頼関係が築けてきたことや、保護者が事前に写真などを見せて次の行動を知らせてくれたことから、泣かずに参加することができた。</p> <p>【年中組 運動会・学園祭】 友達の助けを借りながら、一緒に参加する。すべての活動において、みんなと一緒に行動することができていた。いつもと違う雰囲気でも、混乱することなく参加することができている。</p>  | <p>・保育者のところまで来ることができたら、参加できていたかもしれない。事前に連携をとるべきであった。</p>  <p>・音楽が好きのため、練習の時から喜んで参加する。盆踊りでは一緒にそばで声掛けをしながら踊る事で、安心して踊りに参加することができていた。</p>  <p>・友達とのかかわりをもてるよう、クラス全体にS君の手伝いを募り、手助けをしてもらうようにした。子ども達の中でも気に掛けてくれる子が多く、援助してくれる姿が多く見られた。また、責任をもって援助してくれ、S君も手を繋いで行事に参加している。</p> | <p>・周りと同じことができない現実を目の当たりにし落ち込んでいた為、今まで以上にS君の様子をこまめに伝えたり、行事の前に考えられる対策を話し合うようにした。</p> <p>・幼稚園の行事についていつもと違う雰囲気に戸惑い、泣いてしまうようであれば、連絡を頂くよう事前に説明しておく。</p> <p>・事前に考えられる対処法を考え、声掛けをしておく。また、日ごろの成長の様子を伝えていく事で、保護者にも安心して行事に参加してもらえるようにする。</p> |

《考察》

- ・保育者と本人の関係性だけでなく、保護者の揺れ動きに対しての支援も大きな課題であったが、事前に考えられる手立てを双方で話し合っていくことで、保護者も心構えをもって行事に参加してもらうことが出来た。
- ・保護者の方の安心感の本児にも伝わり、現在の安定した姿へと繋がっているのではないかと考えられるので、今後も密に連携をとるように心掛けていく必要がある。

<気になる子 事例Ⅰ> ～友達とのかかわりを通して～

| <p>C. 年長 5歳児 A男の事例 生年月日 平成30年5月28日</p> | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・平成31年4月1日 0歳児へ入園 ・長女：高校1年生、次女：中学1年生、長男：小学校5年生の4人兄弟 ・年長組の夏頃から、言葉の教室へ通い始める。 | |
| 子どもの姿 | 保育者の支援 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の獲得が遅く、年中組に進級した頃から、2語文をよく話すようになった。口数は少ないが、保育者や友達にも自ら話しかけるようになると、コミュニケーションの楽しさを味わうことができ、本児からの話し掛けが増えていった。 ・発音が聞きとりにくいものの、クラスの友達も何度も聞き返し、本児の会話を理解しようとしてくれた。 ・現在も聞き取りにくい単語があったり、3～4語文での会話が多いが、保育者や友達との会話を楽しんでおり、友達も分け隔てなく本児に接している。 ・身支度や着替えにおいては自分でこなすことができる一方、食具の持ち方が安定せず、握り持ちを直すことに苦戦している。その都度声掛けをしているが、無意識に持ち替えてしまう。 ・背筋が弱いのか、椅子に座っている際に猫背になり、机に体重を預けて座る姿が気になる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の獲得が遅いことに加えて、発音が聞き取りにくいことについては、言い直しをさせたり、口の開きを強制したりすることのないように心掛け本児とかわる。 ・遊びの中で、或いは本児の見守りの中で、話したいことを理解してあげるように努め、その思いを代弁してあげる。`そう、`ちがう、を意思表示するので、そういったコミュニケーションを大切に過ごし、信頼関係の構築に努めた。 ・言葉の獲得に伴い、生活習慣の自立に向けても遅れが感じられるため、食事、着脱、教材・教具の扱いも不十分さが感じられ、本児のやろうとする姿勢を大切にしながら、時には支援を又は見守りながら過ごす。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・様々な活動に意欲的に取り組むが、知的面や運動面で遅滞が見られ、意欲に反して、できない悔しさや歯がゆさから、涙を流すことがある。一方最後まで取り組もうとする意思があり、援助することで制作や運動遊びをやりきり、できた喜びから自ら縄跳びや鉄棒等に挑戦する姿がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・遊びの面においては、生活習慣の獲得と同様に、やろうとする気持ちが感じられるので、そこは大切に受け止めてあげる。 ・鉄棒などは、少しの支援で本児の`できた、`という思いに繋がり、後の活動にも意欲を示すきっかけになるので、合理的配慮の工夫が重要と感じる。 また、他児の前では、同様のさり気ない合理的配慮にも心掛けてきた。 |
| <p>保護者への支援</p> | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・言葉や知的発達面での気になる姿については、園生活の様子や意欲面などについても伝えてきたが、保護者からは特にアクションは見られなかった。 ・年長組へ進級し、5月に迎えた誕生会においては、昨年に比べると発音が聞き取りやすくなったものの、同学年の子どもの発達との差はさらに大きくなっていった。その様子から家庭でも話し合い、しばらくして、母親から言葉の教室に通う事にした旨の連絡を受けた。 ・10月に行われた就学時健康診断では、知能検査の結果に基づき、学校側と個人面談があり、今後療育センター等とも連携しながら支援をしていく運びとなった。 | |

《考察》

- ・本児は、ことばの教室に通うようになってからは、大分ことばの獲得も多くなり、自ら会話する姿も見られるようになった。
- ・園からアプローチはしてきたものの中々応えて頂くことは出来なかったが、就学が近づくにつれ両親が前向きに子どもの姿を捉え対応するようになった事で、本児に大きな影響をもたらしているように感じられる。


<気になる子 事例2> ～園生活を通して～

| | |
|---|---|
| <p>D. 年中4歳児 R子の事例 生年月日 令和1年10月25日 兄弟姉妹無し</p> | |
| <p>・令和5年4月1日 3歳児年少組へ入園 ・入園当初は、体調不良等で欠席が目立ち1年間で102日の登園数であった。</p> | |
| <p>子どもの姿</p> | <p>保育者の支援</p> |
| <p>・年中組に進級し喜びを胸に登園できるが、友達関係が少しずつ築けてきた事で、困り事が増える。しかし、担任が変わった事もあり、なかなか困ったことを担任に話せず帰宅後家で話す事が多々ある。</p>  <p>・登園時間が他児より多少遅い事で、自分がやりたい遊びが出来ず、登園渋りが1学期後半より始まる。 ・他児が気にならない事も敏感に感じ、パニックを起こし大声で『助けてください』と頻繁に言う。その都度丁寧に対応する事で、安心感をもちはじめ園生活も不安を感じることなく過ごせるようになってきた。 ・人に触られる事を嫌がり、頭を撫でられたりする事にも抵抗を示す。 ・多少落ち着きがなく、他児が座って絵本を読んでいる時も本児だけ立っている事もあり、ほとんど興味を示さない。</p> | <p>・年少組では欠席が目立っていたので、進級してからは、体調不良のための欠席は仕方ないとして、出来るだけ登園してほしいという願いをもち、前担任との引継ぎも十分にしておいた。</p> <p>また、園ではさほど困った様子は見せないものの、帰宅後は、園での様子に不満を訴える為、本児の気持ちに寄り添いながら見守り過ごす。</p> <p>・パニック気味になった時は、一旦保育室を離れ少しでも落ち着けるような環境づくりに努めた。</p> <p>・友達とかかわって遊ぶことにも抵抗を示したり保育室内をふらふらと歩き回るような行動に対しては、何気なく興味を持てるような支援や、少しでもかかわりのある子がいれば、その楽しさを引き出してあげるよう努めた。</p> |
| <p>保護者への支援</p> | |
| <p>・家庭でもパニックになって園での様子を伝えることから、保護者が心配になることは、当然であると受け止め、否定はせず聞き入れる姿勢を示し信頼関係の構築に努めた。 ・連絡帳への記入よりも、実際に会話できる機会をもつ事で、保護者との信頼関係も確立していくと思われ、電話や送迎の時に接点をもつよう心掛けた。本児は、毎週金曜日にお迎えが多く、その際、幼稚園での様子を伝えたり、家庭での様子を聞く事で、本児にとって安定した園生活につながるよう話し合いの場を設けた。</p> | |

《考察》

- ・本児は、年中組に進級してから異常行動が目立ってきた。園生活での経験が、2次障がいを引き起こす要因とも感じられる為、今後も注視して見守っていくことが大切であると感じる。

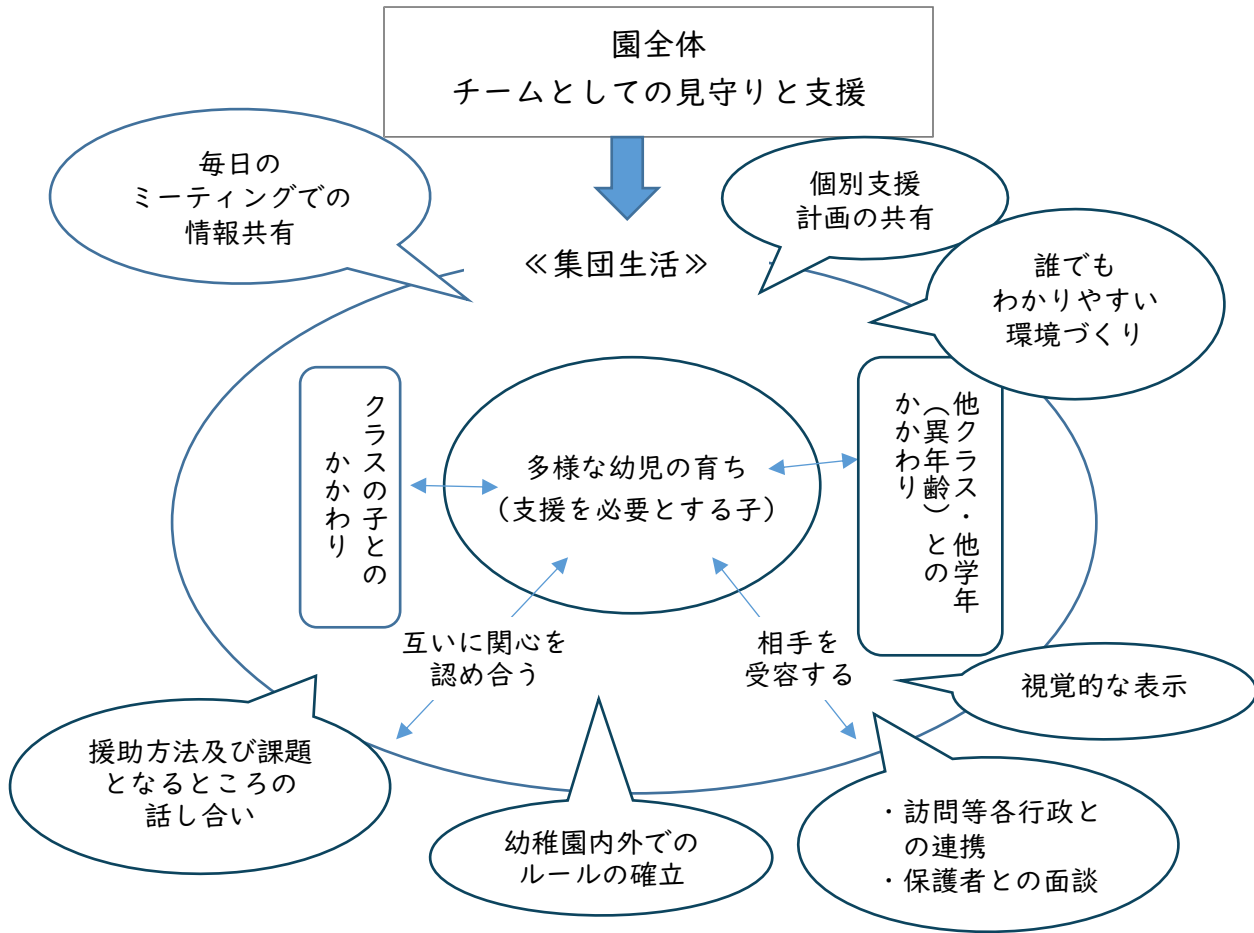
<気になる子 事例3> ～園生活を通して～

| E. 年中4歳児 T男の事例 生年月日 令和1年5月28日 中学生の姉と2人兄弟 | |
|--|--|
| ・令和4年5月27日 2歳児(満3歳児)クラスへ入園 | |
| 子どもの姿 | 保育者の支援 |
| <p>・昨年から消火器や消火栓、消防車等を見ると興奮する姿がある。</p>  <p>・朝の身支度や、各活動、各行事における準備を自分でやろうとせず、声掛けをすると機嫌が悪くなり耳を塞ぐ姿がある。</p> <p>・給食を食べる事にも意欲がなく、食べ進めるが、途中で飽きてしまい自分で食べようとしなない。食べさせようと口元にスプーンをもっていくと口を開ける。</p> <p>・何をすることも意欲が持続せず、活動中に寝転がる姿がある。遊ぶ事にあまり興味がなく、家庭ではゲーム中心であり、常にゲームのことを考えている。</p> | <p>・赤色のクレヨンで、「消火器」等と漢字で書いて遊ぶ姿はあったが、特に取り上げることもせず見守ってきた。</p> <p>・行動全般において、意欲が感じられない為、一緒にやってあげたり、少しでも自分で出来た際など、大いに誉め次に繋がるよう働き掛けを続けた。</p> <p>・家庭生活でゲームに夢中になっていることは、保護者からも聞いている為、園生活では先ず体を思い切って動かす楽しさ等共有できるように働きかけている。遊びを通して体力が少しでもついてくれば、寝転んでばかりいる姿が和らぐのではないかと願っている。</p> |
| 保護者への支援 | |
| <p>・本児の園での姿を、お迎えの際や連絡帳、電話を通して密に伝えているが、否定的な伝え方にならないよう心掛けてきた。</p> <p>・家庭での様子を聞いて、ゲームの与え方と一緒に考え、少しでも実践できるような方向性を見いだせるよう働きかけている。</p> <p>・母親が仕事でのストレスを本児に向けていると感じた為、母親との話す時間を設け、ストレス軽減に繋げていく。</p> <p>・父親と母親の思いが異なっている為、育児について話し合いの場を設けることも、一つの支援と考えている。</p> | |

《考察》

- ・本児にとっての困り感は家庭生活でも感じているようだが、家庭から園側に相談はない。
- ・現在もグレー的な存在であることは否定できないが、保護者との連携を図りながら、今後も様子を見守り支援の在り方を検討し実践していきたいと考える。

○インクルーシブ保育の展開



4. 成果と課題

多様な幼児の育ち（気になる子・支援を必要とする子）においては、お互いを認め合い、受け入れそして尊重し合える環境を整えていくことが、インクルーシブ保育の実践において最も重要なことと捉えている。今後、小学校就学時に大きな選択をやむなく求められるのであれば、成長の最も著しいこの幼児期にインクルーシブ保育の中で、少しでも集団生活に適応する行動を身に付け、遊びをとおして安心感のある環境の下、個々の成長を育んでいきたい願いがある。診断名がなくても、その子の困り感を理解し、保護者へも寄り添い信頼関係を構築していくことにより、その子の伸びしろに繋がると感じている。

保護者への寄り添いもそれぞれである。診断名を受け入れ、どのように我が子とかわっていかればよいのかと悩み、感じている保護者への支援は最もやすく、園生活をとおして子どもの「出来る」が増え成長を感じてもらえることにより、その子の伸びしろも大きくなると実感している。一方、中々受け入れられない保護者への支援は難しく、その心情を理解し否定することなく寄り添っていくことが大切であり、受け入れてもらえる時期は必ず来ると信じて支援していく必要がある。しかし、その時期が少しでも早ければ早い方が、より良い支援を施すことが出来ると確信するものである。

実践・研究を通して、これがインクルーシブ保育といえるのか、取り組みも浅く十分とは言えない途上ではあるが、担任一人が背負うのではなくチームとして今後も取り組んでいくことが効果的である。また、これまでも障がいを抱えて就園した子はいたが、目の前の「出来る」、「出来ない」だけを重視するのではなく、その子の将来がどう社会と繋がって、少しでも多く生き生きとやりがいや楽しみをもって生活をしていけるのかというところまで、職員間で話し合いながら支援し続けていきたい。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人高橋学園 認定こども園まつかわ幼稚園

主幹教諭 長谷川 優子

研究主題 「やってみたい！」心を動かす環境構成
～主体的に自分を表現できる子どもを育てためには～

主題の設定理由 (ねらい) 幼稚園と小学校が連携し、幼児期の学びが小学校教育へ滑らかに接続することが重要視されている。そして幼稚園から高等学校までの教育要領では、子どもの

望まれる姿として「主体的・対話的で深い学び」が一貫して求められている。

「主体的・対話的で深い学び」の幼児期における表現では、「自発的な遊び」である。幼稚園教育要領では「学びに向かう力、人間性」「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力表現力等の基礎」を、幼児教育で育みたい3つの資質・能力として掲げ、「自発的な遊び」を通して育むことを目指している。

本園では、「自発的な遊び」を「主体的に自己発揮する遊びとその環境」ととらえ、そのような遊びの環境はどうあるべきか研修を重ねてきた。子どもの気づき・発見を誘導し、興味・関心を引き出し、次第に子ども自らが視野を広め、子どもたちが話し合いながら自ら遊びを作っていくという過程を想像し、保育者はその過程をどのような環境構成で支えていくべきかを構想し、具体的に環境設定を実践しながらめざす子ども像にむけて研修していきたい。

1. 研究方法

保育者は子どもたちの「やってみたい」気持ちに寄り添い、こどもの興味関心を拾い、保育者の願いを持ちつつも様々な経験ができるよう環境を構成していく必要があると考える。また、年齢に応じ3歳児と4歳児は保育者と一緒に様々な経験を積み重ねていけるように、4歳児と5歳児は自分の好きなことや得意なことを見つけ、更に5歳児は、自分の思いを表現しながら友だちとかかわって遊べるように保育者は見守りかかわっていく。

(1)園内研修で出し合った付箋を、本園が目指すところ・理想とする環境構成・あそびの継続など、話し合いで出た項目に分類し整理していくことで、園での課題点や今後の願いを明確化させる。

(2)あそびの会議を中心として職員間で情報共有し、研究を進めていく。

(3)あそびの会議を毎週続けていく中で、PDCAサイクルを意識しながら遊びの変化や環境構成の見直しを図っていく。

子どもの姿
・
保育者の願い
・
環境構成



【冒険ごっこ】

- ・お泊り保育で行った冒険ごっこで、保育者が飾ったランタンを保育室においておくことで、様々な作り方があることに気づかせていく。
- ・必要な材料を用意し、自分たちで作ってみようとする姿を見守る。
- ・子どもたちの発見や気づきを大切にしながら、影絵作りができるようにしていく。
- ・自分の手や身近な物で影が楽しめることや、影絵の本を見て影絵の仕方を知ることができるようしておく。

- ・自分たちでライトを当てて試行錯誤を重ねて影の見え方を探っていた。
- ・友だち同士で作り方を話し合ったり、共有したりしながら、紙コップに自分で描いた絵を貼ったり、折り紙を切って貼ったものをつけたりしてランタンを作っていた。
- ・2階では冒険ごっこの時に行った、質問に答えるコーナーのまねをしている子もいる。3歳児にも、「見せてあげたら楽しいかも！」と話す子もいる。



- ・子どもたち同士で決めたり、役割分担したり、作ることで、異年齢児が楽しんでくれたことを一緒に喜びあった。今後の活動にも活かしていきたい。

あそびの経過

【あなぐらでの5歳児とのやりとりから】4歳児

- ・あなぐらで5歳児がお店屋さんを開店したことで、遊びに変化が見られる。

- ・折り紙や画用紙などの材料を使って自由に作れるように、材料と場所を設定する。
- ・イメージをうまく形にできずにいる子に対し、一緒に考えながら手助けしていく。



- ・お店に行くためにはお金が必要なことに気づいたり、財布やカバンがあれば便利なことを感じたりしながら、自分なりに工夫する姿が見られた。
- ・文字が書けない友だちの代わりに、お金に数字を書いてあげる様子が見られた。



- ・子ども同士のやりとりを見守りながら、うまく伝わらないような時は、代弁したり言葉がけしたりする。
- ・お店屋さんごっこを通し、自然な形で異年齢児交流が図れるようになってほしい。

- ・5歳児とのやりとりの中で、お店屋さんで経験したくじびきやガチャガチャに憧れを持ち、作ってみたいという気持ちから自分なりにまねて作る姿が見られた。必要な材料を探して、自分なりに作ってみようという気持ちが出てきた。
- ・5歳児の動きや言葉、してもらったことやうれしかったことを、友だち同士伝え合ったり、保育者に伝えに来たりする姿があった。

【お店屋さんごっこへ】

- ・5歳児とのこれまでのかかわりや、年少の時のお祭りの経験を活かし、保育者や友だちと話し合いながら、お店屋さん作りに発展していった。

- ・子どもたちなりの気づきや発見をたくさん活かしてほしい。
- ・友だちと一緒に作る楽しさを十分味わってほしい。
- ・子どもたちと一緒に考えながら、必要な道具や材料を準備する。
- ・子どもたちの思いを形にできるように見守りながら、必要に応じてアイデアを出したり、一緒に話し合い最後まで取り組もうとしたりする気持ちを大切にしていこう。



- ・お客さんがたくさん来てくれるようにと、看板を目立つようにしようとする姿があった。また、買い物の際に、お金が何個必要なのかわかりやすくするために表示を作っていた。
- ・お店を開店すると、店員になりきってやりとりする姿が見られた。言葉のやりとりなど、自分がお店に行った時の経験を活かす姿があった。

あそびの経過

【あなぐらでの5歳児とのやりとりから】3歳児

子どもの姿・保育者の願い・環境構成

- ・園生活に慣れ安心してすごせるようになってくると、預かり保育や兄弟のかかわりから、異年齢とのかかわりも徐々に広がってきた。



- ・異年齢児とのかかわりをより広げていくために、保育者と一緒に4、5歳児のあなぐらに遊びに行きながら、交流を図れるようにしていく。
- ・他学年の担任と連携を図りながら遊びが進められるように配慮する。
- ・どんなことがあったかをクラスで共有したり誘ったりしながら、関心を持たせていく。

- ・あなぐらに遊びに向かう子は決まっておき、自分の遊びをじっくり楽しみたい時期でもあるため、みんながあなぐらでの遊びに関心を持つわけではないようだった。
- ・保育者とまわりにいる子を誘って一緒に遊びに行くことが多かった。

【わたあめやさんの遊びからあなぐらを活用するまで】

- ・5歳児がわたあめを売りに来てくれたことをきっかけに、保育者が必要な物を準備すると、「自分たちもやってみよう！」という気持ちが出てくる。
- ・最初は保育者が準備したものを使ってお店屋さんごっこをしていたが、「作りたい！」という声を拾い、材料を準備し作り方を教えると、楽しみながら作る姿があった。

- ・保育室でのお店屋さんのやりとりが上手になってきたこともあり、遊びを広げていけるよう、あなぐらにお店の設定しておく。
- ・自分たちで出したり片付けしたりできるよう、材料や道具コーナーを設定しておく。



【あきまつりへと遊びがつながる】



- ・商品作りでは「こうやって作ったらいんじゃない？」など子どもたちが作り方のアイデアを出す姿が見られた。
- ・友だちや保育者の楽しく作る姿に影響を受け、「やってみよう！」という子が増えていった。
- ・あきまつりでは自分なりにお店屋さんになりきって遊ぶ姿や、友だちや保育者とのやりとりを楽しんでいた。

【実践を通して】

- あなぐらでの遊びの流れを通し、自然な形で異年齢児と行き来しかかわれるようになってきた。特に5歳児の影響は大きく、その姿をモデルにしながら、3歳児・4歳児なりに工夫して遊ぶ姿があった。4歳児はあなぐらでの経験をきっかけに、あなぐらの外までどんどん遊びが広がる姿が見られた。どの環境においてもすべての遊びにつながっていくと感じた。3歳児においては、保育者が一緒になって楽しむ姿を見せていくことが安心感につながり、その安心感を基にしたい遊びを見つけて向かっていけるのではないかと感じた。
- 身近な遊びを通し、子ども自身が「何が必要か」に気づいていくための大切な経験なのだと感じた。保育者が子どもの声を拾い、環境を再構成していくこと、子どもと一緒に遊んで遊びを作りかえていくことが大切なのだと感じた。

【事例】いもむし救出作戦

＜子どもたちとの遊びの中で、偶然起こった出来事からの学びについて考える＞

園庭での遊びの中で、保育者が3歳児と虫探しをしていると、木製アスレチックの中から泣き声が聞こえてきた。様子を見に行くと、5歳児Y男が泣いていた。理由を聞くと、0君が虫かごを蹴ってしまい、虫かごに入れていた『いもむし』がアスレチックの板の間に落ちてしまったとのことだった。0男に話を聞くと、蹴ってしまったことに気づいていなかったため、状況を伝えるとY男に自ら謝る姿があった。

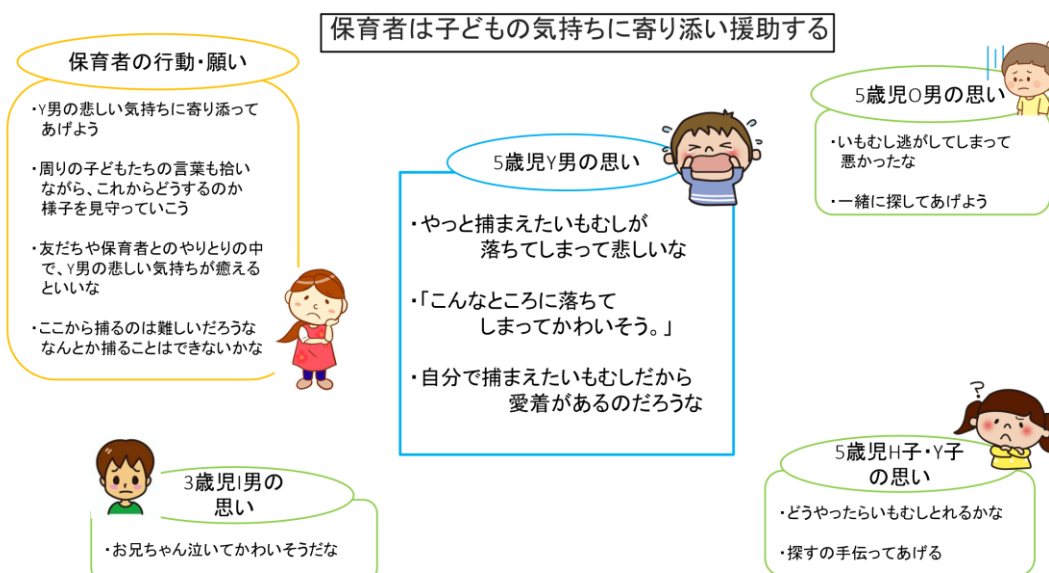
(Y男のいもむしが落ちていった場所は、図の丸で囲まれた所。隙間は鉛筆1本分程度)



しかし、0男に謝られたもののY男は泣き止む様子はなく「いもむしが落ちちゃった。」と悲しむ姿があった。そのため、保育者はY男の気持ちに寄り添い話を聞いた。すると、近くにいた3歳児、5歳児数名が集まり「どうしたの？」と気に掛ける姿があったため、保育者がこれまでのいきさつを伝えた。話を聞いて、「あっちの方で別のいもむしを探したら？」という意見も聞かれたが、Y男は「落ちていったいもむしがかわいそうだ。」と言ってさらに泣き出した。それを聞いた3歳児I男は「お兄ちゃんかわいそう。」とつぶやき、0男は「一緒に探そう。」とY男に伝えた。5歳児H子、Y子は「どうやって捕る？」など様々な声が聞かれた。



○そこで保育者はそれぞれの子どもの気持ちに寄り添いながら援助した。
その時の子どもの思いを自分なりに下記のように捉えてみた。



(アイディアを出し合って)

～子どもたちはそれぞれの考えを出し合いながら、いもむし救出作戦が始まった～

3歳児I男：「棒を使って捕ろう。」と提案した。隙間から棒を入れるが捕れなかった。

短い棒、長い棒といろいろ変えてみるが捕ることはできなかった。

5歳児O男：スコップなら捕れるのではないかとスコップで掬い上げる作戦をたてる。

しかし、スコップの厚みで隙間に入らない。そのため、柄の長いスコップアスレチックの下から入れて掻き出す作戦に変更するが、長さはあるものうまくいかずに失敗した。

5歳児Y子：「虫メガネを使えば大きく見えて捕れるかも！」と提案し、保育室から虫メガネを持ってきた。保育者には虫メガネを活用する、という考えはなかったもので、なんておもしろい考えだろうと思った。そして隙間から覗きながらいもむしが見えるかどうか、友だちと一緒に試す姿があった。

5歳児H子：「懐中電灯で照らしたらどう？」と提案。懐中電灯を持ってくるとそれを使って照らしながら探す、捕ることはできなかった。

5歳児 Y男：新聞紙で細く長い棒を作り捕る作戦をたてる。しかし、うまく丸めることができず保育者に助けを求めてきたため、手助けしながら一緒に作った。アスレチックの中から虫メガネで見る子、下から懐中電灯で照らす子、新聞紙で搔き出して捕ろうとする Y男。それぞれに何とか捕ることはできないかと工夫する姿が見られた。

アイデアを出し合っ

その後子どもたちはそれぞれの考えを友だちや保育者に伝え、いもむし救出作戦が始まった。



(結果：救出は失敗)

それぞれが考えを出し合い、いろいろ試してみたが、結局いもむしを救出することはできないまま、お迎えの時間となってしまった。しかし、あれほど泣いていた Y男は晴れやかな表情で保育室へと戻っていった。

【考察】

○今回の事例を「幼児期の終わりまで育てて欲しい姿」と照らし合わせながらどんなところが育っているかを考察した。

(協同性)

泣いていた Y男も次第に気持ちが落ち着き、自分なりの考えで行動したり、友だちの考えを取り入れたりしながら様々なことを試していた。残念ながら救出は失敗に終わったが Y男の表情が晴れやかだったのは、友だちや保育者が共感し気持ちを理解してもらえたこと、友だちや自分の考えで思う存分試すことができたこと、Y男なりにやれるだけのことはやったという満足感があったからではないかと感じた。

(道徳性・規範意識の芽生え)

今回 Y男はいろいろやってみたがだめだったという経験の中で、自分で自分の気持ちに折り合いをつけていくことを学べたのではないか。友だちの気持ちに共感する姿や、Y男が自分の気持ちを整理する様子から、道徳性や規範意識の芽生えにつながるのではないかと感じた。

(社会生活とのかかわり)

様々な人とのかかわりを通し、相手の気持ちを考えてかかわったり、自分が役に立つことの喜びを感じたりすることが、社会生活とのかかわりにつながっていくのではないかと感じた。いろいろ手助けしようとかかわった周りの友だちが、これらに当てはまるのではないかと思う。

（思考力の芽生え）

今回子どもたちがそれぞれに考えを出し、自分なりの考えで試したり思いを伝え合ったりすることができていた。「やってみよう。」「試してみよう。」という思いにつなげていくためには、子どもの声を拾い、受け止め共感する、認め合うことが大切であるとともに、人的環境の重要性をあらためて感じた。また、年齢が上がるごとに出されるアイデアが様々あり、遊びの中で使ったことのある道具や、経験したことを活かそうとする姿が見られた。物の性質や仕組みなどに気づくことで遊びや生活に活かすことができている。これは、3歳児の時から経験の積み重ねによるものだと感じた。

（自然との関わり・生命尊重）

Y男の「いもむしがかわいそう。」という言葉から、身近な生き物にかかわる経験を通し、命あるものに対しての愛情や大切にしようとする気持ちが育まれてきていることを感じた。中には、「別のいもむし探したら？」という声も聞かれたが、Y男にとっては自分で捕まえたいもむしが特別であり愛情を感じているのだと思った。

（言葉による伝え合い）

子どもたちと様々な方法で試していくうちに、子どもも保育者も楽しくなり会話も弾んでいった。「次はこうする？」「これはどうかな？」と保育者も子どもと一緒に楽しむことで思いを伝え合ったり、他者の気持ちに気づいたり、伝え合うことの楽しさ、嬉しさにつながっていくのではないかと感じた。

【まとめ】

今回の事例を通し、もし保育者が「ここから捕るのは無理なのでは？」など、あきらめるような言葉を発していたら、状況が変わっていたかもしれないと思うと言葉の重みを感じるとともに、保育者の言葉がけの重要性を感じた。前向きに「やってみたら。」と後押しできるような言葉がけを心掛けたい。成功体験だけでなく、小さな失敗の積み重ねと、友だちや保育者の励ましや共感も、子どもの「やってみたい！」や「次こそは！」という気持ちにつながるのではないか。そしてまずは、子どもの「やってみたい！」と思う心を受け止めていく姿勢が大切であると感じた。

【参考・引用文献】

（講演録） 今後の幼児教育とは 幼稚園教育要領の改訂をうけて
無藤 隆（白梅学園大学）

（参考文献） 園内研修に生かせる実践・記録・共有アイデア ～科学する保育をはぐくむ保育～
監修・執筆 秋田喜代美 神長美津子

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人向陽学園 認定こども園向陽幼稚園

教諭 工藤 元子

研究主題 表現するっておもしろい！ いろいろな方法があるね！
～造形遊びを通して～

主題の設定理由 (ねらい) 幼児期の「遊び」とは、学びにつながる大切なものとされている。その一つに造形遊びがあり、幼児にとっては、自分の思いを表現する楽しい遊びである。本園でも年齢・成長段階などを考慮しながら教師が題材や材料を準備して、自由遊びや一斉活動など様々な時間に製作遊びを行っている。しかし、「幼児一人ひとりが自由に伸び伸びと表現できているだろうか。」「幼児の発想や楽しんでいることに教師が共感できているだろうか。」など自分たちの造形遊びへの取り組み方に疑問を感じるようになった。そこで、今年度、造形教育研究の一年次では、実際の幼児の姿から造形表現における発達段階や教師のかかわり方などを振り返り「ひろがる幼児の造形表現」を探っていくことにした。

【研究の方法】

- (1) それぞれの教師が「造形」をどのように捉えているのかを話し合う。
- (2) 「造形」の楽しさはどこにあるのか・教師のかかわり方を探る。
- (3) 成長段階に合わせた造形あそびの実践を振り返り、かかわりや援助を見直す。

【研究の視点】

(1) 教師間での共通理解 ～私達が考える「造形」とは～

- ・自由なひらめきであり、正解や間違いはなく、イメージしたことや想像したことを伸び伸びと表現できるもの。
- ・自分の目で見て経験したこと、好きになったこと、季節の行事を通して学んだことを自分なりの発想でカタチにすること。
- ・一つだけの表現（見方）だけでなく、いろいろな見え方や表現、捉え方で楽しむもの。
- ・いろいろな素材を知り、使って表現したくなること。

(2) 教師のかかわりで大事にしたいこと ～幼児の『やってみたい』を大切に～






- ・経験や技法を知る → 様々な素材や道具との出会いを幼児の『やってみたい』につなげていく。
- ・「いいな～！」と憧れを感じる心 → 興味関心を持ったときは、「やってみたい！！」のきっかけとなる。また、友達の作品が刺激となり、自分も作ってみたいと意欲が沸く。
- ・創作過程 → 出来上がっていく過程がわくわくするよう、幼児が集中している時の見守りは丁寧に行う必要がある。無駄に話し掛けられないほうが良い。

- ・ 幼児のひらめき → 何も考えずに描いたり、作ったりしていくうちにイメージが形になっていく様子を大事にする。大人の目線で決めない。「間違いがない」なかで、伸び伸び楽しく取り組むことで「作品への満足感」もかわってくる。
- ・ 「できた！！」という達成感 → じっくり取り組んだ作品を周りの人に見てもらう喜びは大きい。また、友だちと力を合わせて作品が出来上がった時の思いの共有は、他者との関係をより強くしてくれる。
- ・ 温かいまなざし → お絵描き・粘土・廃品製作・積み木など・・・子どもの遊びと創作意欲とはどのようにつながっているのかという目線を大切に幼児のしていることを見守る。

(3) 造形遊びから読み取れる幼児の成長段階を考察してみる。

- ・ それぞれの学年・年齢が楽しんでいることは何であるかを教師が丁寧に理解していくことで、より幼児の造形経験を豊かにすることができるのではないかと。どのような遊びや姿が見られたのかを話し合い、今後に向けての造形遊びの環境や取り組みを見直していく。

【実践】

| 5歳児 うめ組 | こうしたらどうかな？ ～思いを伝え合いながら作る楽しさ～ | |
|--|---------------------------------|---|
| <p>〈子どもの実態〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの経験から遊びに必要なものを考えたり材料を自分で選んで作ったりすることを楽しんでいる。また、友達と協力して作ったり遊びをすすめたりする姿も見られる。一人のお化け作りからコーナーを利用した「お化け屋敷作り」へと発展していった。 | | |
| <p>〈ねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 友だちに思いを伝えたり相手の考えに耳を傾けたりしてみんなで作る楽しさを味わう。 | | |
| 子どもの姿 | | 保育者の思い（援助） |
| <p>4月17日～</p>  <p>Y男「ここに扇風機お化けを置こうかな？」しばらくするとH男が加わる。</p>  <p>H男「僕は暗くしたいから布をつけるね。」</p> <p>S男「簡単に通れないようにいっぱい布をつけよう。」</p>  <p>Y男「カッパになって人間が驚かしたら面白いよね。」とお面を作る。</p> <p>K男「布は、上にあったほうが見やすいよ。」と布の貼り付け位置を提案する。</p>   <p>A男 M女 M男「看板があったらもっとわかりやすいよ。」と看板をつくる。「足をつけたほう</p> | | <p>「Y男の遊びに周りの子が興味をもってかわる楽しさを味わってほしい。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 画用紙や布を準備する。 <p>「工事が得意な子が多いため共同で作る楽しさを味わってほしい。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 朝の会で遊びの発表をしてもらい、お化け屋敷も紹介した。 また、他にどんなアイデアがあるのか話し合った。 |

が移動が出来て便利だね。」また、ひらがな表を使って苦手な文字にも挑戦していた。

4月25日～

M女「お化け屋敷の隣にも基地を作りたい。」

A男「ここをもっと広くしたら面白そう。」

「じゃあ、ままごとのものを寄せて広く使ったら面白そうだね。」とみんなで隣の保育室にままごと用具を片づけた。

A男「お化け屋敷で遊んだ後に休憩するところを作りたい。前(年中時)お家を作ったから、できるよ。」と作り始めた。

K男 S男 T女が興味を示し、加わる。

それぞれしたいことがあり、行動していた。

A男「待って、そうじゃない！」と怒り始めた。

・互いの話を聞き、「じゃあ、ここを繋げたら？」とA男「いいね～。」「ここに穴をあけてもいい？」と相談しながら製作遊びがすすんだ。



H女「この穴窓だね。中から見るの面白い。」

K男「カラーテープで模様付けたら面白そうだ。」

M女「ねえ、お化け屋敷から休憩するところも繋げたら面白いんじゃない？」

A男「じゃあ、段ボールでトンネルにしようよ。」



実際に潜り、通り具合はどうか、確かめていた。

●ままごとコーナーを片づけて広く使ってもよいか子どもたちで話し合ってもらった。

●子どもたちがバスで順に集まってきた時間帯に様々な大きさの段ボールを置いてみる。

「互いの良いアイデアを伝え合ってほしい。」

●それぞれ思っていることを言葉で伝えられるよう声を掛ける。

「良さに気づき認めているね。相談して新しいアイデアも生まれている。いいぞ、いいぞ♪」

●遊びの様子を見守り、必要な用具や材料を準備する。

5月2日

A男「もっと面白くしよう。」と改造をしていた。しかし、遊びの時間が終わる頃だったので中途半端な状態だった。

片付けの時間になり、「ここぐちゃぐちゃだから片付けようよ。」と布を外そうとしたS男。それをみたA男は「やめて!」と叫ぶ。みんなは分らず困った様子。

「そうだったんだね。じゃあ、またみんなで作ろうよ。」とA男に寄り添う。



椅子を運び天井を直す子、ガムテープを切る子など分担して動き出していた。

A男に対して「大工さんここはどうする?」などやりとりも楽しみながらすすんだ。A男も喜んでいた。

T女「ペンの汚れがついちゃったから顔洗うね。」とみんなでできたことが嬉しく顔を洗うことも楽しんでいた。

- ・片付けが終わり、「明日はなにをする?」と自然と子どもたちで相談が始まっていた。

●A男がどうしたかったのか、自分で伝えられるよう後押しした。

A男とみんなが和解し、「嬉しそうな表情を大切にしたいな。よし、片付け時間を15分延ばそう。作り直していいよ。」と伝える。

〈考察〉

友だちと思いを伝え合いながらすすめることができるよう後押ししてきたことで徐々に友だち同士で協力して作ることの面白さも味わえたように思う。子ども発信を大切にした遊びで個々の良さや成長も感じる事が出来た。

| | |
|---|---|
| 4歳児 たんぼぼ組 | 自分だけの色作り～「赤」「青」「黄」を混ぜると何色になるかな～ |
| 〈子どもの実態〉 | |
| ・自由遊びでは、クレヨンでお絵描きを楽しむ子がいる。ぬりえが好きな子がいるが、キャラクターの物だけではなく、幾何学模様のぬりえとクーピーを出し、細かい物も塗れるようにした。 ・全体おはじまりの際、教師が色を使った実験をみせたところ、とても興味を持ってみている。クラスでも、やってみたいと思い、色混ぜ遊びを考えた。 | |
| 〈ねらい〉 | |
| ・三原色を混ぜると色が変化することを知る。 ・実験を通して色の変化の様子を楽しむ。 | |
| 子どもの姿 | 教師の思い(援助) |
| ・教師のまわりに集まり、持ってきた材料(絵の具・スポイト・パレット)に興味を示し、わ | (絵の具は元々好きであるが、)「スポイトという新しい教材を使うことで、更に興味を持 |

くわくしながらみている。教師が「赤」「青」「黄」の絵の具をスポイトを使って順番に混ぜる。少しずつ色が変化の様子をみて驚いたり大喜びし抱き合ったりしていた。



- ・自分で好きなように混ぜてやってみることを伝えると、気持ちは更に上々。
- ・スポイトを初めて使う子がほとんどなのでまずスポイトの使い方を聞き、やってみる。
- ・パレットに入った絵の具をもらう。

・実験開始！！

- ・大胆に混ぜる子・じっくり、ゆっくりな子(きれいな色のままでいたいから慎重に混ぜる



子・単純に何色になるか考えている子)など様々いるが、一回一回行う度に歓声をあげて、色が変わったことを喜ぶ姿が見られ、驚きと嬉しさが顔や声に出ていた。

教師にみてもらいたくて、教師を呼ぶ声があちらこちら聞こえた。

って取り組んでほしい」



- スポイトにショットをあて、「なんだろう??」「やってみたい!!」の気持ちを高めていく。

「色混ぜ遊びを存分に楽しんでほしい」

- 一人一人にパレットの絵の具を渡し、自分なりのペース・自分の空間で実験ができるようにする。
- 友だちの色を見て自分の色との違いを感じるができるように、友だちの様子をさりげなく伝える。

〈考察〉

- ・ スポイトを使ったことで、少しずつ色が変わる様子をじっくりと見る事ができた。
- ・ いつもと違う教材を取り入れたことで、興味も深まり楽しんで取り組んでいた。
- ・ 一人に一つパレットやスポイトを用意したことで、自分のペースでゆっくり行ったり「次はこの色にしよう!」「これとこれを混ぜたら本当にこの色になるのかな..?」などと自分なりにじっくり考えながら行ったりすることができた。満足感に繋がったようだ。
- ・ 友だちと一緒にの机で行った実験だが人数分を用意したことで、個の時間・空間が確保されて遊べた。誰にも邪魔されないことも、活動によっては大事である。
- ・ パレットが6等分に分かれているため、3回混ぜることはできたが、それ以上混ぜることができず、もっと試したくてできない姿もあり、もったいなかった。
- ・ 今回は、友だちと色を比べるというより、自分の中で色作りを楽しんでいたようだ。
- ・ 色を混ぜて楽しむことができたが、年中児なので「○色と○色を混ぜたら○色になる。」ということが、子どもの中に残ると尚よかった。

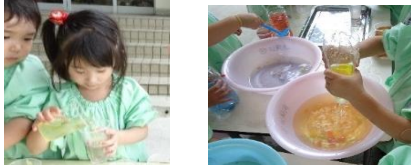
| 3歳児 はと組 | 色水・寒天遊び～色の変化や感触を楽しもう！～ | |
|---|------------------------|--|
| <p>〈子どもの実態〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水遊ぶやプール遊びが好きで存分に遊べる幼児もいるが、水遊びが苦手な幼児もいる。 ・また、粘土遊びは全員が好きで、手で触って感触を味わいながら楽しむ姿が見られる。 | | |
| <p>〈ねらい〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・冷たい寒天や色水に触れて、気持ち良さを感じる。 ・色の変化を楽しんだり、寒天の感触を味わったりしながら自分なりに遊ぶ。 | | |
| 子どもの姿 | 保育者の思い（●援助） | |
| <p>～戸外で活動～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入では、初めての活動に期待を膨らませながら、話を聞いていた。「どうぞ。」と合図を出すと、すぐに駆けていきワクワクしている様子だった。 ・寒天、色水を準備し自由に遊べるようにした。 <p>〈寒天遊び〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初にそれぞれ欲しい色の寒天をとると透明なコップに入れて自分の寒天を確保していた。 ・自分の場所を決めるとそこから動かず遊んでいた。まずは、手で触る幼児が多かった。手で握って離してを繰り返し感触を楽しんでいた。「冷たい！」「ぷにぷにする！ぷにるんずみたい！」と思ったことを声に出しながら、喜んで触っていた。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">  </div> <ul style="list-style-type: none"> ・徐々に細かくなっていき、手ですくうことができなくなると自然とおたまを持ち、すくっていた。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">  </div> | | |
| <p>「寒天に興味をもってほしい。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●初めて扱う素材のため、口に入れないなど約束事を伝える。 ●のびのびと活動ができるように十分な数のコップや容器を用意する。 <p>「寒天の感触を楽しんでほしい。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自分の場所が確保できるように見守りながら、困っている幼児には声を掛け、楽しく遊び始めることがようにする。 ●幼児の発言や反応に答えながら受け止め共感していく。また、どんな感触が子どもたちに聞いたり、「～だね」と声を掛けたりする。 ●夢中になっている姿を見守りながら、その幼児が何を楽しんでいるのか把握する。 | | |

<色水遊び>

- ・好きな色を自分で選ぶと透明なコップに入れて色が変わる様子も楽しんでいた。



- ・欲しいものがある時は貸してもらったり、友だちが使い終わるのを待ったりしながら、道具を使っていた。
- ・無言で黙々と夢中になって遊ぶ幼児が多かった。



「色の変化に気づきながら遊んでほしい。」

- 色が分かるように透明なカップを準備する。
- 色の変化に気づけるよう声を掛ける。また、何色になったか子どもたちに聞きながら色の変化を楽しめるようにする。

「友達と道具の貸し借りをしながら、仲良く遊んでほしい。」

- 道具の取り合いになった際は、順番で使えるように声掛けをする。

<考察>

子どもの姿を想像した時、もっと歓声をあげたり、ワイワイ楽しんだりすると思っていたが、無言で黙々と遊ぶという予想外な姿が見られた。初めての素材ということもありそれだけ夢中になっていたことだと感じた。また、3歳児ということで口に入れても良いように今回は食紅を使った。元の色が薄く、透明なカップに入れると綺麗だった。寒天と混ぜた時も透けて見え、楽しめていた。色の変化を分かりやすくしたい時は、絵の具など色の濃い用具を使うと良いと感じた。

| | | |
|--|------------------------------------|--|
| <p>2歳児 もも組</p> | <p>絵の具との初めての出会い!!いろいろな遊び方を体験 ♪</p> | |
| <p><子どもの実態> 手が濡れたり汚れたりすることを気にする幼児がいた。気にせず遊べるように、興味を持ちそうな絵の具を自由遊びで取り入れた。初めはスタンプ遊びから始めてみると、興味津々で教師や異学年の幼児が楽しむ様子を見ていた。徐々に慣れてくると、好きな色のスタンプを押し始め、画用紙いっぱいになるくらい夢中になって楽しんでいた。</p> | | |
| <p><ねらい> ・道具の使い方や片づけ方を楽しく学ぶ。 ・遊びながら絵の具の面白さ（筆を使って描く・色を混ぜる・手に塗る）を知る。</p> | | |
| <p>子どもの姿</p> | | <p>※保育者の思い（●援助）</p> |
| <p>◆4月下旬◆ ・大判用紙と絵の具を用意すると集まってきた。 ・その後、「べったんやりたい」と言って、スタンプ遊びを楽しむようになった。</p> | | <p>※家庭では経験できないことを、幼稚園をたくさん楽しんでほしい。 ●興味が湧くように、他のクラスの幼児が遊びに来る自由遊びの時間にスタンプ遊びを提供する。 ●やりたい時にいつでもできるように、道具を準備しておく。</p> |



◆5月上旬◆

- ・ 絵の具を手付けては、洗うを何度も繰り返す。色がつくことに快感を感じている様子。



- ・ 壁に貼った蝶々に気づいたM子。うれしかったのか「これM子のぺったん？」と毎日のように聞いてきた。

◆6月下旬◆

- ・ 絵筆の使い方を見せると、真似しながら使ってみようとした。(上下に動かす・丸を描く)
- ・ 同じ所に何度も重ねて描いていた。
- ・ 絵筆を洗っていた時に手に絵の具が付いた。そこから手に塗り始め、手でお絵描きを楽しみ出した。



- ・ 楽しくて 20 分ほど夢中になってお絵かきしていた。

◆7月上旬◆

- ・ 夏の装飾づくりをする。(活動)
- ・ 好きな絵の具を3色選んでスポンジの「にじみ絵」に挑戦した。
- ・ 好きな色を選べることに嬉しさを感じている様子。
- ・ にじむ様子が面白く「きれい！」と言いながらにじんだ所の上から色を重ねていた。



※スタンプや手形をすることが楽しい様子である。スタンプを押した画用紙が増えてきた。押して満足の様子だが、気持ちを受け止めていきたい。

- たくさんスタンプしたものが集まるため蝶々や花の形に切り、新たな面白さを味わえるようにする。

※絵の具を活用し、いろいろなイメージを自分なりにどのように表現するのかを探りたい。

- 絵筆を準備し、新たな道具に触れて興味や関心をさらに高めていく。
- 道具の使い方を遊びながら覚えることができるよう、最初から一つ一つ丁寧に約束事を確認していく。
- ※今回は同系色(青・水色・白)で、あまり色の変化はなかった。今度は色の種類を増やすことで、色が変わる不思議さに触れ、楽しんでほしい。
- 色が混ざり合う様子を存分に楽しめるように、「にじみ絵」を取り入れる。
- 好きな色を3色選べるようにし、子どもたちの好奇心を引き出していく。

- にじむ様子を一緒に観察し、子どもの気づきやつぶやきを大事にしていく。
- ※喜ぶ姿が連鎖し、みんなで作品を作ったことが楽しかった経験として子どもたちの心に残ってほしい。

・自分の作品に愛着を感じ、気に入っている子がいた。

～クラゲ～（作品完成）保育室に掲示

A男：「ぼくのどこ？」

T：「これだよ！」（指さしして教える）

A男：「あったー！」「ねーあったよ！」

B男：「すごい！ぼくのはどこ？」

T：「きれいだね！」子：「うん！」

※作品に目を向け、自分のクラゲを探し始め、次々に教師に聞いてきた。

◆9月上旬◆

- ・6月下旬にした絵の具遊びを思い出して喜ぶ。
- ・絵の具を筆につけ、色がにじむ様子を喜び、違う色の容器に垂らしていた。
- ・ポタポタと画用紙にたらしたり、点や丸を描いたりしていた。全色を重ねて描き楽しむもいた。



・それぞれ描いていくうちにイメージが湧いてくる様子だった。

「新庄祭り」「りんご」「ぶどう」など

・遊びが終了した際に、絵の具を水屋に流すと、遊びの延長で片づけを手伝ってくれた。自分たちで絵の具がついたところを探し、床拭きまでしてくれた。



・掲示すると嬉しそうに見ていた。さらにイメージを膨らませ、教師とやりとりしながら会話を楽しんだ。

●作品を作った後にすぐに壁に掲示すると喜んでいただけがあったため、翌日に掲示できるようにする。

※作品を見ながらやりとりが生まれたことが嬉しい。このような時間を大切にしたいと改めて思った。



●6月で経験した、絵筆を用いて絵の具遊びをする。

●色の変化を存分に楽しめるように、薄めにといた絵の具（赤・青・緑・肌色・黄色）を準備する。

※画用紙にも描いて色を混ぜることも楽しんでほしい。

※それぞれの感性を大事にし、自由に楽しませたい。

●好きなだけお絵かきができるように画用紙を多めに準備しておく。

※どんなこと・どんなものをイメージしているのかを知りたい。

●ある程度描いてから、何をイメージしたものかを子どもたち一人ひとりに聞く。

※イメージしたものを描くというより、描いていくうちに『○○みたい』とイメージが湧いてくるのが知れ、今後の作品作りの際に活かせそうだと感じた。

●子ども達の思いをくみ取り、遊びの一環として後片付けも一緒に行う。

※普段の後片付けを率先してしない子も進んで取り組んでいたことに驚いた。

●前回同様に、できた作品は保育室に掲示し、子どもたちの反応を見る。

※今後もできる範囲でいろいろな経験をしていけるようにしたい。

〈考察〉

絵の具は活用の仕方、個性豊かな表現ができる。しかし、活動の時に取り入れがちで遊びの中で提供したことが少なかった。2歳児クラスは、新鮮さや初めての出会いが多く、好奇心をくすぐる体験の幅が広い。だからこそ、感じたことや発見できることも多いと思った。子どもたちに絵の具を提供した際の、嬉しそうな表情からも伝わってきた。見たことを自分の知っている言葉で表現をすることが増えてきている。また、友だちの様子にもよく目を向けるようになった。絵の具に触れ、「きれい」と感じることもできるようになった。できることは年齢により限られているが、五感を刺激し感性がのびてきているように感じる。また、覚えたことを自分なりにやってみようとする力も伸びてきている。今後も、年齢に合わせながら様々な体験をしていきたい。

【まとめ】

- 小さい学年（年齢）での経験や積み重ねが、大きい学年（年齢）になった際の表現や技法の広がりにつながっている。小さい学年（年齢）は、様々な素材や道具に触れることで幼児の興味・関心を高めていた。また、夢中になると幼児自身がくり返しじっくりと楽しむ姿が見られた。大きな学年（年齢）になると自分の気付いたことを友だちに伝えたり、一緒に協力したりして物を作ろうとする様子が見られていった。
- 2・3歳児は、「何かを作ろうとしていないけれども面白い→後から形になる」4・5歳児は、「カタチあるものを自分で作ろうという気持ちで遊び始める」という成長段階が感じられた。
- 教師の判断や考えて完成形にもっていかずに、取り組んでいる幼児の様子や思いを大事にしながらかかわることがより満足感や達成感につながっていた。
- 教師の動き・言葉が幼児の表現につながる。どのような言葉が、幼児の発想を広げたり、工夫を凝らすきっかけになったりするのかを考慮していく必要性を感じた。また、教師が幼児の納得するまで時間を確保することもポイントとなることが分かった。
- 教師は、できる・上手ではなく、幼児が表現しようとしていることを受け止めることが個々の温かく豊かな経験となる。また、幼児の感じたことが造形遊びの面白さにつながったり、継続した造形遊びへと発展していくことを再確認できた。
- 造形遊びを通して、教師や友だちなど人とのかわりに広がりが見られるようになり、幼児の人間関係を豊かにするきっかけとなっていた。

【今後の課題】

- 教師の幼児の造形表現への向き合い方・捉え方・かわり方（声掛け）などをもっと深く考えていく必要がある。
- さらに幼児が伸び伸びと表現して遊べる園内の環境作りが必要である。
- 幼児の体験と心の動き、人間関係などを造形表現に繋げていく経験を重ねていけるようにする。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人羽陽学園 羽陽学園短期大学附属

幼保連携型認定こども園大宝幼稚園

保育教諭 中村 里美／本田 成美

研究主題 「子どもに寄り添い、共に作り出す活動と環境のあり方」

主題の設定理由 (ねらい) 0歳からの活動が幼児教育と小学校教育の架け橋期に繋がるよう、園全体での研修テーマを設けて、研修を重ねてきた。架け橋期に目指す子ども像に育って欲しいと願いを達成するには、土台として0歳児から主体的な学びの基礎となる好奇心、気付き、意欲、探究心等の「生きる力」の土台を育むことが重要である。0歳～5歳児までの豊かな経験から学びの連続性を確保し、小学校までの教育の繋がりを意識した活動が、子どもの豊かな体験を生み出し、主体的・対話的で深い学びの実現に繋がっていくのではないかと考えた。

幼児期の終わりまでに育って欲しい姿を念頭において、子ども達の主体的な活動を大切にしながら、PDCAサイクルを行うことで、内容が深まり、ウェルビーイングが高められるのではないかと考えた。また、ウェルビーイングを高め、子どもが心安らぐ安定した生活環境を持ち、心身共に健康で、自分らしく生き活きと生きる力を育めるよう園内で研修を深めている。今年度はさらにステップアップをして、人とのかかわりや異年齢とのかかわりに重点を置き、保育教諭や友だちのやりとりを通して、心を通わせたり、認め合ったりする事でウェルビーイングを更に高めていくことに努めていきたい。そのために、「それいいね。いっしょにやってみよう。」と子どもたちが興味関心を示すような環境を子どもと共に作り出し、保育教諭や友だちと一緒に自分の思いや考えを表現し、自らの考えを広げ、対話的な学びを行っていきたい。

1. 研究方法

★ 園全体での研修テーマ

「それいいね。いっしょにやってみよう。」

～ウェルビーイングが高まる保育を考える～

- ・「幼児教育と小学校教育の架け橋期」「幼児教育と小学校教育の円滑な接続」を積み重ねるように活動計画を立てる
- ・主体的・対話的で深い学びの実現を図る
- ・一人一人の多様性について配慮する
- ・学びや生活の基盤を育む
- ・地域とのかかわりや連携について
- ・保育教諭と幼児が共にウェルビーイングが高められる保育を考える

2. 研究内容

園全体で大宝ランド（子ども達の主体的な活動）を意識し、子どもと共に作り出す活動環境を考える。3歳児から5歳児の実践内容から子どもの育ちを読み解いていく。





《年長》





『こんなことも知ってるよ！出来るよ！～自信が付く経験をたっぷり～』





事例Ⅰ：「羽黒山を作ろう！」


<内容>

5月下旬に羽黒山へ親子遠足に行った。様々な物を実際に見たり、自然を体で感じたりした楽しい経験から、「幼稚園内にも羽黒山を作りたい！」という声が上がリ、遊びが広がっていった。

| 時期 | ・子どもの姿 | ◆保育教諭のよみとり ★援助・かかわり |
|------|---|---|
| 5/27 | <p>・羽黒山遠足後にマップ作りをして思い出を出し合った子どもたち。 羽黒山の色々な物を作ってみたい。と声が上がった。 「次は自分たちで作ってみたい」 「鳥居作ろう」 「大きいの！」 「みんな通れるくらい」 ・牛乳パックをガムテープで貼り始める。 K：「ここにつなげて」 C：「いいね、もっと持って来て」 H：「こういう形にね！」 自由画帳に鳥居の絵を描いて、作っている友だちに見せる。 K：「ここはどうなった？」 Hの絵を見ながら作る。 ・鳥居の形が出来、色をつける話題になる。 「赤だよね」 「ここは黒にしよう」 「紙を貼る」 「赤い紙ください」 ・折り紙をのりで貼り始める。</p>  <p>・Hは自由画帳を見せながら鳥居の前に立っている。 ・のりを塗った折り紙を色々な所に皆が貼っていく。 C：「ここすきまがあるよ」 C：「ここね」 ・Cは鳥居の側で折り紙を貼りに来る子を待ち、どこに貼ると良いか指示を出すようになった。 Cの指さしたところに、折り紙を貼っていく。</p> | <p>◆遠足で見たり経験したりした事を、遊びに発展して行って欲しい。 「中二階に作るのはどう？」 ★場所の提案をする。 「何で作る？」「どうやって飾りたい？」 ◆イメージを友だちに伝える為に、描いて見せる行動が出来ていて素晴らしい！ 「H設計士みたいだね」</p>  <p>「どうやって色をつける？」 ◆どうすれば良いか、廃材遊びの経験を活かして考えているね。</p>   |

| 時期 | ・子どもの姿 | ◆保育教諭のよみとり ★援助・かかわり |
|------|--|--|
| 5/29 | <p>・完成した鳥居を飾って、羽黒山ごっこが始まった。</p>  <p>・茶屋や石段を作り、羽黒山ごっこの準備が出来てきている。異年齢児の友だちが遊びに来た際に、何が必要か自分たちで考える事で活動が盛り上がっている。</p> <p>T:「玉こん売ってますってここに書こう」 H:「チラシね！」 「食べに来てねって」 「玉こん何円にする？」 ・紙とマーカーペンを取りに行き、書き始める。</p> <p>T:「玉こんありますって書いて」 「ジュースも書いた」 「おもちも書こう」 T:「夏限定かき氷も！あるんだよ！夏限定！」</p> <p>・書いたチラシを茶屋や石段の脇に貼っていく。</p>  <p>・貼ったチラシを見ながら 「これ配ったら？」 「来てくださって？いいね！」 「配って来よう！」</p> | <p>◆友だちの姿を見て、どうして欲しいか伝えられるようになっているね！</p> <p>◆“もっと〇〇作りたい”“〇〇もあった”と、経験した事を思い出して、遊びへの意欲が高まってきている。</p> <p>◆実際の羽黒山にチラシは無かったが、今までのお店屋さんごっこの経験が活かされている。</p>  <p>★「ひらがなここに書いたから真似してみてね！」 ◆書きたいと思った事が、字への興味にも繋がっている。</p> <p>「玉こんだけじゃなくて、他のメニューも作らなくちゃね！」 「かき氷か！良さそうだね！」</p>  <p>「配ったら楽しそうだね」</p> |

| 時期 | ・子どもの姿 | ◆保育教諭のよみとり ★援助・かかわり |
|----|---|--|
| |  <p>・お店で売る玉こんにゃくを作ろうと複数名の子ども同士、話になる。 I：「新聞紙を丸めて作るのはどう？」</p> <p>・子ども達が新聞紙を丸めながらどう作っていくかを話す。</p> <p>M：「どうやって茶色にする？」 I：「絵の具で塗る？」 M：「でも乾くのに時間が掛かるよね」 T：「ガムテープ貼ったら？茶色になるよ。」 I、M：「いいね！先生、ガムテープちょうだい」</p> <p>・玉こんにゃくがたくさん出来、用意していたバットに入りきらなくなる。 H：「たくさん出来たね」 鍋に玉こんにゃくが入っている所を見る。 R、Y：「本物みたい！」 Y：「私、かき混ぜたい！」 I：「遠足で食べた玉こんにゃくって、割りばしに刺さってたよね」 R：「この玉こんにゃくも割りばしに刺してみよう」 H：「ガムテープが貼ってあるから刺さらない。針で穴を開ける？」 R：「針で穴を開けても割りばしは通らなそう。でも赤ちゃん達には、割りばしは危ないかな」 R、H、I：「どうしよう」 I：「これなら危なくないね」 R：「そうだ、刺すんじゃなくて剣にガムテープで玉こんにゃくを貼ったら良いんじゃない？」 H：「私達も羽黒山で2個食べたから、2個貼り付けよう」</p> | <p>★未満児クラスにチラシを渡し、来てもらう。</p>  <p>★子どもたちのアイデアを聞きながら、一緒に制作を行う。</p> <p>★子どもの手で丸めやすい大きさに保育教諭が新聞紙を切って渡す。他に子どもの声を予測してセロハンテープ、茶色のカラーポリ袋を準備する。</p> <p>◆自分なりにどう作ればいいのかを考え、友だちに話す事で遊びが広がっている。</p>  <p>★ガムテープを準備し、子どもと一緒に制作する。</p> <p>★大鍋を準備し、出来た玉こんにゃくを入れる。また、お玉も準備しかき混ぜられるようにする。</p>  <p>◆自分たちが経験した事を思い出しながら、遊びに生かそうとしている。</p> <p>★安全面を考慮し、厚手の広告紙を準備し、剣を作って割りばしの代わりにする事を提案する。</p> <p>◆遊びの中で数に触れながら、遊びが展開していている。</p> |

| 時期 | ・子どもの姿 | ◆保育教諭のよみとり ★援助・かかわり |
|----|--|--|
| | <p>・剣をたくさん作った後、ガムテープを使って玉こんを2個ずつ貼り付け、完成した玉こんをまた大鍋に戻した。</p> <p>・他の友だちが作った二の坂茶屋（店）に鍋を運び、店員になりきって遊び始める姿が見られた。</p> | <p>◆本物の鍋を使うことで、より本格的に遊びを楽しむ事が出来る。</p>  |

考察・課題

- ・実際に経験した活動が遊びに繋がった為、遊びに必要な物を準備する際、子ども達がイメージしやすく、アイデアが次々に出て、日々遊びが広がっていく様子が見られた。
- ・子どもの考えを実現出来るように材料等準備しておき、保育教諭と一緒に制作する事で遊びの環境が整っていき、更に遊びが盛り上がった。
- ・自分達で作った遊びの場（羽黒山）を他の学年の友だちにも楽しんでもらいたいという年長児らしい気持ちが芽生え、異年齢交流の場となった。
- ・学年全体で羽黒山ごっこを楽しむ事は出来たが、絵を描く、字を書く事等子どもにとって得意不得意がある為、一人一人の遊びへの興味や関心、取り組み方には差が見られた。子どもによって遊びの興味関心度は異なる為、遊びへの誘い方等が課題である。



《年中》





『「おもしろい」を見つけよう！～子どもの心をくすぐる保育教諭のかかわりと環境～』

事例2：「だいほうじおんせんを作ろう！」

<内容>

年長児の羽黒山ごっこに遊びに行ったことをきっかけに、年中の子ども達に自分たちも何か楽しいことができないか提案したところ、「ジュース屋さん」「かき氷屋さん」「フルーツ飴屋さん」「温泉」などいろいろなアイデアが出た。そこで、子ども達の思いを実現できる様、温泉に入りに行き、ジュースやかき氷、飴を食べて休憩できる温泉を作ることにした。作る場所やどんな材料が必要か話し合った後、制作に取りかかった。

| 時期 | ・子どもの姿 | ◆保育教諭のよみとり ★援助・かかわり |
|------|--|---|
| 6/19 | <p>・温泉用に準備した大量の牛乳パックを見て目を輝かせながら意欲的に活動している。</p> <p>・牛乳パックの口の部分をガムテープで止める作業では、ガムテープがうまく切れなかったり、牛乳パックの口の止め方がわからず、保育教諭に手伝ってもらおうとする様子が見られた。</p> <p>・保育教諭の声掛けに気づいたEが優しく教えてくれ、Aも嬉しそうに、安心して取り組んでいた。</p> <p>・牛乳パックの口をすべて止め終わると、どんな形のお風呂にしようか相談しながら置いていく。</p> <p>・置いた牛乳パックをガムテープで固定し、新聞紙をちぎってお湯に見立てて入れる。温泉ができるとみんな喜び、しばらく温泉に入って楽しむ。</p> <p>H：「看板もあるといいんじゃない？」 M：「空に星もあるといいよね！ロケットも飛ばそう！」 A：「雲もあるといい！」 H：「お金入れる場所も必要だよ！入浴券も作ったら？」</p> | <p>◆温泉づくりに必要な材料を準備し、制作への期待を高め、意欲的に活動に参加できるような環境を整えた。</p> <p>★作業に戸惑い、困っている子がいることを周りの子ども達に気付いて欲しいと思いい、「Aが上手くできなくて困っているみたいだよ。誰か教えてくれる人いないかな？」と声を掛ける。</p>  <p>◆共通の目的をもって活動することで、自分の思いだけでなく、友だちの意見も聞き入れながら、一緒に活動を楽しめるようになってきている。</p> <p>◆完成した温泉にみんな入ることで、満足感と達成感に繋がっている。</p> <p>★さらに温泉ごっこを楽しめるよう、温泉に必要なものは他にないか問いかける。</p> <p>◆温泉ができたことで、さらにアイデアが出てくる。友だちのアイデアを聞いて、どんどん思いが膨らんでいる様子が伺える。</p>  |

| 時期 | ・子どもの姿 | ◆保育教諭のよみとり ★援助・かかわり |
|------|---|--|
| 6/20 | <p>R：「先生！温泉の続きしよう！」 G：「早くやりたい！」</p> <p>・温泉の場所に行くと、作りたいものや飾りたいものなどのアイデアがあふれ、廃材を使って制作したものを温泉ごっこのお部屋に飾り付けていく。</p>  <p>・異年齢の友だちや他のクラスの先生がお客さんで遊びに来ると、積極的に誘導したり、一緒に加わって楽しむ様子が見られた。</p> <p>・異年齢の友だちの遊び方で気になる遊び方をしているときは、注意する様子も見られた。</p> <p>・お客さんが帰った後も、必要なものや装飾などいろいろなアイデアがでる。友だちの作ったものや、気づきをきっかけに、さらに次のアイデアや気づきに繋がっていった。</p> | <p>◆朝から温泉づくりを楽しみに登園してくる子が多かった。前日からの続きを作るということで、温泉ごっこへの期待が膨らんでいる。</p> <p>★自分の思いを実現できるように、廃材を準備し、環境を整える。</p> <p>◆作ったものを装飾していくことで、温泉ごっこの雰囲気が盛り上がっている。</p>   <p>◆自分達で作ったものを異年齢の友だちや他のクラスの先生が楽しんでくれることで更に満足感に繋がっている。</p>  <p>◆楽しく遊ぶためのルールや自分たちが作ったものを大切に遊んで欲しいという気持ちが出てきている。</p> <p>◆一度遊んで終わりではなく、アイデアが広がり、廃材を使って表現しながら、日に日に遊びが盛り上がっていった。</p> |

考察・課題

- ・「自分たちもやりたい！」をきっかけに、アイデアを出しながら、友だちと一緒に環境を整え、意欲的に楽しむ姿が見られた。
- ・同じ目的に向かって一緒に活動する中で、自分の思いを相手に伝えたり、友だちの思いに気付くいい機会になり、友だちと一緒に遊びを作っていく楽しさを味わうことができたように思う。
- ・温泉ごっこをできる場所を固定したことで、日常的に繰り返し遊びを楽しむ姿が見られ、異年齢交流が活発に行われた。
- ・温泉ごっこ以外のジュース屋さんやフルーツ飴屋さんも楽しんだが、遊びが単発になってしまっているので、温泉ごっこの繋がりをどのように持たせるかが今後の課題である。



《年少》

『一緒にやってみたい！！～自分の好きな事を見つけ、皆につたえてみよう！～』

事例3：「水族館を作ろう！」

以上見て行っている「大宝ランド」の異年齢交流をきっかけに“自分たちもやりたい”という思いが生まれてきた。7月初めに水族館に園外保育に行ったことで「水族館を作り、皆に見てもらいたい」という声があがり、水族館作りが始まった。

<内容>

| 時期 | ・子どもの姿 | ◆保育教諭のよみとり ★援助・かかわり |
|-----|---|--|
| 7/4 | <p>・大きな紙を見て大喜び。「ピンククラゲにしよう」「足はいっぱい」など、友だちと会話をしながら楽しんでいた。クラゲドリーム館が出来上がると「先生、魚も描きたい」「僕はさめ」「ヒトデ」 色々な魚の名前があがった。</p>  | <p>◆見て感じたことを表現出来る様に大きな画用紙を1枚準備したことで、クラゲドリーム館作りが始まった。また、少しずつ海の生き物に興味を持ち始めてきている。 ★制作の様子を見守りながら、図鑑などを準備し「頭はどんな形?」「何色にする?」など描きやすいように環境を整えた。</p> |
| 7/5 | <p>・画用紙に「大きな魚」「タコの足いっぱい描く」「クラゲのママ、パパ」と色々な魚を描いていた。</p> | <p>★事前に保育教諭が魚の形・描き方のコツを知らせることで安心できるようにした。 ◆子どもたちの描いた魚を大きな水槽に貼り、自分たちが想像した水族館が表現して欲しい。</p> |
| 7/6 | <p>J：「サメの目はきりっと」 T：「歯はギザギザでいっぱい」とサメの特徴に気付きながら描き始めた。</p>  | <p>◆色々な魚を描いている中で、色々な魚の種類に興味を示し始め、特徴をとらえられるようになってきている。描くだけでなく廃材などを使い立体の魚を作る事で更に特徴を捉えられるのではないかな。</p> |
| 7/7 | <p>・保育教諭が廃材を準備し、子ども達にどんな魚が作れるか問いかけてみた。 ・牛乳パックでは…「サメ」「エイ」 ・プリンカップでは…「クラゲ」「たこ」 ・丸い発泡では…「サメの歯」 ・サメ作りでは、「口をパクパクさせて、がぶっと食べるんだよ。」と伝えると、牛乳パックを口の形に変えパクパク動く口を見て、「先生、いいね!」「歯を貼る」と材料を探し始めた。</p> | <p>★子どもたちの思いが実現できるように廃材以外にもすずらんテープ、ビニールテープ、折り紙等教材を準備し環境を整えた。 ★牛乳パックを切りパクパクさせる。サメの歯になりそうな物を子どもに探してもらい、貼れるように準備した。</p> |

| 時期 | ・子どもの姿 | ◆保育教諭のよみとり ★援助・かかわり |
|-----|--|---|
| | <p>・歯を付けたサメを持ち嬉しそうに遊び始めた。</p> <p>・目はカッコよく、ギーっと目を描いた。</p> <p>・その後、廃材を見立てながら「たこ」「クラゲ」「かめ」など、沢山の海の生き物作りが始まった。</p> | <p>★サメに目がなかったので気付けるように声掛けをした。</p> |
| 7/8 | <p>・「幼稚園の皆に見せたい!」「いらっしゃいませってしよう」水族館の完成を喜んでいた。</p> | <p>◆完成した水族館にみんなを案内することで満足感に繋がっている様子が見られた。</p> |



考察・課題

- ・自分たちが実際に水族館を見学した事でイメージが湧きやすくなった。また、自分たちで作りたいアイデアがたくさん浮かぶ姿が見られた。
- ・子どもたちの思いを表現できるように一緒に作っていく事で、思いが形になる楽しさを感じている姿が見られた。中には、イメージした事を中々表現できずにいる子どもも見られたが、友だちの姿が刺激になり真似ることで表現する事が出来、達成感を感じていた。
- ・子どもたちの思いを表現するために保育教諭が手伝ってしまうことが多かった。今後は、多様な道具の使い方を身につけ、自分たちで作れるように促し、繰り返し楽しんでいきたい。

研究の成果（◎）と課題（△）

- ◎ 研究を通して、子ども達の主体的で対話的な活動を目指して、環境を整え、未満児や以上児が触れ合える機会を設け、子どもも保育教諭も共に楽しみウェルビーイングを感じられた。
- ◎ 年齢に合わせて、子どもたちの思いを表現できるように保育教諭も一緒に遊びに参加し、子どものアイデアを共に形にしていっていった。その中で、子ども達が思い描く事が形になる充実感を味わう姿も見られた。また、イメージした事を中々表現できずにいる子もいたが、友だちの姿が刺激になり、真似たり一緒に活動することで表現する事が出来、達成感を感じる事が出来た。
- ◎ 「大宝ランド」という園全体でのテーマで共通実践した事が、長期的に継続する事につながった。また、継続することで、子ども達から色々なアイデアが出てくるようにな主体的に遊びを展開することもできた。また、周りの友だちに認められたことで自信や自己肯定感にも繋がった。
- △ 未満児の場合、継続して遊べる場所や時間を確保することが難しかった。また、以上児の子どもたちがたくさん遊びに来たことで環境の変化で不安を示す姿も見られた為、交流の回数を重ねたり、少人数での交流の機会を設けると良かった。
- △ 以上児では、みんなが一緒に遊べるコーナーを固定し、月案会議の際、次の遊びの方向性を相談してきた。しかし、日々の保育の中での遊びの方向性など、職員間で話題にする時間の確保や、共通理解していくことに難しさもあった。また、クラス活動や行事に合わせると自由遊びの時間が変わってくるため、時間の調整が難しかった。
- △ 子ども一人一人の「大宝ランド」への興味関心の度合いが違ったり、全体へ遊びや活動内容を知らせたり、浸透させることが難しかった。保育教諭が他学年の様子を積極的に知らせ、一緒に遊びこめるように環境を整えていくと良かった。

まとめ

子ども達の主体的な遊びや活動の中には、子ども達が自分の力で成し遂げる喜びや、友だちや保育教諭と協力して遊びを繰り広げることに充実感や達成感を感じる場面がたくさん見られた。保育教諭が子どもに寄り添い、子ども達一人一人の興味関心を読み解きながら、より良いかわりや援助を考えていくことの難しさを感じた。しかし、一方で共に環境を作り出す協同者としてのかかわりを意識することも出来た。

また、遊びの連続性の中で、環境を見直し工夫し再構成するなど、保育教諭がPDCAサイクルを行うことで、より良い環境を作り出すことが出来たことは大きな成果となった。

今後も、子ども達が主体的で対話的な活動や遊びの中で、達成感や充実感を繰り返し感じながら、自己肯定感を高めたり、ウェルビーイングの高まりを感じられる保育活動を展開していきたいと思う。

子ども達の「それいいね。」「いっしょにやってみよう。」が響き合う保育を目指して、深い学びが更に広がるように今後も継続し、充実した保育活動を展開していきたい。

保育実践研究

一人ひとりの「こどもがまんなか」をまもる質の高い幼児教育を

～社会全体でつむぎ未来へつなぐために～

学校法人龍州学園

認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム

指導主任 土門 千都子

研究主題 自園の保育実践から

『いのち』を大切にし、生命をつなぐ」保育について考える

主題の設定理由 (ねらい) 本園は、曹洞宗持地院の境内にあり、園庭には「酒田大佛」がそびえ立つ。各保育室には「弥勒菩薩」の写真が飾られ、三仏忌にはお寺に足を運びお参りをする。2学期はお寺の先祖供養（森の山まつり）と同時に始まり、子どもたちも参拝する。昔から地域の人々に親しまれてきた「地獄絵図」も3日間展示し見ることができる。また、起伏に富んだ自然豊かな園庭はたくさんの動植物との出会いにあふれている。生き物に親しんだり、栽培物の成長を身近に見たり、世話をし収穫して旬を味わったりしている。「いのちの塔」という生き物のお墓があり、飼育動物がなくなった時には埋葬し手を合わせている。

現代は急速に情報化・AI化・グローバル化が進み、society5.0時代の到来が叫ばれ、社会はこれまでとは比較にならないほど劇的に変化していくとされている。そんな未来を生きていく子どもたちに必要とされている力が、学習指導要領が育成すべきと示している資質能力①「知識・技能」②「思考力・判断力・表現力」③「学びに向かう力・人間性」であり、特に③「学びに向かう力・人間性」が「非認知能力」として重要とされている。予測不可能な社会の変化にも力強く、自分らしく対応していける「人間性」を育てていくことの大切さを痛感している。

第6次山形県教育振興計画の中で、基本目標として「人間力に満ちあふれ、山形の未来をひらく人づくり」が掲げられ、『いのち』をつなぐ人「学びを生かす人」「地域をつくる人」が目指す人間像であると表記されている。その中でも、「いのち」の教育やおもいやりと規範意識といった「こころ」の教育が重要視され、本園の教育目標とも関連する。日ごろから大切にしているテーマであるが、目に見えて図れるものではないゆえにその取り組みについては悩む場面も多い。また、好きな遊びを中心とした保育での学びを大切にしながらも、行事の精査、進め方については、行事と普段の生活との兼ね合いを意識している。以上のことから、本園の仏教行事を含めた取り組みが、子どもたちの「いのち」「こころ」の育ちにどのように関係しているのか、子どもたちは具体的にどんなことを感じ取っているのか改めて検証していきたい。

◎研究の方法

- 1, 「いのち」の教育「こころ」の教育とは何かを改めて職員間で共通理解していく
- 2, 行事の取り組みからの考察
- 3, 子どもたちの事例・エピソードからの考察
- 4, 成果と今後の課題

◎研究内容

1, 「いのち」の教育「ころ」の教育とは何か、以下の点を共通理解していく。

- | | |
|--------------------|-----------|
| ・自然の摂理に関心を寄せる | ・感謝の思い |
| ・生命尊重（いのちの大切さに気付く） | ・物を大切にする心 |
| ・いのちの循環 | ・慈悲・慈愛の念 |
| ・思いやり | ・規範意識、道徳性 |

2, 行事の取り組みからの考察

〈仏教行事（三仏忌、いのちの供養、大仏建立の日、3,11 供養）〉

○三仏忌（花まつり、成道会、涅槃会）

三仏忌とは、お釈迦様の生涯を通した 3 つの大きな節目を記念する日である。お釈迦様の誕生「花まつり」、おさとり「成道会」、お亡くなり「涅槃会」にはお寺に行き、お参りをしている。

（花まつりの取り組みより）

会の流れ

- 1, 献灯献花
- 2, 読経
- 3, 黙想
- 4, うた「はなまつり」
- 5, ライド視聴
- 6, 住職の話



花まつりはお釈迦様誕生のお祝い。子どもたちはお寺に行き、年長組の代表が献灯献花を行う。お釈迦様がお生まれになった時には、ルンビーニの花園に甘い雨が降ったと言われていることから、花御堂のお釈迦様に甘茶を掛ける。前園長の住職よりお経をあげてもらい手を合わせたり、歌を歌ったりしてお祝いする。その後、「花まつり」のスライドを見て住職の話聞いた。

お釈迦様は誕生後すぐに立ち上がり「天上天下唯我独尊」と天を指さしたと言われていることや「世の中の人々を幸せにするために生まれてきたのだ」とお話されたことなどを聞く。

○いのちの供養

園庭に「いのちの塔」があり、生き物の「お墓」として、身近な飼育動物や捕まえた生き物が死んでしまった時に塔の近くに埋めて手を合わせている。そして、1年に1度、みんなで亡くなったいのちに手を合わせ、「いのち」について考え合っている。

（会の流れ）

- 1, 献灯献花
- 2, 読経
- 3, 黙想
- 4, うた「いかせいのち」
- 5, 住職の話
- 6, いのちについて（担当職員の話、絵本等）





「いのちの供養」は毎年行われ、その年の担当職員が子どもたちに伝えたいことや願いをもって、教材等工夫しながら話をしている。

(これまでの取り組みの例)

- ・せみの一生（英語の歌）
- ・生き物の寿命について
- ・絵本「いのちをいただく」（講談社） 「もうじきたべられるぼく」（中央公論新社） など

R6年度は、子どもたちに「いのちはつながっている」「たべることはつながること」の話をした。

土から葉っぱが育つ→葉っぱを小さな虫が食べる→小さな虫をトカゲが食べる→トカゲをヘビが食べる→ヘビをとりが食べる→とりが死ぬと土にかえる→土が生き物から栄養をもらう→土から葉っぱが育つ・・・

そうやっていのちはつながっている。たべることはつながること。

住職からは、「私たち人間も草花や、野菜、動物、魚などのいのちをもらって生かされている。だから、食事の前は、いのちを『いただきます』の気持ちを大切にしてほしい。そして、食事は私たちの口に入るまで、たくさんの人の苦勞、努力があって食べられること。（生産してくれた人、販売している人、調理してくれた人…）だから、感謝の思いを込めて『ごちそうさま（ご馳走様）』なのである」ことを聞いた。また、戦争で多くの命が失われていることについても触れ、子どもたちに対して「友達といっぱいけんかをしてもいいけれど、最後には仲直りできるといいね。相手を許すことができないと戦争につながっていくのかな。」との話もあった。

会の終了後の給食では、しっかりと手を合わせ、「いただきます」をする姿や、「残さず食べないともったいないよね。」「お肉もいのちをいただきますよね。」そんな子どもたちの声が聞かれた。また、今起こっている戦争についても考えを伝える姿があった。

(考察)

- ・お寺の外観や園庭付近の仏像、石碑などから仏教ならではの雰囲気を感じることができるが、三仏忌を通してお寺に足を運ぶことでは、直接匂い、光、音、空間、雰囲気を肌で感じることができる。そうした空間の中で耳にするお経や住職の話はとても特別で心に沁み込んでいくように感じるのではないだろうか。
- ・自然豊かな園庭であり、飼育動物もいる中で、生き物との出会いや死の場面に接する場面も多い。生き物との出会いに胸躍らせる、好奇心を駆り立てられる、親しみの思いを持つ一方で、「死」についても真剣に向き合うことが大切だと考える。そうした日常を振り返る上で「いのちの供養」が貴重な機会となっているのではないだろうか。
- ・実体験の中で、いのちの尊さに気付いていくことも大切だが、「いのちの供養」のように、行事として取り上げ、形から子どもたちと話し合っていくことも大切な経験ではないだろうか。今

は漠然としているが、いずれこの話を理解し、実感するときがくるのではないだろうか。

- ・いのちはつながっている。私たち人間もこの自然界の生き物。他の生き物同様、他の「いのち」をもらって生かされていることについて考え合う機会だと思う。当たり前目の前に並ぶ食事、ありがたく大切に思えるようになってほしい。それが、「いのち」を大切にすることや、SDGsの視点でも、「フードロスのないよう」「もったいない」の考えの土台になるのではないだろうか。
- ・戦争も含め現在の様々な問題に大人の予想よりもはるかに敏感に感じ取っているのではないかと感じる時がある。結論が出なくても、大人も一緒に考えていくことが大事なのではないだろうか。

〈夏季保育（お泊まり保育）川遊び、イワナつかみ〉

夏休み前の年長組の「夏季保育」の恒例の楽しみの一つが「川遊び・イワナつかみ」である。夏季保育の活動内容については、その年ならではの子どもたちの姿から子どもたちと共に考えていくが、「川遊び、イワナつかみ」については、保育者が願いをもって経験してほしいこととして、安全に配慮し専門知識のある「イヌワシの会」の皆さんの協力のもと毎年行っている。



「親元を離れ自分のことは自分でやろうとする」「友達のいいところを見付け協力しながら生活する」「自然を感じながらのびのびと活動する」ことをねらいとし、「普段なかなか経験することができない特別な経験を・・・」と願い活動を考えている。

川遊び自体も近年では各家庭単位では経験しづらく、自然環境の変化、安全面への配慮等から、いわなつかみも簡単にできる経験ではなくなっている。こうした時代だからこそ、幼児期の「今」子どもたちに経験させたいと願い活動する。

イワナつかみ後の川遊び、ネイチャーゲームの間に捕まえたイワナを焼き、昼食の弁当と共に焼きたてのイワナを食べるのが恒例になっている。

普段できない経験に期待を膨らませ、喜んで取り組む姿が見られた。実際に泳ぎ回るイワナを捕まえるのに奮闘しながらも何度も挑戦して捕まえる姿が見られた。楽しみながらチャレンジしてイワナを捕まえた子どもたちからは達成感も感じられた。捕まえたイワナを炭火で焼く様子も見た際には、「さっき捕まえたイワナだね」「いい匂い」「おいしそう」などの声も聞かれ、イワナの焼けるのをじっと見つめる子どももいた。昼食時には塩焼きにして食べた。自分たちで捕まえた味は格別なのか、「おいしい」と喜んで残さず頭からしっぽまで食べる姿があり、おかわりをする子もいた。

（考察）

実際に生きているイワナを捕まえて食べることについて、いろいろな考え方はあると思うが、本園では経験させたいことの一つとして大切にしている。

生き物に触れること、実際に手の中で動く魚を感じることで「いのち」を感じることができるとは思えないだろうか。さらには、その魚を目の前で調理して食べることについては、残酷さを感じる子もいるかもしれない。しかし私たちが日常で口にする魚や肉ではいのちをいただいていることを実感するのは難しい中、生き物のいのちをいただいていることを肌で感じる貴重な経験になるのではないだろうか。今は、「イワナつかみが楽しかった。」「焼いたイワナはおいしかった。」その思いが大きいかもしれないが、実際につかんだイワナの感触や、焼きあがったイワナの姿、食べた時のおいしい記憶がいずれ子どもたちの中で、「いのちをいただいて私たちも生かされて

いること」「だからこそ、大切に残さず食べるようにしよう」「大切に食べることもいのちをつなぐことになる」そんな思いにつながってくのではないだろうか。

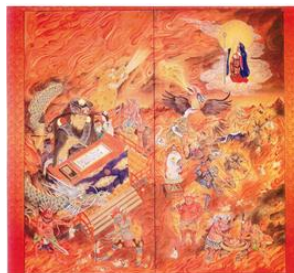
〈森の山まつり〉

毎年8月23日から25日の3日間、お寺の先祖供養のおまつりが行われ、長年地域の方々に親しまれ、たくさんの参拝客でにぎわう。大仏様や、園庭の森の山頂上のお堂のお参りをしたり、昔から伝わる「地獄絵」を拝観したりしている。また、夕方からは、園庭に夜店も並び子どもたちのお楽しみの一つでもある。最終日にはグラウンドで「お炊き上げ」が行われ、立ち上がる炎や空まで昇る煙は圧巻である。

子どもたちも森の山のお堂まで行き手を合わせたり、地獄絵図の説明を住職より聞く。

- ・お盆に返ってきたご先祖様が煙とともに空に返っていくおまつりである
- ・1年に1度だけ森の山のお堂のとびらが開いてお参りする
- ・地獄に閻魔様がいて、「浄玻璃の鏡」には生前の良い行いも悪い行いも映っている。
- ・針の山、血の海、火の車などの地獄についての話を聞く。

住職からは、うそをつかず正直であることの大切さや、生き物のいのちを大切にすること、人を傷つけず相手への思いやりを大切にすることなど、人として大事にしてほしいことの話聞く。



子どもたちは、森の山のお堂の前で静かに手を合わせお参りをした。地獄絵図の説明では少し怖がる子もいたが、真剣な表情で見つめ話を聞いている。興味津々に地獄について質問する姿も見られた。

「けんかをしたけれど、良くなかったと思って謝って仲直りした」「お友達を叩いてしまったけど今度はしないようにしよう」など、子どもたちなりに自分の生活を振り返る姿が見られた。

(考察)

- ・お寺のおまつりと共に2学期が始まるのは、本園の特色であり魅力の一つ。地獄絵図や灯籠、旗に囲まれお経と木魚の音を耳にするといった特別な雰囲気園生活が始まる。地域の方々が園庭に足を運び、大仏様や、森の山で手を合わせる姿を目にすることは、仏教ならではの空気感に触れる良い機会になっている。子どもたちもこの地域の一員であることを漠然とでも感じることができるとは思えないだろうか。
- ・地獄絵図については、この地域で昔から親しまれ、卒園生・OBの話題にもよくのぼる。記憶が鮮明にある方が多く、卒園後の人生のいろいろな場面で「閻魔様が自分を守ってくれた」「よくない事を考えそうになった時に、浄玻璃の鏡を思い出した。」など話す方もいた。子どもたちにとって、少し「怖い」思いをするかもしれないが、けしてそれが目的ではない。心の中に「地獄」の存在があることで自分自身を振り返ったり、律したり、一歩踏み出そうとしたりする「ところ」の根っこになってほしいと願っている。また、鮮やかな色彩が美しく文化的で、歴史も感じると話す方もいる。恐怖感だけではなく、高貴で尊いと感じさせる不思議さもあるように思う。

〈すくすく畑の活動〉

お寺側の広大な敷地にある「すくすく畑」での活動の中心となっているのが住職であり、「すくすく畑」の活動全般で関わりがある。住職は子どもたちにとって「畑の先生」のような存在である。

お寺に隣接していることから、お墓にお供えした花を細かく切り刻んだものを発酵させ肥料とし、畑の土壤にすき込んだ有機無農薬の畑である。1年を通して、年長組が中心となりそれぞれの季節の野菜の植え、苗植えをし、成長を見たり、世話をしたりして、収穫を行う。収穫した野菜は園でクッキングして年少組、年中組にご馳走しみんなで旬を味わっている。また、すくすく畑にある竹林でのたけのこ掘りや、大きな栗の木の下での栗拾いなども行っている。栗の木を囲んだツリーハウスは子どもたちに人気のスポットであり、自然の中でゆっくりと遊んだり、東屋では採りたての野菜をBBQにして食べたりしている。

(栽培、収穫した野菜)

ジャガイモ 人参 ほうれん草 たけのこほり きゅうり
ピーマン トマト なす ズッキーニ バジル さつまいも
白菜 大根 キャベツ 栗拾い

(夏野菜収穫・夏季保育での若草レストランの場面より)



[夏野菜の大収穫祭]

[夏季保育の若草レストラン]

自分たちで苗植えをした野菜がたわわに実り、収穫する際には目を輝かせ楽しんでとっていた。店頭で目にするより大きな野菜に驚く姿も見られ、かごいっぱい収穫した野菜に大喜びしていた。夏季保育では採りたての野菜のたっぷり入ったカレーやご馳走を「おいしい」と、いつもよりもたくさん食べる姿があった。

(考察)

畑の活動を通して、作物の成長を見たり、触れたり、収穫して食べたりする中で土から作物が生え、成長していく過程や実際に食べる経験をして自然の摂理を肌で感じていくことができるのではないだろうか。店頭で並ぶ子どもたちが目にする野菜がどんな風にできているのか知ることにも貴重な機会と思う。

成長の過程を時間を掛けて見守り、自分達で収穫することで、食べる時の思いも違うのではないだろうか。その季節ならではの恵みに感謝したり、旬の素材の味を「おいしい」と感じたり、大事に食べようとする姿勢につながっているように思う。

3, 事例・エピソードからの考察

〈事例Ⅰ（年中組）〉

年中児数名がダンゴムシを捕まえること楽しんでいる。少しずつ、「友達に見せたい」「保育室で飼いたい」といった思いが子どもたちから聞かれるようになり、飼育ケースに入れて保育室に持っていく。

| | 幼児の姿と保育者の援助 | 保育者の思い |
|----|---|---|
| 5月 | <p>A:「ほら！いっぱい捕まえたよ。」 B:「すごいね。」(続々と子どもたちが集まり、飼育ケースをのぞきこむ) しばらくみんなでダンゴムシを見ている。 保育者:「このダンゴムシどうする??」 A:「保育室で飼いたい。」 B:「もっと見たい。」 などのやり取りから翌日まで保育室に置いておく。</p> <p>翌朝 A:「あ、ダンゴムシが死んでる。」(悲しい顔つきで) B:「ホントだ、かわいそう。」 C:「なんで死んじゃったんだろう。」 保育者:「ほんとだね。なんでだろう。」 A:「餌が無かったからじゃない?」 B:「水もないといけないんじゃない?」 C:「さむかったかな。」 D:「ママに会いたかったんじゃない?」 E:「死んじゃったら、ママにも会えないね。」</p> <p>A:「いのちの塔に埋めてあげよう。」 保育者:「そうしようか。」 その後、子どもたち数人で「いのちの塔」にダンゴムシを埋めて手を合わせる。 その翌日からもダンゴムシ探しは続いた。その日の遊びの終結場面 保育者:「ダンゴムシどうする?」</p> <p>A:「この間は死んでしまってかわいそうだったから、逃がしてあげよう」 B:「そうだね。外なら、ご飯のお家もあるもんね」 C:「ママが帰って来るのを待ってるかもね。」 保育者:「そうだね。それじゃあ逃がしてあげようか。ダンゴムシさんまた遊ぼうね。」 A,B,C:「またね～またあそぼうね。バイバーイ」</p> | <p>捕まえることを存分に楽しんだ子どもたち。今度は、友達に見せたり、保育室に連れて帰ってじっくり見たい思いを大切にしていこう。それだけ、子どもたちはダンゴムシに関心を寄せているのだろう。「かわいい、飼いたい」など、親しみの思いが大きくなっているのがうれしい。</p> <p>このまま一晩おいたらどうなるだろうか。弱ってしまうかもしれない。もしかしたら死んでしまうかもしれない。どうしよう。子どもたちの思いは大事にしたい。</p> <p>死んでしまった。小さな「いのち」も大切な「いのち」。 かわいそうなことをしてしまった。でも、子どもたちとも考え合うチャンスかもしれない。子どもたちは、どう感じただろうか。そしてどうするだろう。</p> <p>子どもたちなりに、死んでしまったことを受け止め、なんで死んでしまったのか考えたり、ダンゴムシの思いに立った発言をしている。「いのち」について感じる大事な場面ではないか。 「いのちの塔」に埋めるということが子どもたちから出てくるのは、これまでも亡くなった生き物たちを埋めて手を合わせてきた経験の積み重ねと、「いのちの供養」などの行事から子どもたちが感じ、考えてきた経験があるからではないか。</p> <p>ダンゴムシのいのちに対してはとても申し訳ない思いが残るが、この経験が今度は死なないように、「いのち」がなくならないようにとの次の行動につながったのではないだろうか。</p> |

(考察)

園庭で生き物を捕まえるのはよく見られる光景だ。年少時代から虫探しに夢中になる子どもたちが多い。はじめは生き物を見付けたり、さわったりすることに興味があり、何度も何度も捕まえて満足する姿が見られた。次第に、「友達に見せたい」「飼ってみたい」などの思いが出てきて、飼育ケースに入れて保育室にもっていくようになり、何度も飼育ケースをのぞき込む姿からは、生き物への親しみが感じられる。

子どもたちの思いを大事にしたいと、翌日まで飼育ケースを保育室に置いたことで、死なせてしまった。そこから生き物の「いのち」について考える場面になったと思う。生き物にはいのちがあり死んでしまうことがあることに触れ、触ったり、捕まえたりして楽しく過ごすだけでなく、「いのち」には責任が伴うことを感じたり、気付く機会になったのではないか。子どもたちなりに、「楽しい」「かわいい」の先にどうするかまで考えるきっかけとなったように思う。

「いのちの供養」の経験や、これまでも亡くなった生き物たちを埋めて手を合わせてきた経験から「いのちの塔に埋めよう」といった声が上がった。形式として「いのちの塔」に埋めている子もいるかもしれないが、土に返すことで魂は天にのぼり、身体はやがて土の栄養となりそこから次のいのちにつながっていくことを漠然とでも理解している子どもたちもいるのではないかと感じた。

子どもたちが、遊びの中の実体験から、感じ、考え、翌日からは遊びの終結に逃がすようになった。決して「逃がす」ことが解決ではなく、子どもたちなりに考えて、「いのち」を大事にしようと感じ、行動していったことが大切なことだと思った。

今回保育者は子どもの動向を見守り、「逃がす」ことを急がず、子どもたちの気づきを大切にされた。様々な場面で答えを急がず、子どもたちを「見守る」「待つ」援助は常に意識しているが、今回のような「いのち」につながる場面の関わりについては「待つ」だけでなく、「促す」ことや、時に大人が「判断」する場面があってもいいのかもしれないと職員で話し合った。保育者自身も「いのち」との向き合い方を考えていきたい。

〈事例2（年長組）〉

岩の間に大きなカエルを見付け捕まえる。「みんなにも見せたい」と飼育ケースに入れて保育室に連れて帰る。子どもたちは図鑑を調べている。

| | 子どもの姿と保育者の援助 | 保育者の思い |
|-----|--|---|
| 10月 | A:「これ、ツチガエルじゃない？」 B:「本当だ、よく似てるね。でも少しちがうよ」 C:「ほんとだ、じゃあツチガエルではないんじゃない？」 A:「何カエルなんだろうね。」 A:「ツチガエルは湿ったところに住んでいるって・・・」 その後、図鑑で湿ったところに住んでいることや、隠れる場所が必要なことなどを調べ、飼育ケースに、土や枯れ葉などを入れてカエルのすみかを作る。子どもたちのアイデアから、保育室で飼育しているザリガニのえさや、食パンを飼育ケースにいれ数日様子を見るが食べていない様子。枯れ葉をどけて様子を見るがカエルはあまり動かない。 | 捕まえたカエルについて子どもたちが自分たちで調べている。何というカエルなんだろう。わくわく。 ツチガエルに似ていることは分かったようだ。 飼うために、図鑑で生態を調べて、必要なものを用意しようとしている。様子を見守ってみよう。自分たちで、納得のいくカエルの家ができたようだ。餌については、これまでの飼育動物の経験から市販のえさや食パンなどのアイデアが出された。たべるだろうか。まずは、子どもたちの思いを大切にやってみよう。 そっと湿度を保ったりしてきたが、弱ってきたのだろうか。市販のえさはやはり食べなか |

| | |
|--|--|
| <p>B: 「元気ないね。」 保育者: 「あまり動かないね。」 A: 「弱ってきたんじゃない。」 B: 「おなかすいてるからじゃない。たべもの でしょうか。」 A: 「図鑑にミミズって書いてあったよ」 B: 「よし！じゃあミミズ捕まえにいこう」 園庭の湿った枯葉付近の土を掘り起こしてミ ミズを捕まえてくる。 B: 「ミミズつかまえてきた」 保育者: 「図鑑のツチガエルはミミズを食べ るって書いていたけど・・・」</p> <p>G: 「でもさ、食べられたらミミズは死んじ ゃうんじゃん。」。</p> <p>保育者: 「そうだよね。」 A: 「でも、食べなきゃ、カエルも死んじやうよ」</p> <p>保育者: 「そうだね。」 G: 「でも、ミミズにもいのちあるじゃん」 しばらく、Aの思いに共感する子、Gの思い に共感する子どもたちで、話は平行線 保育者: 「どうしたらいいんだろうね。」 H: 「外なら、食べ物もいっぱいあるし、住み やすいうちがあるかも」 I: 「そうだよ。自分のお家が一番住みやすいよ」 J: 「ご飯もいっぱいあるかもね」 保育者: 「なるほど。どうかな？」</p> <p>しばらく考えて、 A: 「わかった、じゃ、逃がそう」 保育者: 「いいの？」 A: 「いいよ。また会えるよね。」 B: 「またあそこに見に行こう。」</p> | <p>ったか。この後子どもたちはどうするだろう か。</p> <p>前回図鑑には確かに「ミミズなど」と載って いた。 生きているものを餌としてあげるのはどうな のだろう。日ごろいのちの大切さに気付いて ほしいと願って保育しているが、こんな場面 ではどうしたらいいのか悩む。ミミズも生き ている、カエルも死なせたくない。子どもた ちと考え合う機会かもしれない。 カエルに親しみをもって世話をしている A や B の思いもよくわかるし大事にしたい。でも、 ミミズのいのちについても気付いた G の思い も大事にしたい。年長の今の子どもたちに、 何を大事にする？</p> <p>いのちはつながっているし、私達人間も他の いのちをもらって生きている。だからと言っ て生きているものを食べさせることが必要？ 「いのち」を大事にしたいが、どうしたらいい だろう。本当に悩む。</p> <p>H が園庭に戻す案を出した。カエルのいのち も大切にされた。自然界では、捕食の場面が 多々あると思うが今、それを見せる必要はない のではないか。 どちらにもたった一つの「いのち」があるこ とに気付き大切に思った子どもたちの思いに 今は共感していこう。 かわいがっていた A と B だが、友達の声に、 気持ちに折り合いをつけ、カエルの事を考え られたことが嬉しい。また、カエルに会える といいな。</p> |
|--|--|

(考察)

これまでも、園庭で見つけた虫などを飼った経験があり、自分たちですみかやエサなどを調べる行動をとったのだろう。虫の場合には、葉っぱや枯れ葉が餌になることが多かったが、今回は「生きている物を食べる」カエルについてどうすべきか保育者自身も本当に悩んだ。カエル側のいのちにとっては食べるものがなければ死んでしまうし、そのためには他のいのちある生き物を食べさせなければならない。カエルに親しみを持つ子どもたちの思いも大事にしたい。しかし、ミミズにもいのちがあり、そのことに気付いて立ち止まっている子の気付きも大切にしたい。何より、子どもたちに関わる一人の保育者として、自然界では当たり前に行われる食物連鎖とはいえ、どちらかの「いのち」について無くなることが予想され、その状況に対してどう向き合うべきなのか。かなりの葛藤があったのが正直なところである。

今回は子どもたちから、園庭に返す案がだされた。子どもたちなりにカエルのいのちもミミズのいのちも大切にしようと考えを出し合いながら方向を決める過程はとても大事であり、互いの思いや考えに刺激を受け自分の考えを広げる姿や、相手の思いになって考える姿、気持ちに折り合いをつけ解決に向かう姿が見られたことは嬉しい。自分の思いを伝えながらも、相手の考えも大事にしたり、尊重しようとする関わりが見られたことから子どもたちの成長を感じる。カエルの側の立場もミミズ側の立場も想像し寄り添う姿勢は、「自分」も「他者」も大切にする「こころ」の育ちにつながっているようにも思う。かけがえのない「自分のいのち」も「他者のいのち」も大切にする「人間性」につながってほしい。

園庭に戻したからといってミミズが食べられない保証はないし、カエルが死なないわけではないのかもしれないが、幼児期の「今」子どもたちに感じてほしい、考えてほしいことを思った時にどうだったのか。保育には決して正解は無く、子ども達の思い・考えを受け止め、対話的・応答的な関りの中で教師も一緒に悩み、考えていくことが大切だと感じる場面でもあった。

エピソードⅠ（年長組）

2学期に入り「森の山まつり」を経験したM。家で父親と一緒に作った「閻魔様の冠」を毎日かぶって登園する。保育者や友達に「えんまさまだ！」と声かけされるととても嬉しそうにし、冠を大切にしている。

クラスで子ども同士の思いのぶつかり合いがあった際、「えんまさまよんでこよう！」と、子どもたちでMを交えて解決に向かおうと話し合う姿が見られた。

（考察）

「えんまさま」の冠を作ってきた事例は初めてであった。単に「怖い存在」ではなく、Mにとって「えんまさま」はとても強く、正義感にあふれた憧れ・絶対的存在・ヒーローのように感じられたのかもしれない。自分自身が「えんまさま」に扮することで、憧れの存在に近づきたかったのかもしれない。友達とのやり取りの中、時折不安な表情を見せることもあったMにとって、自分が「強い」「すごい」と信じる存在と自分を重ねることで、自信や勇気をもらっていたのかもしれないと思った。

また、Mの扮する「えんまさま」はクラスの中でも大きい存在であり、子ども同士のトラブルの際、自分たちで「えんまさま」であるMを呼んで解決に向かおうとする姿には驚いた。「正義」や「道理」を貫き、公平に物事を見ているのが「閻魔様」であることが子どもたちの中にあり、「閻魔様が見ているかも」「閻魔様だったら、こんな時、どんなふうに考えるだろう・・・」と、生活の中に「閻魔様」を取り込むことで、日常の様々な場面も公平に、正直に、そして道徳的に解決に向かう道しるべにしているのではないかと思った。



4、成果と今後の課題

- ・お寺の境内にあり、園庭に大仏がそびえ立つという環境に加え、行事にはお寺に足を運び、お寺ならではの雰囲気や匂い、光、景色、静けさを感じることや、前園長である住職との関わりの中で五感で感じるものは大きく、大事にしていきたいと改めて感じた。また、お寺には大人の想像できない魅力があり、子どもたちの見え方、感じ方もそれぞれであると思った。
- ・行事と日常の遊び・生活との兼ね合いやバランスについてはいつも悩む。行事での個々の感じ方や受け取り方はそれぞれなため、共通体験は日常を振り返る良い機会になっている。また、自分の内面に目を向ける機会になると共に、他者に思いを向ける機会にもなっていると思った。
- ・「三仏忌」や「いのちの供養」といった仏教行事を通して、お釈迦様の教えや、いのちについて、子どもたちの生活に関連付けながら、形からでも願いをもって話をしていくことも心に残る大切な経験であると思う。畑の取り組みやイワナつかみなどを通して、自然の摂理や、いのちの循環を体験として肌で感じることを願い今後も取り組んでいきたい。また、日ごろの遊びを中心とした保育の中で子どもたちの体験や気づきに共感的にかかわっていきたい。こうした実際の経験と、「いのちの供養」などの行事の話がリンクして、少しずつ子どもたちの中に落とし込まれ、「こころ」が育まれていくように感じた。
- ・規範意識や道徳性については子どもたちの経験の中で時間をかけ育まれていくものと思う。まわりの人・ものとのかかわりの中、少しずつ積みあがっていくものだと思うが、その際、地獄の話や住職の言葉、行事での取り組みが子どもたちを動かすきっかけとなっている場面もあり、日ごろの保育の取り組みとのつながりを感じた。
- ・「いのち」への責任が伴う生き物との触れ合いの場面や「いのち」を取り上げた行事の際には、「自分」も「他者」も大切にできる心の育ちのきっかけになっていると思う場面も多くあった。こうした経験の積み重ねから「自分のいのち」も「他者のいのち」も大切に思う心が育っていくのではないかと思う。そこが土台となり、「かけがえのない自分」に気づき自尊心が芽生え、多様性・個性を尊重できる人間性の育ちにつながっていくのではないかと思った。
- ・ある時はクルーズ船の乗客が大仏様を見に訪れる機会もあり、様々な国、立場の人々との交流は貴重である。地域に伝わる伝統・文化に触れたり、訪れる人たちとの交流を通して、地域の一員としての意識が育っていくのかもしれない。地域に開かれた園としての役割を自覚しながら子ども達と生活を共にしていきたい。
- ・行事、日常の生活がつながっていることを意識し、普段から何を大事にしていくのかを保育者が共通理解し、関わり、環境構成を心掛けていくことが大切だと改めて感じる。特に、「いのち」については難しく、保育者自身も考え続けていくことが大切だと思った。
- ・今回の研究を通して、仏教ならではの環境・雰囲気に触れて、いのちを大切にすることや思いやりのこころを持つといった、本来、人として当たり前のことについて、自然と子どもたちの中に沁み込んでいるもの、育っているものを改めて見直すことができた。この恵まれた環境、特色を生かし、今後も『「いのち」を大切にし、生命をつなぐ』保育について考え、実践していきたい。

【参考・引用文献】

(引用) 山形県第6次教育振興計画

第 3 編

教育研究活動
報告

令和6年度 研修事業実績

| 名称 | 期日 | 会場 | 内容 | 参加者 |
|----------------------------|----------------|------------|--|------|
| 第1回設置者・園長等研修会 | 5月9日 | 山形テルサ | 内容 子どもの人権・権利の理解 講師 株式会社保育のデザイン研究所研究員 高城 恵子 氏 | 54名 |
| 第2回設置者・園長等研修会 | 6月10日 | 山形テルサ | 内容 新制度の見直しと今後の園経営の在り方 講師 学校法人マハヤナ学園理事長 幼保連携型認定こども園マハヤナ幼稚園・ミルフィーク保育園園長 石田 義明 氏 | 46名 |
| 山形県幼児教育研修大会 | 11月6日 | 山形ビッグウイング | 内容 幼児教育の社会的意義を社会に発信する 講師 武蔵野東第一・第二幼稚園園長 加藤 篤彦 氏 | 70名 |
| 〈全般向け〉教職員研修会 | 6月25日 | 山形テルサ | 内容 子ども理解と保育者の援助の在り方 講師 和泉短期大学児童福祉学准教授 久保 小枝子 氏 | 56名 |
| 〈若手リーダー向け〉 第1回教職員研修会 | 7月22日 | 山形テルサ | 内容 社会人としての役割 講師 社会保険労務士法人ゆびすい労務センター代表社員 平 幸次 氏 | 46名 |
| 〈若手リーダー向け〉 第2回教職員研修会 | 11月13日 | オンライン | 内容 観察の視点と記録 講師 玉川大学教育学部乳幼児発達学科教授 大豆生田 啓友 氏 | 69名 |
| 〈中核・専門リーダー向け〉 第1回教職員研修会 | 8月2日 | 山形ビッグウイング | 内容 自園の保育を語るリーダーの育成、保育者の協働 講師 関東学院大学教育学部こども発達学科准教授 三谷 大紀 氏 | 51名 |
| 〈中核・専門リーダー向け〉 第2回教職員研修会 | 10月23日 | 山形ビッグウイング | 内容 ミドルリーダーとしての役割 講師 和洋女子大学人文学部こども発達学科教授 矢藤 誠慈郎 氏 | 51名 |
| 保健衛生・安全対策研修会 | 6月3日 | 山形テルサ | 内容 子どもの育ちを支える保健衛生・安全対策 講師 神奈川県立保健福祉大学教授 臺 有桂 氏 | 46名 |
| 食育研修会 | 7月31日 | 山形ビッグウイング | 内容 子どもの健康と食生活・食育の意義 講師 上越教育大学大学院学校教育研究科臨床・健康教育学系教授 野口 孝則 氏 | 61名 |
| 新規採用・ 若手教職員等研修会 | 6月17日 | 私学会館 | 内容 社会人としてのモラル・ルール・マナーを知る 講師 株式会社日本総合音楽研究所常任理事 小松 明子 氏 | 30名 |
| 教員研修大会 酒田大会 | 10月11日 | 遊佐町 酒田市 | 【公開保育・研究協議】 第1分科会（認定こども園杉の子幼稚園） 講師 秋田大学・秋田大学大学院教授 山名 裕子 氏 第2分科会（アテネ認定こども園） 講師 羽陽学園短期大学教授 高桑 秀郎 氏 第3分科会（認定こども園酒田幼稚園） 講師 山形県教育局義務教育課指導主事 倉岡 寿幸 氏 第4分科会（認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム） 講師 群馬大学名誉教授 松永 あけみ 氏 第5分科会（認定こども園浄徳幼稚園・じょうとく保育園） 講師 洗足こども短期大学・鎌倉女子大学非常勤講師 亀ヶ谷 元讓 氏 第6分科会（認定こども園天真幼稚園） 講師 羽陽学園短期大学教授 渡辺 聡 先生 | 298名 |
| 後継者養成講座 | 11月28日 ～30日 | 福岡県糸島市 | 内容 次世代リーダーのマネジメント（経営・組織管理） 視察 学校法人瑠璃学園瑠璃幼稚園 他 | 9名 |
| 〔共催〕 公開セミナー | 12月5日 | 山形テルサ | 内容 新しい知見で考える防災対策 講師 株式会社危機管理教育研究所代表 国崎 信江 氏 | 32名 |

令和6年度 山形県私立幼稚園・認定こども園教育研究会 部員一覧

| | 氏名 | 法人/役職名 | 園/職名 | 備考 |
|--|----|--------|------|----|
|--|----|--------|------|----|

〔山形県私立幼稚園・認定こども園協会（教育研究委員会）〕

| | | | | |
|----|--------|--------------|---------------------|-------|
| 1 | 金沢 友治 | 学校法人金沢学園/理事長 | | 担当副会長 |
| 2 | 後藤 裕美 | 学校法人富澤学園 | 東北文教大学付属幼稚園/教頭 | 委員長 |
| 3 | 岩月 真由美 | 学校法人善行寺学園 | 天童幼稚園/園長 | 副委員長 |
| 4 | 山口 由香 | 学校法人酒田幼稚園 | 認定こども園酒田第二幼稚園/教頭 | 副委員長 |
| 5 | 木村 晃 | 学校法人木村学園/理事長 | 認定こども園長井めぐみ幼稚園/園長 | |
| 6 | 菅原 延昭 | 学校法人城南学園/理事長 | 認定こども園かしのみ幼稚園/園長 | |
| 7 | 遠田 裕子 | 学校法人杉の子学園 | 認定こども園杉の子幼稚園/園長 | |
| 8 | 花輪 陽子 | 学校法人金井学園 | 認定こども園金井こども園/園長 | |
| 9 | 三吉 圭子 | 学校法人仙英学園 | 認定こども園ゆりかご幼稚園/園長 | |
| 10 | 渋谷 広美 | 学校法人高橋学園 | 認定こども園まつかわ幼稚園/教頭 | |
| 11 | 遠藤 誠 | 学校法人椎野学園 | 米沢中央幼稚園/園長 | |
| 12 | 本田 淳 | 学校法人鶴岡城南学園 | 幼保連携型認定こども園城南幼保園/園長 | |

〔山形地区（山形市私立幼稚園・認定こども園協会）〕

| | | | | |
|----|--------|----------|----------------|--|
| 13 | 阿部 美樹 | 学校法人富澤学園 | 東北文教大学付属幼稚園/教頭 | |
| 14 | 尾形 亜希子 | 学校法人菅藤学園 | 南山形幼稚園/教諭 | |

〔村山地区（村山地区私立幼稚園・認定こども園協会）〕

| | | | | |
|----|-------|-----------|----------------------|--|
| 15 | 尾崎 美幸 | 学校法人花岡学園 | 楯岡幼稚園/主幹教諭 | |
| 16 | 仙野 亮子 | 学校法人尾花沢学園 | 幼保連携型認定こども園尾花沢幼稚園/教頭 | |

〔米沢地区（米沢市私立幼稚園・認定こども園連合会）〕

| | | | | |
|----|--------|----------|----------------------------|--|
| 17 | 五十嵐 真美 | 学校法人巨溪学園 | 普慈幼稚園/教頭 | |
| 18 | 小口 美由紀 | 学校法人松原学園 | 幼保連携型認定こども園ひばりが丘幼稚園/指導保育教諭 | |

〔置賜地区（置賜地区私立幼稚園・認定こども園協会）〕

| | | | | |
|----|--------|--------------|-----------------|--|
| 19 | 宇津木 純子 | 学校法人南陽学園/理事長 | 宮内認定こども園/園長 | |
| 20 | 羽田 尚子 | 学校法人南陽学園 | 宮内認定こども園/主幹保育教諭 | |

〔最上地区（最上地区私立幼稚園協会）〕

| | | | | |
|----|-------|----------|------------------|--|
| 21 | 香澤 美紀 | 学校法人向陽学園 | 認定こども園向陽幼稚園/主任 | |
| 22 | 大沼 美穂 | 学校法人平和学園 | 新庄幼稚園認定こども園/主幹教諭 | |

〔鶴岡地区（鶴岡市私立幼稚園・認定こども園連合会）〕

| | | | | |
|----|-------|-----------|---------------------|--|
| 23 | 小杉 隆 | 学校法人鶴岡学園 | 認定こども園鶴岡幼稚園/園長 | |
| 24 | 石川 温子 | 学校法人いなば学園 | 幼稚園型認定こども園いなば幼稚園/教諭 | |

〔酒田地区（酒田地区私立幼稚園・認定こども園連合会）〕

| | | | | |
|----|-------|------------|--------------------|--|
| 25 | 齊藤 奈央 | 学校法人酒田幼稚園 | 認定こども園酒田第二幼稚園/教務主任 | |
| 26 | 高橋 優花 | 学校法人天真林昌学園 | 認定こども園天真幼稚園/教諭 | |

〔紀要編集部（庄内・最上地区担当）〕

| | | | | |
|------|-------|-----------|---------------------------|--|
| (21) | 香澤 美紀 | 学校法人向陽学園 | 認定こども園向陽幼稚園/主任 | |
| (24) | 石川 温子 | 学校法人いなば学園 | 幼稚園型認定こども園いなば幼稚園/教諭 | |
| 27 | 高橋 智子 | 学校法人龍州学園 | 認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム/保育教諭 | |

令和6年度 教育研究委員会の活動記録

| 回 | 期日 | 主な内容 |
|------------------|--------|---|
| 【委員会】 | | |
| 1 | 5月31日 | <ul style="list-style-type: none"> ・顔合わせ ・当年度事業の確認並びに担当者選定 |
| 2 | 8月9日 | <ul style="list-style-type: none"> ・当年度事業の実施状況等報告 ・保育における課題等情報交換 ・親睦交流会 |
| 3 | 10月31日 | <ul style="list-style-type: none"> ・次年度事業の企画立案について ・第32回東北地区私立幼稚園設置者・園長研修会 山形大会 (第1分科会)の企画立案について |
| 【幼児教育連絡会】 | | |
| 1 | 7月1日 | <ul style="list-style-type: none"> ・意見(情報)交換 「保育を取り巻く今日的課題」 |
| 【委員会】 | | |
| 1 | 11月20日 | <ul style="list-style-type: none"> ・令和6年度協会主催研修事業について(実施状況) ・研修スタンプ発行を希望する場合の手順について(確認) ・令和6・7年度教育研究課題について(情報提供) ・地区研究会活動における活動課題について(情報交換) |
| 【紀要編集部会】 | | |
| 1 | 1月～3月 | <ul style="list-style-type: none"> ・令和6年度紀要原稿の校正作業 |

編集委員

沓澤 美紀（認定こども園向陽幼稚園）

石川 温子（幼稚園型認定こども園いなば幼稚園）

高橋 智子（認定こども園若草幼稚園・若草ベビールーム）

令和6年度

山形県私立幼稚園・認定こども園協会 紀要 (第54号)

発行者 公益社団法人山形県私立幼稚園・認定こども園協会
山形市松波 4-6-11（山形県私学会館内）

TEL 023-641-2323

編集 山形県私立幼稚園・認定こども園教育研究会 紀要編集部

発行日 令和7年3月